明治十二年
明治天皇御下命
「人物写真帖」

——四五〇〇余名の肖像

明治十二年明治天皇御下命「人物写真帖」

――四五〇〇余名の肖像

Portrait Photograph Albums: By the Imperial Order of the Meiji Emperor, 1879

Portraits of Over 4,500 His Subjects

平成25年1月12日(土)~3月10日(日)

January 12 (Sat.) – March 10 (Sun.), 2013

宮内庁三の丸尚蔵館

The Museum of the Imperial Collections,

Sannomaru Shōzōkan

目　次

3　ごあいさつ　Foreword

4　明治天皇御肖像、『明治天皇紀』明治12年11月19日条

5　《明治十二年明治天皇御下命「人物写真帖」》－その内容構成と制作事業

25　明治初中期にみる写真事情

27　明治12、13年の肖像－本写真帖に収められた肖像写真から

90　四五〇〇余名人名一覧

116　【資料】写真台紙にみる国内外の写真館

凡例

・本図録は、平成25年1月12日（土）から3月10日（日）までを会期とする展覧会、〈明治十二年明治天皇御下命「人物写真帖」－四五〇〇余名の肖像〉の解説図録である。
・写真保護のため、会期中に展示箇所の入れ替えを行う。
・本展覧会の企画は、三の丸尚蔵館学芸室が行った。
・本写真帖の調査は当館研究員・松谷芙美が担当し、同調査補佐員・中村一紀の助力を得た。
・本図録の解説は、5～24頁の概説は主任研究官・太田彩と松谷が共同でまとめ、25～26頁のコラムは中村が執筆した。27～89頁の各人物の解説は、松谷、中村のほか、主任研究官・五味聖、研究員・岡本隆志、同・斉藤全人の協力によってまとめ、一部、当庁書陵部図書課研究職員の協力を得た。
・本図録掲載の写真は、福島省、綿引雅俊（以上、株式会社インフォマージュ）が撮影した当館所蔵のデジタル画像による。

ごあいさつ

19世紀中頃、写真技術がわが国に初めてもたらされてから、わずか20年ほどの間に写真は急速に普及し、各地に写真師が登場しました。新たな明治という時代を迎え、その記録性が重視された写真は、明治天皇の御巡幸や全国の古器旧物の記録など、公的な活動にも用いられました。そうした中、明治11年（1878）に大蔵省印刷局に写真撮影所が設けられ、公の機関としての活動が開始されました。

本展で紹介する「人物写真帖」の制作は、明治12年、明治天皇が深く親愛する群臣の肖像写真を座右に備えようと、その蒐集を宮内卿に命じられたことに始まります。そして、宮内省主導のもと、大蔵省印刷局が撮影や写真帖の制作を担当し、この事業は進められました。現存するこの写真帖の総冊数は39冊、有栖川宮幟仁親王ほか皇族15方を始め、諸官省の高等官ら4531名が収められており、そこには、幕末から明治維新にかけて、改革に奔走し、新政府の成立に尽力した人物に加え、各分野で日本の近代化を担った人々の姿があります。また、このうちの15冊には、肖像写真とともに小色紙に記された621名分の詠進歌が収められており、本作品制作の特殊性を示しています。

自らの姿を撮影する機会の少なかった時代、この写真帖のための肖像撮影が、初めての体験であった人も少なくなかったでしょう。多くの高等官がその関心の有無にかかわらず写真撮影を経験したことは、日本国内において、その普及を格段に進めることにつながったと考えられます。

今回の展覧会では、わが国の写真の歴史において、重要な役割を果たした事業として位置づけられる本作品の全容と共に、若き明治天皇を支え、日本の近代化の礎を築いた人々の姿を紹介いたします。

平成25年1月

宮内庁三の丸尚蔵館

Foreword

Following the initial introduction of photographic technology to Japan around the middle of the 19th century, photography proceeded to spread rapidly in a short span of about twenty years. During that span, photographers sprung up across the nation. With the advent of the era known as the Meiji period, due to the value placed on their ability to record scenes in history, photographs came to be used in public activities such as keeping visual records of Imperial tours by the Meiji Emperor and of antiques from around Japan. Amid such circumstances, a photography studio was established at the Printing Bureau under the Ministry of the Treasury in 1878, which marked the commencement of photographic activities by a public institution.

The production of the "Portrait Photograph Albums" featured in this exhibition has its roots in an order issued in 1879 to the Minister of the Imperial Household by the Meiji Emperor, who sought to keep by his side a collection of portrait photographs of his subjects who he so dearly loved. With that Imperial Order having been given, under the leadership of the Imperial Household Ministry, this project was put in motion with the Printing Bureau under the Ministry of the Treasury overseeing photography and the production of the accompanying photograph albums. They exist today consisting of 39 albums in total, and contain portraits of Prince Takahito of Arisugawa as well as a total of 4,531 senior officials from government offices, including 15 members of the Imperial Family. Among those are images of individuals who strove for reform and dedicated themselves to establishing a new government, as well as individuals responsible for the modernization of Japan in various sectors, from the final years of the Edo period up through the Meiji Restoration. Moreover, 15 out of the aforementioned 39 albums contain poems by 621 individuals that are inscribed on a small *Shikishi* poetry card along with their portrait photographs. These are indicative of the particularities that defined the production of these albums.

In an era where there were few chances to photograph one's image, the portrait photography used to produce these albums was likely the first such experience for many individuals. It is believed that the experience of numerous senior officials of having their picture taken, regardless of what their interest in photography might have been, helped dramatically propel forward the popularization of photography in Japan.

Through this exhibition, we will introduce these albums, which have their collective place in the history of photography in Japan as a project that fulfilled a crucial role, in their entirety, as well as imagery of the individuals who supported the young Meiji Emperor and built the cornerstone of Japanese modernization.

January, 2013

The Museum of the Imperial Collections,
Sannomaru Shōzōkan

宮内庁三の丸尚蔵館所蔵　出品作品一覧　（第61回　明治十二年明治天皇御下命「人物写真帖」－四五〇〇余名の肖像）

作品番号	作品名	作者名	員数	時代	ページ
	明治十二年明治天皇御下命「人物写真帖」		三十九冊	明治13年頃（1880頃）	p. 5-119

明治天皇御肖像（明治6年10月8日、内田九一撮影）

往年侍補高崎正風、同元田永孚と御前に祗候せる日、明治功臣の写真を蒐集して添ふるに、其の歌詩を以てしたまはば、感興頗る深かるべき旨を聖聴に達し、又明治の初年故大久保利通が伐木流行を憂ひて、

音に聞くたかしの浜の浜松も
世のあた浪はのかれさりけり

と詠ぜるによりて、該浜松を伐採すること中止せられたりと云ふ逸話、山県有朋が明治元年長岡攻撃の際、

あた守るとりてのかかりかけふけて
なつも身にしむ越のやまかせ

と云ふ吟詠を留めし事等を奏聞せることありき、天皇の群臣を深く親愛したまふや、現任文武百官の写真を座右に備へたまはんとし、之れが蒐集を宮内卿に命じたまふ、是の日宮内卿、聖旨を太政官及び各官省へ伝へ、准奏任官以上の写真を聚収せんことを請ふ、又其の紙型及び官位勲等記入方を一定し、服装は成るべく洋服とし、撮影費は総て宮内省之れを負担し、在京者は印刷局に於て撮影することとす、尋いで麝香間祗候其の他有位華族に之れを達す、翌十三年三月二十二日太政官は、参議大隈重信等六人を除くの外、大臣以下三十八人の写真集まれるを以て、一人三葉宛を宮内省に送付す、同年同月天皇、更に各官省准奏任官以上並びに麝香間祗候、其の他有位華族の歌詩を蒐集したまはんとす、是に於て宮内卿は、各官省詠進者の人名等を調査し、而して四月、歌題を「名所花」、詩題を「雨後春村」と賜へる事、詠進期限は五月にして用紙を下付せらるる事等を通告し、尋いで又其の書式（料紙は色紙）及び御題以外の旧作を進献すとも不可なき旨の通牒を発す、但し宮内省の奏任官・准奏任官以上に賜へるは歌題「禁庭菊」・詩題「山園秋夕」にして、有位華族に賜へるは「初雪」と「冬晴驟暄」となり、又四月、親王・同御息所に、歌題「鶯有歓声」・詩題「芍薬始華」の二つを賜ひて同じく詠進せしめたまふ、

『明治天皇紀』第四、明治十二年十一月十九日条
（新字に改めて表記）

明治十二年明治天皇御下命「人物写真帖」
――その内容構成と制作事業

1. はじめに

近年進めてきた当館所蔵の写真資料の調査の中で、近代皇室の初期の事業においても、またわが国の写真史上においても、重要であり、貴重な資料の存在が明らかになった。それが、今回紹介する《明治十二年明治天皇御下命「人物写真帖」》である。

本写真帖の制作については、左頁の通り、『明治天皇紀』明治12年(1879)11月19日条に記されている。それによれば、明治天皇(1852-1912)は群臣を深く親愛されたため、彼らの写真を自らの座右に備えようと、その蒐集を宮内卿に命じられたという。時の宮内卿・徳大寺実則(1848-1919)は、直ちに諸官省に対して、奏任官以上および准奏任御用掛の写真を蒐集する旨の通達を出した。こうして始まったこの事業は、わずか1年ほどの間に急ピッチで進められてほぼ完了したと考えられ、事業の成果は全39冊の写真帖を現在に伝えている。写真帖には、皇族15方をはじめ諸官省の高等官ら、総勢4531人の姿が収められており、写真の焼付枚数は合計9000枚にものぼる。

この大事業は、宮内卿が中心となって宮内省主導のもとに進められ、撮影や写真帖の調製などの実作業は、大蔵省印刷局が尽力し、宮内省と共に制作を進めたと考えられる。その工程の様子は、当庁のほか、各所に現存する諸史料から知ることが出来、変更等を重ねながら進められていったことが分かる。わずか1年ほどの間に、国内各地、さらには外国在住の人たち、総勢4500余名にも及ぶ人数の写真の蒐集を行い、それらをまとめて写真帖の制作を行うことを可能にしたのは、その制作の契機が明治天皇の御下命によることの意義は大きい。そして、このような高等官の肖像を集成した写真帖の作成はこの一回限りであったが、わが国の写真草創期における空前の規模の大事業の成果として、本写真帖が現存する意義もまた非常に大きい。

写真帖に収められた肖像の彼らは、28歳の若き天皇を支えて、新しい近代日本のために尽力した人々である。この中には、後に様々な分野で活躍して知られた人たちが多く含まれている。この時の彼らの姿は、これまで知られていなかった彼らの履歴における確かな一齣でもある。本写真帖は、その制作そのものの重要性と、収められた人々の姿の貴重性、そのいずれもが、近代皇室、そして近代日本史に、新たな多くの視点を与えることであろう。

本写真帖は、写真のまとめ方の方針によって帖の装丁や焼付等の収め方が異なっている。詳細な調査によって、それらは大きくは２種類にまとめられることが判ったため、それを〈Ⅰ類〉〈Ⅱ類〉と分類した。さらに、〈Ⅰ類〉は内容によって２種類に分けられることから、それをA、Bの二つのタイプに整理した。これらの詳細については、それぞれの内容を次頁より、また、続く16頁より制作事業の様子を紹介している。

2. 写真帖の構成と内容

〈Ⅰ類 A〉

小色紙入・挿入式写真帖　15冊

装丁：総革装の洋綴製本　材質：印画紙－鶏卵紙、小色紙－金装飾・紙本墨書
丁数：各25葉
法量：〈Ⅰ類 A－1〉縦40.4×横29.5×厚7.5㎝（各帖の詳細は14頁を参照）
写真枚数：709枚　収載人数：709名　小色紙枚数：621枚

〈Ⅰ類 A〉の写真帖では、各頁に１名を配し、頁上部にはその人物が詠じた和歌あるいは漢詩を認めた小色紙が、頁下部にはその人物の肖像写真が収められている。肖像写真はキャビネサイズの写真台紙に焼付が貼り付けられ、小色紙と共に、袋状になった頁装丁の上下より、それぞれ差し込んで収められている。また写真台紙には焼付の下に氏名、官職位、出身が、裏面には年齢が記載される（右頁及び17頁を参照のこと）。

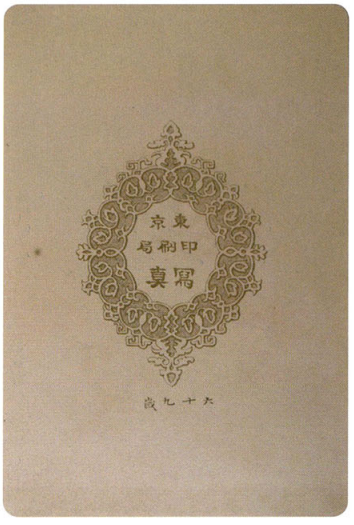
各頁のアルバム台紙は2㎜厚の厚紙で、小色紙（縦12.5×横14.5㎝）と写真台紙（16.5×11.0㎝）を収める場所に、それぞれの形に合わせて厚紙を切り抜き、その厚紙の両面に鳥の子色の上質紙を貼り合わせ、表裏ともに天地の小口の一部を糊付けせずに挿入口として残した袋状に仕立てている。この上質紙は、印刷局で製造された“局紙”と呼ばれる丈夫な紙で、その局紙には、色紙用の窓（10.0×12.0㎝）と写真用の窓（楕円型12.0×9.0㎝）が切り抜かれて、窓部周縁には蝶の装飾文様、また頁周縁には草花文様がそれぞれ金色で装飾されている。

また写真帖の表紙は、表裏共に紺色の革装で、金箔を用いた型押しによって、中央は連珠円文に鳳凰を表し、その周囲に草花文様を配して四周で囲み、さらに外側を向かい合う尾長鳥と草花文様を配して三重の四周で囲み、荘重な趣としている。さらに、三方の小口には金付（金箔押し）が施されて金鍍金の留め金具が装着され、当時の最高の仕立てが施されている様子が伺える。そして15冊のうち、「皇族　大臣　参議」、「編修官」の2冊には、背革に「偕楽」（共に楽しむの意）の文字と「印刷局製造」の銘が入れられ、表紙内側の周縁には、葡萄唐草文様があしらわれるなど、全体の中でも最も格の高さを感じさせる装飾となっている。

〈Ⅰ類 A−1〉より
第1頁目 有栖川宮幟仁親王

秋のうたの中に
一品幟仁親王
をしねほす山田
のいほり見わたせは
風にみたるゝ秋の
むら雨

アルバム台紙より抜き取った写真台紙



同上裏面

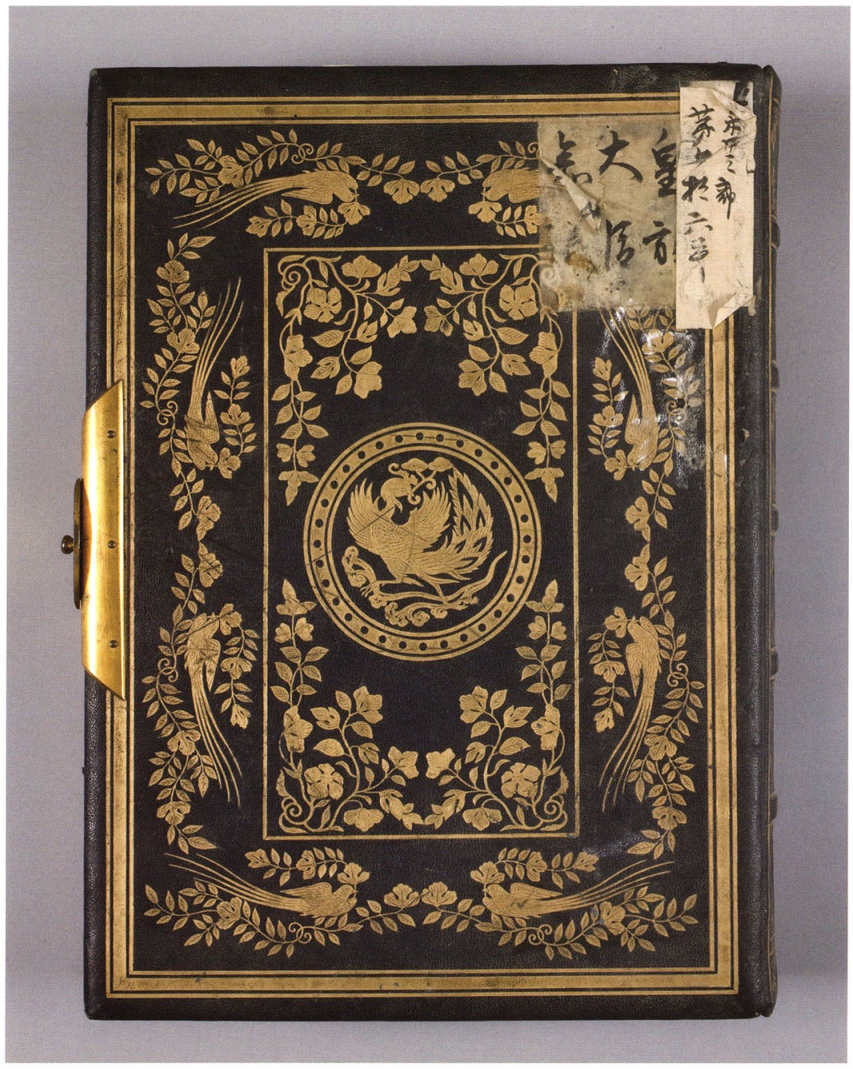
このような飾り窓枠のついたアルバム台紙による写真帖は、英国では「ウインドー・アルバム」と称される。また、19世紀半ば以降、西欧諸国で流行して人気を博した「カルト・ド・ヴィジット」（訪問カードの意味、Carte-de-visite）と呼ばれる焼付を貼り付けた小型のカードがある。ウインドー・アルバムは、このカルト・ド・ヴィジットを保存するために数多く制作され、室内の装飾品としての役割も果たすようになり、その装丁には技巧が凝らされた。大蔵省印刷局では、こうした西洋における写真帖の発展の中で育まれた伝統的な製本技術に倣って本写真帖を制作している。なお、カルト・ド・ヴィジットは日本では名刺判写真と呼ばれるが、本写真帖に収められるものは、名刺判よりも大きなキャビネサイズの写真台紙に貼り付けられた焼付である。

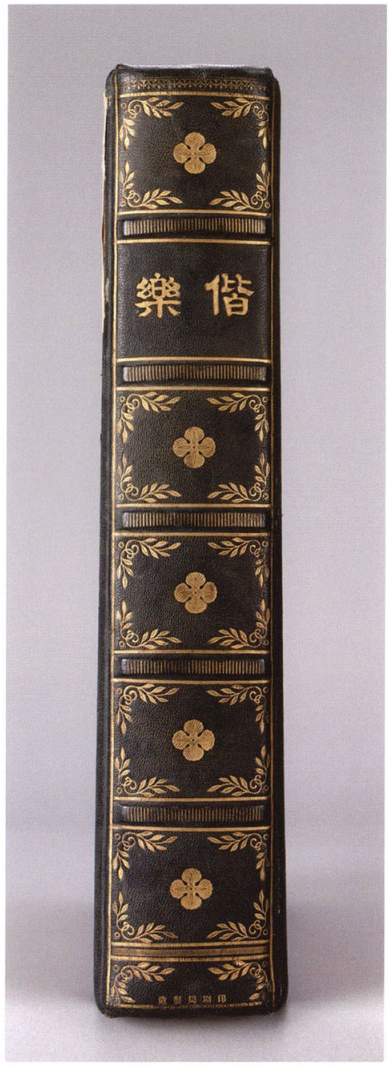
〈Ⅰ類 A－1〉より有栖川宮熾仁親王

新年祝言
陸軍大将熾仁親王

大君の
御まへたゝしく
ぬかつきて
いはひ
まつらむ年
は来にけり

表紙内側の周縁には葡萄唐草文様があしらわれる。表紙見返しには四君子文様、あるいは桐に鳳凰文様、小葵文様の白綾を貼っている。





〈Ⅰ類 A－1〉の表紙および背表紙。背表紙には「偕楽」の文字と、最下部に「印刷局製造」の銘が入る。

「印刷局製造」の銘
「皇族　大臣　参議」と「編修官」の2冊にはこの銘が入る。

「印刷局活版部製」の銘
「司法省」「判事」「県令」の3冊にはこの銘が入る。

〈Ⅰ類 B〉

挿入式写真帖　14冊

装丁：総革装の洋綴製本・角革つき半革装の洋綴製本　材質：印画紙－鶏卵紙
丁数：総革装 〈Ⅰ類 B－1、6、10、11〉 各25葉　半革装 〈Ⅰ類 B－2～5、7～9、12～14〉 各50葉
法量：総革装 〈Ⅰ類 B－1〉縦41.8×横32.3×厚8.0㎝
　　半革装 〈Ⅰ類 B－2〉縦42.0×横33.0×厚14.0㎝（各帖の詳細は14頁を参照）
写真枚数：3793枚　収載人数：3791名

〈Ⅰ類 B〉の写真帖は、〈Ⅰ類 A〉と同様の方針のもとに仕立てられ、肖像写真のみを収めるものである。各頁には4名を配し、頁上段に2名、下段に2名の肖像写真が収められている。〈Ⅰ類 A〉と同じく、肖像写真はキャビネサイズの写真台紙に焼付が貼り付けられており、袋状になった頁装丁の上下より挿し入れて収められている。写真台紙には、焼付の下と裏面に〈Ⅰ類 A〉と同様に氏名等の記載がある。

各頁のアルバム台紙は2㎜厚の厚紙で、1頁あたり4枚の写真台紙を収める場所に、それぞれの写真台紙にあわせて厚紙を切り抜き、表裏ともに天地の小口の一部2ヵ所を糊付けせずに挿入口として残し、鳥の子色の局紙を貼り合わせて袋状に仕立てる様子は、〈Ⅰ類 A〉の写真帖と同様である。局紙には、写真用の窓（楕円型12.0×9.0㎝）が4ヵ所切り抜かれて、窓部周縁には〈Ⅰ類 A〉と同じ蝶の装飾文様、頁周縁には唐草文様を四隅と四辺の中央に配した飾り枠が、それぞれ金色で装飾されている。

また、丁数が25葉の写真帖の表紙は、表裏共に黒色の総革装で、金箔を用いた型押しによって、中央には唐草を菱形に構成した装飾文様を配し、葡萄の枝葉で四隅を飾った四周で囲み、さらにその外側を幾何学的に図案化した唐草文様等で装飾し、最も外周には葡萄唐草文様をめぐらして、二重の四周で囲っている。丁数が50葉の写真帖は、背と角が紺色の半革装で、表紙は、入子菱の地紋に白糸で牡丹獅子文、または黒糸で雲龍文を表した2種類の緞子を用いている。『朝野新聞』明治13年9月11日の記事に、紺色の錦で獅子と牡丹の模様を織りだした写真帖が印刷局で調製されたと報じられており、この牡丹獅子文の写真帖がその記載に該当する。さらにいずれも三方の小口に金付（金箔押し）が施されて金鍍金の留め金具が装着され、〈Ⅰ類 A〉と同様、重厚な仕立てとなっている。

〈Ⅰ類 B−7〉より
山内通義　野津道貫
木村新九郎　岡澤精

半革装の装丁
表紙の裂には、牡丹獅子文(上図)と雲龍文の２種類の緞子が用いられている。

総革装の装丁

〈Ⅱ類〉

貼付式写真帖　10冊

装丁：総革装の洋綴製本　材質：印画紙－鶏卵紙　丁数：14葉～86葉
法量：縦型　〈Ⅱ類－1〉縦36.4×横30.0×厚8.5㎝
　　横型　〈Ⅱ類－7〉縦37.0×横40.5×厚11.5㎝（詳細は14頁を参照）
写真枚数：4498枚　収載人数：4496名

〈Ⅱ類〉の写真帖は、6冊が縦型で、各頁の上段に2名、下段に2名、合わせて4名の肖像写真を貼り込み、横型の4冊は、各頁の上段に3名、下段に3名の同6名の肖像写真を貼り込む（右頁参照）。それぞれの肖像写真の下部には、官職位、氏名、出身、年齢を記した紙札が付される。

各頁のアルバム台紙は、1㎜厚の厚紙で、両面に局紙を直接貼り付け、その表面に〈Ⅰ類　A〉あるいは〈Ⅰ類　B〉に収められた写真と同一の焼付による肖像写真（14.0×9.7㎝）が貼り込まれている。〈Ⅱ類〉は各冊で丁数が異なっており、〈Ⅰ類 A〉と〈Ⅰ類 B〉をあわせた、いわば総目録というべき性格を有している。

写真帖の表紙は、縦型の4名ずつ貼り込まれたものは、表裏共に小豆色の革装で、金箔を用いた型押しによって、中央には連珠円文に鳳凰を表し二重の四周で囲み、その外側には草花文様を配して三重の四周で囲む。一方、横型の6名ずつ貼り込まれたものは、表裏共に赤色の革装で、中央には同上の鳳凰文を配し、唐草文様等の装飾線で四周を囲み、その外側には向かい合う尾長鳥と草花文様を配して三重の四周で囲む。両写真帖とも、これらの装飾文様は〈Ⅰ類 A〉の写真帖の表紙と同一の型を使用していると考えられる。さらに両写真帖とも、三方の小口には金付（金箔押し）が施されている。

ここで、〈Ⅰ類 A〉〈Ⅰ類 B〉〈Ⅱ類〉の全39冊に収められた写真枚数と収載人数について記しておく。全39冊に収められている肖像写真の人数は、調査の結果、合計4531名である。この人数に対して、各類の写真枚数と収載人数、またそれら合計に相違があるのは、〈Ⅰ類 A〉あるいは〈Ⅰ類 B〉のみに焼付が収められて〈Ⅱ類〉には焼付が収められていない人物が35名（うち2名は〈Ⅰ類 A〉と〈Ⅰ類 B〉にそれぞれ1枚ずつ収まる）あること、その一方で〈Ⅱ類〉にのみに焼付が収められる人物が37名あること、さらにすべての類に焼付が収まる人物が4名あるためである。また、〈Ⅰ類 B〉と〈Ⅱ類〉それぞれに2枚の焼付が収まる人物が、各2名ずつ存在している。

〈Ⅱ類－1〉縦型アルバム台紙への貼り込みと記載

〈Ⅱ類－10〉横型同上

《明治十二年明治天皇御下命「人物写真帖」》　内訳

種類	番号	箱　　書	実際の分類内容	丁数	各帖の法量 総縦×横×厚（cm）
I類	A　小色紙入・挿入式写真帖				
	1	「皇族 大臣 参議」　一品幟仁親王　其他	皇族、大臣、参議、太政官、編修官　50名	各25葉	40.4×29.5×7.5
	2	「編修官」　修史館監事三浦安　其他	編修官、元老院　49名		41.0×31.0×8.5
	3	「司法省」　検事鶴田皓　其他	検事、判事　50名		41.0×30.0×8.0
	4	「判事」　判事新井一業　其他	判事、司法省、内務省、太政官、地方官　43名		40.5×30.0×8.0
	5	「県令」　鹿児島県大書記官渡邉千秋　其他	地方官　31名		40.5×30.7×7.5
	6	「宮内省」　宮内卿徳大寺實則　其他	宮内省、式部寮　50名		41.0×31.0×8.5
	7	「人物」　従四位飯田年平　其他	式部寮、宮内省、大蔵省　50名		41.0×31.0×8.5
	8	「文部省 工部省 開拓使」	大蔵省、文部省、工部省、開拓使、外務省、警視庁、地方官、教導職、その他　38名		41.0×31.0×8.0
	9	「華族」　従一位中山忠能　其他	華族　従一位~正三位　50名		41.0×30.0×8.0
	10	「華族」　正三位慈光寺有仲　其他	華族　正三位~従四位　50名		41.5×30.5×9.0
	11	「華族」　従四位西洞院信愛　其他	華族　従四位~従五位　50名		41.0×31.0×8.5
	12	「華族」　従五位溝口直正　其他	華族　従五位　49名		41.0×30.0×8.0
	13	「陸軍」　陸軍中将三浦梧樓　其他	陸軍省　50名		41.0×31.0×8.0
	14	「陸軍」　陸軍軍医補梶原三盾　其他	陸軍省　50名		41.0×29.0×7.5
	15	「陸海軍」	陸軍省、海軍省　49名		41.0×32.8×8.0
	B　挿入式写真帖				
	1	「諸官省」　大蔵卿従四位勲二等佐野常民　其他	大蔵省、文部省、外務省、工部省、警視庁、地方官、陸軍省、判事　123名	25葉	41.8×32.3×8.0
	2	「各種」	海軍省、司法省、検事、判事、内務省、地方官、開拓使　288名	50葉	42.0×33.0×14.0
	3	「警視庁」	警視庁　114名	50葉	42.0×33.0×16.5
	4	「華族」従二位五辻高仲　其他	華族　従二位~従五位　348名	50葉	42.0×33.5×14.0
	5	「神官僧侶」	教導職　322名	50葉	42.0×33.0×13.0
	6	「陸軍近衛」陸軍歩兵少佐立見尚文　其他	陸軍省　近衛配属　155名	25葉	41.5×33.5×9.0
	7	「陸軍」陸軍少将正五位勲三等野津道貫　其他	陸軍省　東京、仙台配属　399名	50葉	42.0×33.5×16.0
	8	「陸軍軍人」	陸軍省　仙台、名古屋、大阪配属　400名	50葉	42.0×33.0×13.5
	9	「陸軍軍人」	陸軍省　大阪、広島配属　400名	50葉	42.5×33.5×15.0
	10	「陸軍」	陸軍省　広島、熊本配属　200名	25葉	41.5×32.0×8.5
	11	「陸軍」陸軍砲兵大尉正七位勲五等西川經武　其他	陸軍省　熊本配属　170名	25葉	41.5×32.0×8.5
	12	「陸軍軍人」	陸軍省　397名	50葉	42.0×33.0×13.5
	13	「陸軍」陸軍歩兵少佐従六位勲五等栗原一郎右衛門　其他	陸軍省、海軍省　76名	50葉	42.0×33.0×12.5
	14	「海軍軍人」	海軍省　400名	50葉	42.5×33.5×13.0
II類	貼付式写真帖				
	1	「皇族」　一品勲一等幟仁親王　其他 「諸官省」参議兼議長正四位勲一等大木喬任　其他	皇族、大臣、参議、太政官、編修官、外務省、内務省、警視庁、大蔵省、文部省、工部省　309名	44葉	36.4×30.0×8.5
	2	「諸官省」　司法大輔兼議官従四位玉乃世履　其他	司法省、検事、判事、宮内省、元老院、開拓使、地租改正局　346名	48葉	36.0×28.5×8.5
	3	「地方官」　東京府知事従五位勲三等松田道之　其他	地方官　97名	14葉	36.0×29.0×4.5
	4	「華族」　麝香間祗候従一位中山忠能　其他	華族　従一位~従五位　275名	42葉	36.5×29.5×8.0
	5	「華族」　従五位松平乗命　其他	華族　従五位　287名	42葉	36.2×29.0×7.0
	6	「神官僧侶」	教導職　312名	44葉	36.0×28.8×7.0
	7	「陸軍」　陸軍歩兵大佐従五位勲四等淺井道博　其他	陸軍省　741名	66葉	37.0×40.5×11.5
	8	「陸軍」　陸軍少将正五位勲三等野津道貫　其他	陸軍省　700名	62葉	36.5×40.5×10.0
	9	「陸軍」　陸軍少将正五位勲三等三好重臣　其他	陸軍省　959名	86葉	36.5×41.0×14.0
	10	「海軍」　海軍中将従四位勲二等伊東祐麻呂　其他	海軍省　471名	42葉	36.3×39.3×8.5

全39冊（上から〈I類 B〉、〈II類〉、〈I類 A〉）

3. 制作事業について

この《明治十二年明治天皇御下命「人物写真帖」》は、今回、初めてその存在を紹介する作品であるが、この存在が明らかになる以前に、刑部芳則氏による「まぼろしの大蔵省印刷局肖像写真－明治天皇への献上写真を中心に－」と題した論考がある（註1）。刑部氏は、文献史料や他の博物館および研究機関に現存する焼付写真やアルバムなどから、大蔵省印刷局（以下、印刷局と記載）の活動を中心に本写真帖の制作事業について考察を加え、その重要性を見出している。本写真帖の調査において、この刑部氏の論考は、大きな示唆を与えてくれた。ここでは、この先行論文をもとに、本写真帖の現状や、新たに見出した史料の内容を加えてその制作事業についてまとめ、改めて《明治十二年明治天皇御下命「人物写真帖」》について考察する。（なお、出典となる史料については本文中で記すほか、18、19頁表中、及び23、24頁にまとめて明記している。あわせて参照いただきたい。）

①　写真差出の通達

本写真帖の制作事業は、既述の通り、明治12年11月19日、宮内卿・徳大寺実則(図版35頁)より各官省へ発せられた通達からはじまる（註2）。通達文には、各官省の奏任官以上と准奏任御用掛の者は各自の写真をお手許へ差し出すように、とある。ここにある奏任官以上とは、官吏最高位の親任官、一等～三等の勅任官、四等～七等の奏任官をさす。また准奏任御用掛とは、各官省に配される御用掛のうち、奏任官の処遇を受けている者をさしている。実際、本写真帖に収められている人物の官職は、奏任官以上、准奏任御用掛に相当していることが確認できている。

また、各官省の官吏に続き、12年12月23日には有位華族(本写真帖では従五位以上に限られている)へ、同27日には麝香間祗候の華族へも通達された。

そして、13年6月に宮内省から内閣書記官宛に発せられた通達文に、13年1月以降に新規拝命の者は撮影に及ばない旨が記されている（註3）ことから、写真を差し出す対象となったのは、明治12年中に奏任官以上、准奏任御用掛であった者と、従五位以上の有位華族であったと判断される。

②　撮影等の方針

提出する各自の写真の撮影は、主として印刷局で行われた。写真差出の通達後の12年11月21日には、印刷局から各官省宛に撮影手順書が通知されている（史料１）。写真は、1日に15名ずつ撮影する、撮影は9時からとするなど、基本的な撮影手順が記されており、また氏名等の確認のため、名刺を差し出すようにとある。この名刺の提出は、後の記名作業において重要であった。また服装に関しては、当初は礼服あるいは制服着用のこととされた。しかし、わずか半月後の12月9日に宮内省より各官省へ通知された撮影等の方針(史料2)では、着装はなるべく洋服とするが他の着装でも構わない、礼服や制服の着用は本人の随意とされている。

さらにこの12月9日の通達では、東京在住の者は、すべて印刷局において撮影を行い、それぞれが所属する省庁で取りまとめて、宮内省へ送付すること、但し、用紙の寸法等は宮内省より印刷局へ通知するとある。また、各地方に出張または在勤している者は、その所在地にて撮影を行い、それぞれが所属する官省において取りまとめた後に、各官省から宮内省へ送付することとし、用紙の寸法は印刷局撮影分と同様とするとある。地方でも撮影が行われたことを示しているが、実際、約1700名分は、印刷局以外の写真館の写真台紙に貼られた焼付であることが確認できている。それらは、北は仙台、南は長崎まで、外交官においては、海外で撮影された焼付も含まれている（116頁参照）。

そして、提出する焼付は1名につき4枚必要とされ、その費用は宮内省が印刷局へ支払うと記している。提出する4枚の他、本人の希望によって焼増の作成は可能であったが、その費用は自己負担とされている。本写真帖に収められた焼付と同一の湿板ネガ(ネガフィルムに相当する)からの焼付が、複数の博物館や研究機関に所在していることが指摘されているが（註4）、それは、このような個人用の焼増分が、近親者や同僚の間で、配布、交換されたからであろう。

さて、提出する写真に記載する事項等については、12年12月26日付で宮内省から各官省へ通知された（史料3）。写真台紙に貼り付けた焼付については、雛形（挿図１）の通り、所属官省において官位、勲位等、氏名を正楷書で記載のこと、焼付のままの提出分については、記載は不要とした。実際、本写真帖に収められた印刷局の写真台紙には、貼付された焼付の下部の余白に、雛形通りに直接書き込まれている（挿図２）。さらに、それらの記載に加えて、氏名の下には出身地と身分が、また写真台紙裏面中央の印刷局の商標的な装飾の下には年齢が記されている（挿図3、4）。写真台紙裏の年齢の記載は、13年2月3日付の宮内省から各官省宛の通達により、各官省からの回答をもとに宮内省で追記したと考えられるが、出身地と身分の記載についてもまた、官位等の記載とは筆跡が異なっていることから、後に追記したものと考えられる。

一方、『東坊城任長日記』（当庁書陵部図書寮文庫蔵。以下、図書寮文庫）13年3月5日条に所載された「有位華族撮影心得概記」（史料4）は、史料2、3をまとめてわずかに変更を加えた内容となっているが、その中で有位華族の写真については、年齢の記載も写真を取りまとめる華族部長局で行うよう指示されている。実際の写真台紙の記載は、官位勲等氏名と年齢の筆跡が一致しており、このことを裏付けている。

以上の通り、記載についての基本的方針は、各官省、華族ともに共通しているが、変更や見直しを行いつつ制作事業が進められたことが確認できる。

③　撮影の実施

印刷局における各自の撮影は、最初に大臣参議以下太政官から開始される予定で、12年12月6日から8日の日割が作成された（『公文録　明治13年自1月至3月　宮内省』/『太政類典　第4巻第10編』）。しかし、実際には12年12月10日から始まった宮内省関係者が最初で、14日までに52名が印刷局において撮影を行っている。そして、同月25日から元老院、年が明けて13年１月5日からは太政官関係

挿図1　写真雛形（史料3添付）

挿図2　写真台紙表面（伊藤博文）

挿図3　伊藤博文の写真台紙裏面「東京印刷局寫真」と記された印刷局の商標的な装飾が印刷される。

挿図4　写真台紙裏面「東京印刷局寫真」の文字を羽根を広げた鳳凰で囲んだ印が押されている。

者の撮影が実施され、開拓使、陸軍省関係者の撮影実施が、史料より確認できている。13年に入って、順次、各官省の関係者の撮影が進んだと推測される。さらに、12年12月23日に撮影の通達があった華族関係者の撮影が、3月8日から行われたことも確認でき、日割りの予定に従って逐次撮影作業が進められた様子がうかがえる。3月22日には、1月に撮影した太政官関係者38名の写真が宮内省へ提出されていることから、この頃までに予定された印刷局での撮影が概ね終了していたと考えられる。

そして4月5日からは、京都在住の華族関係者の撮影が華族部長局分局に設けた撮影所において行われた。『東坊城任長日記』には、10日までに撮影する予定の87名の日割が掲載されている。しかし、東坊城任長（1838-86、図版42頁）自身は、病気のために予定の日に撮影出来なかったため、4月14日に八坂社内の写真師鎌田永弼のもとで撮影を行ったことが記されている。それによれば、撮影は礼服を着用して行い、費用は1円50銭であった。東坊城は、鎌田に、出来上がった焼付4枚（3枚は写真台紙貼）は、直接、華族部長局分局に送ること、また費用は分局より受け取るように指示している。それは、費用は宮内省の負担であるが、一旦は華族部長局が立て替えて支払うことになっているためであると記されている。そして、自分用に焼増1枚を依頼した旨も記されている。

この例のように、地方での撮影費用は、その所管機関が立て替え、宮内省へ請求した。他の官省についても、6月20日から7月末にかけて、地方に赴任している関係者の撮影費用を宮内省へ請求している（『調度寮 例規録 明治 13 年』、当庁書陵部宮内公文書館蔵。以下、宮内公文書館）。以上から、各官省の地方関係者の撮影分については、7月頃までに撮影が進められたと判断できよう。

しかし、印刷局、そして地方に設定された撮影所に赴くことが出来なかった者もあり、『写真科日誌』（国立印刷局お札と切手の博物館蔵）には、関係者の撮影記録が13年12月7日まで確認できる（註5）。そのうち、13年8月10日付の内閣書記官より宮内省への回答文書に、大隈重信（1838-1922、挿図5、図版32頁）と川村純義（1836-1904、図版33頁）に関して、「未タ撮影セサル趣ニ付催促中」とある（『太政類典 第4巻第10編』）。その大隈重信が最終的に提出した写真は、規定の規格とは全く異なっている。下の挿図5の通り、楕円の焼き込みの無い焼付で、その画像は椅子に座したほぼ全身像。家具等の撮影所のセットが背景に写っている。写真台紙裏面には印刷局の印（挿図4と同印）が押されているが、焼付と記名の間には、「明治十二年七月版権所有」とのエンボス状の押印がある。この現状から、大隈は本写真帖制作のためには撮影を行うことが出来ず、以前に印刷局で撮影した焼付を代用して提出したと考えられる。本写真帖の中で、珍しい事例の一つである。

さらに、華頂宮博經親王（1851-76、図版30頁）、大久保利通（1830-78、図版31頁）、木戸孝允（1833-77、図版32頁）をはじめとした故人8名や、明治12年当時に官職にはなかった勝安芳（海舟、1823-99、図版88頁）と板垣退助（1837-1919、図版89頁）の存在にも注目される。このうち、勝については、『写真科日誌』13年8月16日に、撮影が印刷局で行われていることが記載されている。そして、『写真科日誌』同年10月11日と20日には、教導職（神官、僧侶）の焼付が他の官省よりかなり遅れて宮内省へ納品されている記録もある。こうした変則的な存在や撮影時期が確認される背景には、政治的配慮や組織変更による影響等が考えられるが、何時、誰の指示で、

挿図5　大隈重信

文献に見る制作事業のながれ

（太字は工程のうちの主要な流れを示す）

工程			月日	事項
撮影の通達			明治12年（1879）11月19日	**明治天皇は群臣を深く親愛され、その写真を座右に備えようと、写真の蒐集を宮内卿に命じられる。**（『明治天皇紀』第四　『元田永孚文書　第1巻』「古希之記」元田文書研究会、1969） **奏任官以上および准奏任官御用掛の肖像写真をお手元へ差し出すため、大蔵省印刷局において撮影を行う旨を、宮内卿より太政官、元老院へ通達する。**（『公文録 明治13年自1月至3月 宮内省』国立公文書館蔵/『太政類典 第4編第10巻』　『元老院日誌 第2巻』三一書房、1981）
			11月21日	**印刷局から太政官、各官省へ撮影の手順が通達される。**（史料1）
			12月9日	**宮内省より太政官、各官省へ撮影の方針が提示される。**（史料2）
撮影			12月10日	**大蔵省印刷局にて肖像写真の撮影を開始する。** 宮内省関係者の撮影が行われる。14日まで1日10人前後、計52人の日割が記されている。（『侍従局 布達録 明治12年』宮内公文書館蔵）
			12月23日	**有位華族へ肖像写真撮影をする旨が通達される。** 大蔵省印刷局において撮影を行う旨を、宮内卿より華族部長局へ通達する。（『東坊城任長日記』明治13年3月16日条、図書寮文庫蔵）
			12月25日	元老院関係者の撮影が行われる。（『元老院日誌 第2巻』）
			12月26日	写真の雛形が通達される。（史料3）
			12月27日	麝香間祗候の華族へ肖像写真を撮影する旨が通達される。（『嵯峨實愛日記』図書寮文庫蔵）
			明治13年1月5日	太政官関係者の撮影が行われる。（『公文録 明治13年自1月至3月 宮内省』国立公文書館蔵/『太政類典 第4編第10巻』）
			1月13日	東京在勤の開拓使の撮影が行われる。（『開拓使公文録』簿書5908件31、北海道立文書館蔵）
			1月29日	陸軍省現役将校の撮影が終了、2月19日から非役将校の撮影を行う。（『大日記　諸局参謀監軍 陸軍省総務局』防衛省防衛研究所蔵）
			2月3日	宮内省より、各官省の勅奏任官、准奏任御用掛等の各自の年齢を調べるように依頼がある。5日、明治13年1月付の年齢を報告するように補足される。（『公文録 明治13年自1月至3月 宮内省』/『太政類典 第4編第10巻』　『開拓使公文録』簿書5907件15）
			2月6日	印刷局より開拓使に東京在勤者6名分の焼付各3枚が見本各1枚とともに送付される。 宮内省に4枚納めるうちの1枚は印刷局より直に宮内省へ回付する旨が記される。（『開拓使公文録』簿書5908件13）
			2月12日	元老院幹事より宮内卿へ元老院関係者35名各3枚の焼付が提出される。 4枚のうち1枚は印刷局より直に宮内省へ回付する旨が記される。（『元老院日誌 第2巻』）
			3月5日	有位華族へ「撮影心得概記」が配布される。3月16日、写真の雛形が回覧される。（史料4） 印刷局より陸軍省に142名分の焼付各3枚が見本各1枚とともに送付される。宮内省へ4枚納めるうちの1枚は印刷局より直に宮内省へ回付する旨が記される。（『大日記 諸省来書 陸軍省総務局』防衛省防衛研究所蔵）
			3月8日	麝香間祗候の華族、嵯峨実愛が通常礼服で印刷局にて撮影を行う。同日の撮影は近衛従一位以下10名余であった。（『嵯峨實愛日記』）
			3月9日	在官の有位華族の撮影が開始される。（『東坊城任長日記』明治13年3月16日条　『東久世通禧日記』明治13年3月9日条、霞会館、1993）
	詩歌蒐集の通達		3月19日	非役の華族、野宮定功が印刷局にて撮影を行う。（『野宮定功日記』図書寮文庫蔵） **奏任官の詩歌の詠進を求める通達が出される。** 明治天皇の命により、写真に加えて、詩歌の詠進を求める旨が、宮内省より、内閣書記官へ通達される。（『太政類典 第4編第10巻』）
			3月22日	**印刷局における撮影はおおむね終了する。** 太政官より宮内省へ大臣以下編修官まで38名の焼付が各3枚ずつ提出される。 （『公文録 明治13年自1月至3月 宮内省』/『太政類典 第4編第10巻』）
			3月29日	内閣書記官より宮内省へ詩22人、歌2人分の料紙の送付を求める。（『太政類典 第4編第10巻』）
			4月5日	京都在住の有位華族の撮影が華族部長局分局に設けた撮影所にて行われる。10日まで87名の日割が記されている。 （『東坊城任長日記』明治13年3月16日条）
撮影の継続			4月16日	**太政官、各官省、有位華族へ詩歌詠進を求める通達が出される。** 和歌や漢詩の心がけのあるものは詠進するようにとの達しがあった旨、宮内省より太政官書記官、華族部長局局長あてに通達される。締め切りは5月中とされた。 太政官、元老院、各官省、有位華族それぞれに和歌、漢詩の御題が下賜されたが、旧詠を提出することも可能であった。 （『太政類典 第4編第10巻』　『元老院日誌 第2巻』　『大日記 本省達書 自1月至6月達乙 陸軍省総務局』　『東坊城任長日記』明治13年4月29日条）

月　日	事　　項	工　程		
4月22日	麝香間祗候の華族へ詩歌詠進を求める通達が出される。(『嵯峨實愛日記』)	撮影の継続	詩歌蒐集の通達	写真名札の書入　焼付の貼込　台紙貼焼付の納入
4月24日	皇族へ詩歌詠進を求める通達が出される。(『彰仁親王年譜資料 巻20明治13年(小松宮日記抄録12)』宮内公文書館蔵)			
4月27日	各官省へ詩歌の書式が通達される。(『太政類典 第4編第10巻』/『侍従局 布達録』宮内公文書館蔵)			
4月29日	麝香間祗候の華族へ詩歌の書式が通達が出される。(史料5) 有位華族へ5月3日までに部長局へ甲雛形(詩歌詠進するもの)および乙雛形(詠進を辞退するもの)の提出を求める通達が出される。(『東坊城任長日記』) 写真帖へ位階勲姓名の書入が宮内省侍講局で行われ始める。(『侍講局 侍講日記 明治13年』宮内公文書館蔵)			
5月29日	嵯峨実愛が宮内省へ詠進歌の下書を持参する。(『嵯峨實愛日記』)			
6月5日	**詠進歌が各官省を通じて宮内省へ提出され始める。** 6月5日と7月12日に、内閣書記官より宮内省へ、内閣大書記官、太政官大書記官、編修官、修史館御用掛の詠進歌あわせて26通が提出される。(『太政類典 第4編第10巻』)		詩歌の提出	
6月7日	元老院より宮内省へ元老院関係者の詠進歌27通が提出される。(『元老院日誌 第2巻』)			
6月10日	印刷局活版部より宮内省へ小色紙200枚、金132円が請求される。(『調度課 御用度録 明治13年購入17』宮内公文書館蔵)			
6月19日	詩歌の御題は明治天皇みずから選び下賜されたもので、詠進の詩歌は金地の小色紙に書き取り、写真とともに小さな帖に仕立てられる由、詩歌の筆者は池原日南(香稺)が仰せつかった、と報じられる。(『朝日新聞』)		詩歌の清書	
6月20日	陸軍省広島鎮台および大阪鎮台より、宮内省へ撮影費用が請求される。 7月5日には司法省、7月19日には華族部長局、7月24日には開拓使、7月28日には各府県より撮影費用の請求がある。 (『調度寮 例規録 明治13年』宮内公文書館蔵。開拓使分については、『開拓使公文録』簿書5907件58にも記録がある。) **この頃には地方撮影も概ね終了する。**			
7月20日	印刷局活版部より宮内省へ写真本(小口25枚片面4枚挟)2冊、金36円72銭6厘、写真本(小口50枚片面4枚挟)2冊、金58円の費用が請求される。6月1日と6月13日にそれぞれ納品されている。(『調度寮 例規録 明治13年』)			
8月3日	7月22日に奏任官以上の写真をお手元へ差し出す予定日であったが、写真が揃っていないため、未だ撮影が出来ていない人名と理由を提出するように、宮内省より内閣書記官へ通達あり。(『太政類典 第4編第10巻』 『開拓使公文録』簿書5907件68)		未提出の詩歌の蒐集	
8月6日	写真帖の大蔵省分の名札書きが、宮内省侍講局において行われる。翌7日に終了する。(『侍講局 侍講日記 明治13年』)			
8月14日	華族黒田長徳が印刷局において撮影する。(『写真科日誌』国立印刷局お札と切手の博物館蔵)			
8月16日	勝安芳(海舟)が印刷局において撮影する。(『写真科日誌』)			
9月11日	明治天皇のお手許へ差し出す華族方の写真帖の装丁は、紺地錦で獅子と牡丹の模様を織りだしたもので、印刷局で調製され、近々宮内省へ納められる、と報じられる。(『朝野新聞』)			
9月17日	華族伊達宗陳が印刷局において撮影する。(『写真科日誌』)			
9月22日	海軍省より宮内省へ撮影費用が請求される。(『調度寮 例規録 明治13年』)			
10月2日	外務省より宮内省へ海外赴任者の撮影費用が請求される。(『調度寮 例規録 明治13年』)			
10月11日	教導職の肖像写真94枚が印刷局より宮内省へ納められる。(『写真科日誌』)			
10月20日	教導職の肖像写真204枚の写真台紙貼り作業が宮内省より印刷局へ依頼され、翌日宮内省へ納められる。(『写真科日誌』)			
11月30日	**延期していた詠進歌の提出が締め切られる。**(『太政類典 第4編第10巻』)			
12月7日	明治13年中を通じ、規定の日割で撮影出来なかった各官省奏任官が、印刷局を訪れ各自撮影を行っている。(『写真科日誌』) 印刷局の『写真科日誌』を確認した限りでは、本写真帖の撮影に関する記録はこの日が最後となる。 印刷局活版部より宮内省へ、「写真本色紙挟」(小口25枚)2冊、金47円と、「写真本4枚挟」(小口50枚)2冊、金58円が請求される。(『調度寮 御用度録 明治13年購入28』)			
12月17日	印刷局員が焼付の貼り込みのため宮内省へ出張する。(『写真科日誌』) 『写真科日誌』の記載では、印刷局員が9月から月に1度焼付貼り込みのため宮内省へ出張しており、確認出来る限りでは、この日が最後の出張の記録となっている。			

どのような事情で加えられたのかを明確にできる史料は見出せていない。しかし、本写真帖制作の過程で、制作を主導する人物とその周辺の間で、様々な思惑が交錯していたことを窺わせていよう。

④　詩歌の蒐集と内容

おおよそ撮影の目処がついた13年3月19日、写真に加えて詩歌の詠進を求める通達が宮内省から各官省へ発せられた。そして、その一ヶ月後の4月16日には、改めて各官省、華族へ、和歌や漢詩の心がけのあるものは詠進するようにとの通達と、それぞれに和歌、漢詩の御題が下賜されている。御題にかかわらず、旧詠を提出することも認められ、その締め切りは、この時点では5月中と定められている。下賜された御題は、皇族に対しては、歌題「鶯有歓声」詩題「芍薬始華」、華族は、歌題「初雪」詩題「冬晴驟暄」、大臣を含む太政官関係者は、歌題「名所花」詩題「雨後春村」、元老院関係者は、歌題「夏雨」詩題「新樹」、宮内省関係者は、歌題「禁庭菊」詩題「山園秋夕」、そして陸軍関係者は、歌題「月初昇」詩題「秋夜読兵書」であることが、史料より確認出来ている。また、収められた詠進歌の内容を確認すると、例えば司法省関係者は、詠進者75名中、21名が歌題「暁鹿」を、49名が詩題「湖村秋思」を詠んでいることから、これらが御題である可能性は高い。

この詩歌詠進についても、写真同様に規定の書式が通達された(史料5)。華族の嵯峨実愛(1820-1909、図版37頁)の日記には、5月29日に規定の書式通りにしたためた和歌の下書を宮内省へ持参した旨が記されている。そしてその裏面には、「宮内省　文学御用掛 兼宸翰御用掛 麝香間祗候」と記した附箋を貼り付けたとあり、現状の嵯峨の小色紙は、提出された下書をもとに宮内省で清書されたものであろう。なお、『元田永孚文書』(第一巻、元田文書研究会発行、昭和44年)の「古希之記」(181頁)および『朝日新聞』明治13年6月19日の記事によれば、小色紙は文学御用掛の池原香穑(1830-84、図版44頁)が清書を仰せつかったとある。総ての小色紙の筆跡は、一見しては同一の人物一人による筆跡とは考えがたいが、香穑の国文学への造詣の深さと多彩さを考えれば、香穑が巧みに書き分けた可能性も否定は出来ず、今後の課題の一つである。

さて詩歌は、史料より13年5月から7月にかけて提出されていることが確認される。しかし、遅れが多々あったためか、提出は11月まで延期され、最終的な期限は11月30日と定められた。

この詩歌の詠進は「心がけのあるもの」に求められ、全員に強制されたものではなかった。例えば13年3月29日付で、内閣書記官は、詠進の希望者の数を宮内省へ報告し、料紙の送付を求めている。また、華族に関しては、4月29日付で華族部長局分局より詠進する場合と辞退する場合の願書を提出が求められている。こうした詩歌詠進の実情に関わらず、〈Ⅰ類 A〉の皇族、大臣、宮内省の高等官については小色紙を伴わない焼付が収められており、それがどのような事情によるかは明確にはし難い。

ところで、『明治天皇紀』によれば、詩歌を肖像写真と共に収めることは、侍補高崎正風(1836-1912、図版44頁)の進言によるものであったという。高崎は、本写真帖が制作される以前の明治9年、東北・北海道巡幸に際して、沿道の人民から集めた詩歌をまとめた『埋木廼花』、同11年の北陸・東海道巡幸に際しては『千種の花』と題した歌集を編修している。このうち、『埋木廼花』の序文には、場所の真景(風景)は写真におさめることが出来るが、目には見えない人情(人の心)や形として現れない風俗(てぶり、日々の生活の様子)については、歌に詠みこんで表すことができる、「歌は人情風俗の写真ともいふべきもの」と述べている。天皇の行幸に際し、歌心に未熟な者たちが詩歌を多く献ずる様子を目の当たりにした高崎は、これこそ人情風俗の写真で、これが天皇巡幸の思い出でもあり、さらに「上下の情実互いに通ひ親しまるる」(天皇と人民の心を通わせる)ものの一つである、とも記している。巡幸中の御歌掛として、高崎はこうした信念に基づいて歌文集を編集している。このことが、本写真帖制作の契機となった「明治功臣の写真を蒐集して添ふるに、其の歌詩を以てしたま」うことの提唱につながっているのであろう。

さて、詠進希望者から提出された詩歌は、肖像写真と釣り合う大きさの小色紙に清書されて、各自の写真と共に収められている。色紙は数種類の金泥によって、伝統的な雲形をアレンジして装飾され、基本となる文様を統一しながらも、一枚一枚が微妙な違いを見せていることから、専門の職人が一枚一枚制作したものと考えられる。認められたそれぞれの詩歌は、皇族、華族はともかくとして、決して歌心があった者ばかりが詠んだものではない。和歌や漢詩を基本的には学んではいるが、詩歌として優れた作例は少ない。中には旋頭歌になっているものもある。しかし、前述の通り、高崎の進言は、決して優れた和歌を蒐集することではなく、むしろ素人の詩歌であっても、当時のそれぞれの思いを天皇に伝えることを目的としていたと考えるべきであろう。

⑤　写真帖完成へむけて

各人物の撮影後、焼付はキャビネサイズの写真台紙に貼り付けるものと、焼付のままとする2種類4枚が制作された。『東坊城任長日記』(史料4)によれば、4枚の焼付のうち3枚は写真台紙貼とし、残る1枚は焼付のままで良い、とある(註6)。『明治天皇紀』に、太政官が1人3枚を宮内省へ送付したとあるのは、3月22日付に太政官より宮内省へ宛てた文書に典拠があるが、この3枚は、焼付4枚のうち記名のため印刷局から各官省へ送付された写真台紙貼の焼付にあたろう。残る1枚は、各官省を経由せず、印刷局においてアルバム台紙に貼り付けられて調製されたものにあたると考えられ、この写真帖は〈Ⅱ類〉である(註7)。

一方、3枚の写真台紙貼の焼付は、各官省で官位勲等氏名を記載して宮内省へ提出したが、撮影後、記名の済まない内に昇進する、もしくは奏任官や准奏任御用掛に命ぜられた者は、新たな官位等を記入することとされている(史料4)。実際に、〈Ⅰ類 A〉〈Ⅰ類 B〉の写真台紙貼の焼付と、〈Ⅱ類〉に直接貼り付けられた焼付では、官職の記載が異なる人物があった。その記載を比較すると、数例を除いて、〈Ⅱ類〉の記載は明治13年3月までの官職であり、〈Ⅰ類 A〉〈Ⅰ類 B〉の写真台紙貼の焼付の記載は明治13年4月以降のものであることが分かった(註8)。これは、

『侍講日記』（宮内公文書館蔵）明治13年4月29日の条に、「勅奏任官写真帖へ位階勲姓名書入之命」があったこと、8月6日には「御料奏任官以上写真帖張付名札大蔵省之分書足」、同7日には「写真貼用之名刺書写出来」とあることから、印刷局で撮影の際に各自が提出した名刺をもとに、宮内省侍講局の職員が「勅奏任官写真帖」の名札を書き写したと判断できよう。つまり〈Ⅱ類〉の焼付に付された名札は、撮影時の名刺から作成されているのに対し、〈Ⅰ類 A〉〈Ⅰ類 B〉の写真台紙貼の焼付の記載は、各官省から宮内省へ提出した際の最新の官職に改められたため、両者の記載内容に異同が生じたのである。

また、6～13頁で紹介したように、各類のアルバムの装丁も一様ではない。そして各類の中においても、例えば、〈Ⅰ類 A〉15冊中、「皇族　大臣　参議」と「編修官」の２冊には背表紙最下部に「印刷局製造」の銘が入り、「司法省」、「判事」、「県令」の３冊には「印刷局活版部製」の銘が入る（9頁参照）のに対し、その他の写真帖にはそうした銘が無い。表紙も総革装、半革装があり、留金具の有無の違いもある。形状が縦型と横型があり、型押し文様にも差異があり、表紙や見返しに用いられる裂も数種類に及ぶ。これらの違いが制作順序や制作時期とどのように関わっているのかは明確にはし難いが、この点について整理して考察しておきたい。

先述してきた通り、焼付のままの1枚は、史料に印刷局から宮内省に直接納める旨の記載が確認出来ること、そして官位勲等氏名の書き入れ作業が13年4月末から8月にかけて宮内省侍講局において行われていることから、印刷局においてアルバム台紙に貼り込まれ、帖に仕立てられて13年4月頃には宮内省に納められ始めたと推定する。この帖が〈Ⅱ類〉に相当するが、地方在住者等の撮影はこの時期より後に行われているので、写真の貼り込みと帖の仕立ては写真の蒐集の進捗状況で、逐次進められていったと考えられる。また、『写真科日誌』によれば、その後の同年9月4日、10月5日、10月26日、11月24日、12月17日に、およそ月に1度の頻度で印刷局職員が宮内省へ出張し、焼付の貼り込み作業を行っていることが確認できる。この出張前には、遅延していたと思われる奏任官の撮影が行われていることから、これらの出張は、焼付のままの写真を、すでに納めた〈Ⅱ類〉の写真帖に貼り込むための出張であろうと推察できる。史料から確認できる遅延者の最後の撮影は12月7日で、その撮影後に行われた貼り込み作業が12月17日と考えれば、〈Ⅱ類〉の写真帖の貼り込み作業等は13年内にほぼ終了したものと判断できよう。

続いて、〈Ⅰ類 A〉〈Ⅰ類 B〉の制作についてである。これについては、大蔵省印刷局活版部から宮内省へ出された13年７月20日付と12月7日付の請求書が示唆を与えてくれる（19頁表参照、『調度寮 例規録』『調度寮 御用度録』）。「写真本色紙挟　二冊、小口二十五枚」「四枚挟写真本　二冊、小口五十枚」の記載は、それぞれ〈Ⅰ類 A〉〈Ⅰ類 B〉の写真帖を指すと考えられる。記載の冊数がそれぞれ２冊ずつであることから、これらも写真台紙貼の焼付の蒐集状況に応じて、順次作業が進められ、仕立てが完成したものから宮内省へ納められていったとみられる。現段階の史料の調査において、14年以降にこの種の請求書類を見い出せていないことや、〈Ⅱ類〉の作業が13年内にほぼ終了したと考えられることから、〈Ⅰ類 A〉〈Ⅰ類 B〉を含めて、この制作事業は13年内の完成を目指して進められ、13年12月には完成の目途はついていたと判断する。

ところで、これまで述べてきた通り、焼付は史料より各自4枚提出したと判断されるが、基本的に本写真帖には写真台紙貼の1枚と〈Ⅱ類〉に直接貼り付けられたものの2枚しか使用されておらず、残りの2枚の焼付がどう活用されたのか、現存しているのか、現段階では確認できていない。このことについては、今後も引き続き調査を続けていくこととする。

⑥　制作事業と本写真帖の意義

《明治十二年明治天皇御下命「人物写真帖」》3種類全39冊は、このような経緯で完成したが、その後の使用状況等については、残念ながら明らかになっていない。あまりに大部で重量のあるこれらが、実際にすべて明治天皇の座右に置かれていたのかどうか。またどのように活用されていたのか。この興味深い謎については、今後、新たな史料の発見によって解明されることを期待したい。

明治天皇御下命ではあるが、事業の発案と遂行は、宮内卿・徳大寺実則を中心とした天皇側近たちによる政治的動向も関与している気配がある。この点については、刑部氏も論じられているが、明治10年に設置された侍補という側近職にあった元田永孚（1818-91、図版43頁）、高崎正風が大きく関与しているであろうことは疑いない中、実務上、誰がこの事業遂行の中心にあって指示していたのかは、検討する必要がある。本写真帖の中で最もその核になると考えられる、〈Ⅰ類　A〉の背表紙に「偕楽」と記される2冊において、総ての皇族が収載されていないこと、故人が入っていること、小色紙がないままの高官が多いことについて、その理由等が明確にはなっていない。これらの問題点には、制作事業を推し進めた人物の意図が反映しているであろうと推察されるが、今後の課題である。わずか1年ほどの間にこの大事業を推し進めたことの意味は何であったのか。制作背景に疑問が残る一方で、以下に述べるようにわが国の写真史、近代史における本写真帖の史料的価値は重要である。

まずは、本事業の前年に設立された大蔵省印刷局が、写真撮影所において行った最初の大事業であり、初期の印刷局の活動として注目できることである。本事業のために撮影された肖像写真の原板は、時期から考えると湿板ネガであろうと思われ、印刷局に保管されて活用されていたと考えられる。『写真科日誌』明治17年１月18日には、内務省図書局より勅奏任官写真を借用したい旨、発売科を経て依頼があり、備え付けの見本を貸し渡したと記載がある（註9）ほか、本写真帖の人物写真と同じ画像の青焼写真が国立印刷局お札と切手の博物館に現存していることが、その活用を示唆していよう（註10）。そうした活用によって流布した写真が、現在、各所の研究機関や博物館等に納められていて、これまでにも近代史研究の史料とされてきた。

また、本事業によって多くの関係者が、当時ではまだ珍しい写

真撮影を経験したことによって、写真撮影が幅広い層の人々へと普及する契機にもなったであろうことを挙げておきたい。と同時に、写真アルバムや肖像写真の形式が成立していく契機にもなったであろう。わが国の写真史において、様々な意味で大きな発展の契機となった存在である。

そして、収められた写真一人一人の貴重な姿である。本図録の後半には、その後、わが国で活躍して知られた人たちを373名を選んで紹介している。彼らの多くは、これまでに知られた肖像写真の中で、最も若い時の姿を含んでいよう。明治12年、13年は、わが国の写真史ではごく初期である。その時期の4500余名である。貴重な肖像写真群であることに疑う余地はない。

写真は、その時、その瞬間を写し取った、まぎれもない事実の記録である。明治12年から13年にかけて、4500余名の人たちが、その時の姿をここに残している。明治天皇の御下命という名誉な事業に参画した彼らの思い、そして集まった多くの群臣の姿を見た若き明治天皇の思いが交錯する本写真帖は、今後、貴重な明治初期の歴史資料として活用されることになろう。

註1　刑部芳則「まぼろしの大蔵省印刷局肖像写真－明治天皇への献上写真を中心に－」『研究年報第38号　文学研究科篇』中央大学大学院、2009年2月

註2　「御官奏任官以上并准奏任御用掛ノ輩各自ノ写真御手許へ差出候様御沙汰條　早々可差出候旨夫々へ御通達相成度　就テハ御官ニ於テ御取纏来十二月廿日迄ニ當省へ御廻付有之度候　此段及御照会候也　十二年十一月十九日」（『太政類典 第4巻第10編』／『公文録 明治13年自1月至3月 宮内省』国立公文書館蔵）

註3　明治13年6月11日付「奏任官准奏任以上ノ輩写真御差出方ノ儀ニ付客年十二月宮内卿ヨリ及御照会候処右ハ一時ニ限リ候儀ニテ本年一月以降新規拝命ノ者ハ撮影不及儀ニ有之候間此段為念御通知ニ及置候也」（『公文録　明治13年自1月至3月　宮内省』国立公文書館蔵、『元老院日誌　第2巻』（三一書房、1981年）、『開拓使公文録』簿書5907件53、北海道立文書館蔵）

註4　前掲註1の刑部氏の論文に、下記資料の調査結果が所載されている。≪太政官高官写真帖≫（国立国会図書館憲政資料室収集文書）、≪政府肖像高官写真集≫（横浜開港資料館蔵）、≪北方資料室所蔵写真≫（北海道大学付属図書館北方資料室蔵）、≪中野健明氏関係資料≫（東京大学史料編纂所寄託）ほか

註5　『写真科日誌』（国立印刷局お札と切手の博物館蔵）は明治13年7月から14年12月までと17年のものが現存している。宮内省の依頼による奏任官の撮影と判断される記載は、明治13年7月3日から12月7日まで確認出来る。それ以降も印刷局において肖像写真の撮影は行われているが、本事業との関連性は低いと判断される。

註6　しかし、以下の史料から印刷局で撮影を行わなかった地方出張者、在勤者については、４枚中２枚を焼付のまま提出させていることが分かる。『開拓使文書』（簿書5884件23、北海道立文書館蔵）明治12年12月23日付で、宮内省より開拓使宛に、各地出張在勤者の提出写真4枚のうち2枚は焼付のまま（本文は、「写取のまま」とある）で写真台紙に貼り付ける必要がない旨の通達がある。また『元老院日誌 第2巻』12月26日条（三一書房、1981年）には、同じく12年12月23日付で、同様の通達がある。

註7　前掲『元老院日誌』明治13年2月12日付元老院幹事より宮内卿宛の通達「准奏任以上写真献納」には、35名分各3枚の焼付を送付するとあるが、4枚のうち1枚は印刷局より直に宮内省へ納める旨が記されている。『開拓使公文録』（簿書5908件13、北海道立文書館蔵）の明治13年2月6日付の印刷局から開拓使へ宛てた文書にも、4枚のうち1枚は印刷局より直に宮内省へ納める旨が記されている。

註8　前掲『元老院日誌』明治13年5月15日付宮内書記官宛の通達「議官中写真未納ノ督促宮内省へ回答」には、元老院議官在任後に撮影は行っていないが、以前の官職において撮影済みの人物として8名があげられており、それに対して宮内省より、それらの人物の再撮影の必要はない旨が回答されている。〈Ⅰ類 A〉〈Ⅰ類 B〉と〈Ⅱ類〉との間で、記載の官職に異同があるのは、以上の様な事情によるものと考えられる。

註9　前掲註1参照。刑部氏はこの件について、内務省の官員調査にあたり、遠隔地に在勤する人物を確認するのに有益な手段であったと指摘されている。

註10　『明治期の印刷局写真館』印刷局記念館、2000年。また、国立印刷局お札と切手の博物館の松村記代子氏よりご教示いただいた。

[史料1] 明治12年11月21日付　印刷局より各官省あて

（『公文録 明治13年自1月至3月 宮内省』／『太政類典 第4巻第10編』。
『侍従局 布達録 明治12年』（宮内公文書館蔵）にも同文が掲載されている。）

一寫真ハ一日ニ拾五名内外撮影ノ事
一寫真撮影トシテ来着ノ儀ハ毎日必ズ午前第九時ヨリトス
一寫真期日中雨天曇天及ヒ烈風ノ節ハ順延ノ事
一来人御銘々名刺御差出ノ事
一寫真ノ節ハ可成禮服或ハ制服御着用ニ相成度事
一無據事故有之御差支ノ方ハ順次繰上ケ断ヘス拾五名内外ハ必ス御出張ノ事
　但、病氣其他ニテ御出張無之方ハ御名前ノ上ニ事故御記載有之度事
一局校課ノ勅奏任官ハ御本省ニテ御取纏メ区域ハ拾五名内外ヲ以テ壱組トシ番号并御望枚数記載ノ上當掛ヘ御通知有之度事
一各省順序ノ儀ハ御申込ノ順ヲ以相定置其期日ノ前々日ニ至レハ當局ヨリ御通知可申候事
一寫真出来ノ上ハ御本省ニ宛可差出事

[史料2] 明治12年12月9日付　宮内省より各官省あて

（『公文録 明治13年自1月至3月 宮内省』／『太政類典 第4巻第10編』。
『侍従局 布達録 明治12年』（宮内公文書館蔵）にも同内容が掲載されている。）

一在京ノ輩ハ総テ印刷局ニ於テ撮影シ該廳ヘ取纏メ宮内省ヘ送致ノ事
　但用紙寸法等宮内省ヨリ同局ヘ通知致シ置候事
一各地方出張又ハ在勤等ノ輩ハ其所在ノ地ニ於テ撮影シ一旦該廳ニテ取纏宮内省ヘ送致ノ事
　但用紙寸法等ハ印刷局ニテ撮影ノ分ト同様相成度候事
一着装ハ成ルヘク洋服ヲ要ス併シ無余儀輩ハ他ノ着装ニテモ不苦候事
　但禮服制服着用ハ本人随意ノ事
一寫真ハ壱名四枚ヲ要ス其代価ハ宮内省ヨリ印刷局ヘ償還ノ事
　但寫真四枚ノ外自己ノ望ニ依リ撮影候共限外ニ付其費用ハ自辨ノ事
一寫真御差出ノ豫期無之モ可成急速ニ撮影シ出来次第御取纏メ宮内省ヘ御差出有之度候事

[史料3] 明治12年12月26日付　宮内省より各官省あて

（『公文録 明治13年自1月至3月 宮内省』／『太政類典 第4巻第10編』）

今般奏任官以上ノ寫真御手許ヘ差出可相成ニ付テハ官位勲等氏名認方別紙雛形ニ應シ正楷ニテ記載ノ上差出候様御取計有之度尤寫取ノ儘ニテ臺紙ヘ貼付不致分ハ記載ニ不及候此段及御照会候也
　追テ本文記載ノ儀誤脱或ハ字体細大不揃ノ儀有之候テハ再ヒ撮影ヲ要スルニ至リ候ニ付相當之筆者御撰定各自之分一様ニ相認候様御取計有之度此段添テ申入候也

【17頁挿図1の雛形が添付】

［史料４］「有位華族撮影心得概記」明治13年3月5日付　宮内卿より有位華族あて
（『東坊城任長日記』明治13年3月16日条、図書寮文庫蔵）

有位華族撮影心得概記

一、撮影ハ各自四枚ツヽ、部局長ヘ差出シ、該局ヨリ目録ヲ添ヘ本省ヘ差出スヘシ。
　但四枚ノ内一枚ハ写取ノ侭ニテ台紙ヘ貼付ニ及ハス。

一、奏任官并准奏任以上ノ輩ハ奉職ノ庁ヨリ差出スモノトス、其判任以下ハ本族ヨリ差出スヘシ。

一、撮影ハ第一図ノ如ク半身ヲ顕シ、着装ハ成ル可ク洋服ヲ要スト雖トモ、故アリテ他ノ服ヲ着スルモ苦シカラス。

一、台紙ハ貼付ノ分三枚共ハ第二図ノ如ク撮影ヘ位階勲等氏名年齢等正楷ニテ部長局ニ於テ記載スヘシ。
　但撮影後未タ記名致サヽル内、位階ヲ進メラレ若シクハ奏任官准奏任ニ命セラレタル者ハ、其命セラレタル官位等ヲ記入スヘシ。

一、事故アリテ撮影シ能ハサル者ハ、其事由部長局ヲ経テ本省ヘ申出ヘシ。

一、在京之輩ハ大蔵省印刷局ニ於テ撮影スヘシ、尤日限ハ来九日ヨリ日々二拾名宛印刷局ヘ出頭撮影スヘシ。
　但其費用ハ本省ヨリ印刷局ヘ償還ス可シ。

一、各地方住居ノ輩ハ所在地ニ於テ撮影シ、其費用ハ本省ヨリ可下渡ニ付、追テ実際ノ費用高部長局ヘ申出該局ニ於テ調査ノ上取纏メ進達致スヘシ。

［史料５］「徴集詩歌書式」
（『嵯峨實愛日記』明治13年4月29日条、図書寮文庫蔵）

徴集詩歌書式

題　　本官姓名　上

比例

遠山霞

太政大臣三條實美上

官アル者ハ右ノコトク官ヲ書クヘキナリ
出仕御用掛准奏任ハ位階アラハ位階姓名上ト書ク位階ナキハ姓名上ト書ク
詩歌書法随意タリト雖モ餘リ散体ニ過テ誦讀シカタキ様ニハ書クヘカラス
　但色紙ノ裏ニ左ノ如ク附箋ニシテ差出スヘシ

何等出仕	
御用掛	何省
准奏任	

明治初中期にみる写真事情

明治12年(1879)5月1日大蔵省印刷局局長得能良介（1825-82、図版47頁）は、印刷局職員ら12名を引き連れ、正倉院ほか近畿地方を中心とした古社寺や古器物調査のため麹町区（現千代田区）大手町の印刷局を出発した。その中にはお雇い外国人の一人で当時紙幣などの印刷術指導のため招聘されていた、イタリアの銅版画家エドアルド・キヨッソーネをはじめ、印刷局写真技師三枝守富、得能彦次、局外からは古器物鑑定の役として幕末からの写真師鵜飼三二らがいた。明治初期のこの頃、維新前後の混乱の中、寺社等から美術品や古書籍などが巷間に流出しており、それが国外にまで流出していたことに得能自身が危機感を抱いたことがこの計画の理由のひとつといわれている。もっともこのような流出に対する危機感は、はやく明治4年(1871)に新政府が「古器旧物保存方」を布告し、古器物即ち文化財の内外への流出に歯止めをかけようとしている。

この布告を受け、翌５年には「古器旧物」の実地調査が行われた。これは明治５年の干支をとり「壬申検査」と呼ばれ、日本国が主導した史上最初の文化財調査といえるものである。この時も対象は正倉院をはじめ近畿の古社寺で、調査に当たったのは後に博物館を創立する町田久成(1838-97、図版 66 頁)、博覧会等に活躍する博物学者の蜷川式胤、そして写真師として幕末期から活動していた横山松三郎が、また日本洋画の先駆者である高橋由一や得能の調査時にも同行している鵜飼三二らであった。

このような国による文化財調査は、明治 21 年 (1888) にも実施された。この年、宮内省内に「臨時全国宝物取調局」が置かれ、10 年間にわたり宮内省・文部省・内務省が合同調査を行ったのである。当時宮内省図書寮寮頭（のちに帝国博物館初代総長）を務め、調査の取調委員長にも任じた九鬼隆一(1850-1931、図版 66 頁)が中心となり、フェノロサ、岡倉天心、重野安繹(1827-1910、図版 62 頁)、川田剛(1830-96、図版 62 頁)らが調査にあたった。そしてここでは明治中期の代表的写真師であった小川一真が同行している。この時の調査は明治 30 年に制定された最初の文化財保存法である「古社寺保存法」に発展した。

さて、ここまで写真とはあまり関わりない明治初中期の文化財保護の流れについてふれてきた。それはお気づきのように、この 3 回の文化財調査ではすべて写真師が同行しており、そこでは多くの社寺や器物を撮影していたことが知られるからである。

実は、この明治初中期には明治天皇によるほぼ全国を対象とした、後世「六大巡幸」と称される6度の御巡幸が行われているのであるが、ここでも印刷局等の写真師がその都度随行し、行く先々の景色、地方情勢などを撮影している。第1回目は明治5年の九州・西国巡幸であるが、この時は前出の横山同様幕末期から写真師として盛名のあった内田九一であった。内田はこの巡幸からの帰還後、天皇・皇后を宮城内で2度撮影している。これが御真影の初めとなり（下図版左）、本図録冒頭を飾る明治天皇御写真（4頁）は2度目の明治6年撮影になるものである。

明治天皇御肖像
（明治5年8月5日、内田九一撮影）

昭憲皇太后御肖像
（明治6年10月14日、内田九一撮影）

ではここで明治初期の写真技術について若干ふれておこう。

写真が日本に紹介されたのは、黒船が来航する直前、嘉永元年(1848)の事で、幕末・明治初期の代表的写真師である上野彦馬の実父俊之丞が長崎でダゲレオタイプ（銀板写真）一揃いの写真器材を輸入したことにはじまる。しかしこのダゲレオタイプはあまり流通せず、安政4年(1857)頃には新進のコロジオン湿板を種板（当時今でいうネガに当たるものは種板と称していた）とする技術がもたらされた。以後この技法が明治半ば頃まで継続する。湿板はガラス板に沃化コロジオンを塗り、そこに感光性を持たせるため硝酸銀溶液を塗布し、それが乾ききらないうちに撮影、現像しなければならず、時間に追われる慌ただしい作業であった。湿板という意味は文字通り湿ったガラス板という意味である。始めに述べた明治5年、12年の古器物調査も天皇の御巡幸写真も、そして本展覧会の肖像写真もこの方式によっている。この技法は渡来当初から大いに研究され上野彦馬、下岡蓮杖、そして先程来登場している横山松三郎、内田九一などの人々は幕末には早くも写真館を開いているのである。因みに明治21年の臨時全国宝物取調局の調査で小川一真が撮影に使った種板は、欧米ではすでに実用化されていたゼラチン乾板である。小川自ら渡米し研究してきたもので、おそらく乾板での公式記録写真の初めであろう。乾板は扱いやすさもあり昭和初期まで使用される。このように、明治初中期に行われた湿板技法は乾板技法の一段階前のものである。

写真は、それまではものを写しとるのには先ず手書き、という方法しかなかったところに、短時間にしかも正確な姿を写し撮る、というほんの10数年前までは予想もつかない技術であった。この写真という新技法を現状記録という目的で生かした最初の人物は、明治5年の壬申検査でも活躍した、先述の蜷川式胤である。蜷川はもともと京都の人であるが、維新後太政官に出仕し、そこで江戸城の荒廃を目の当たりにしたため、博物学者としてその記録の必要性を痛感、明治4年太政官に江戸城の撮影許可を求めた。許可は早々に出され、蜷川は横山松三郎、内田九一に依頼し江戸城を撮影して回った。その請願の中には「江戸城が破壊されぬうちに、写真にてその形況を残しておきたい。これは後世のためにもなる」(原文カナ交じり漢文、筆者要約)と述べている。まさにこの時の蜷川の言葉通り、それはひとつ江戸城写真だけに留まらず、器物調査や地方の情勢写真など今にいたっても鮮明な姿を見せてくれており、明治期の研究上優れた確たる第1級史料として、その存在は何よりも重要なものとなっているのである。

述べてきたように、写真術は湿板技法渡来後あまり時を経ずしてすでに公的な記録目的として使用された。しかもそれは近代化の先進地区の都市部に留まらず、地方においても速やかに普及していく。明治4年には北海道開拓使の命による開拓写真が在地の写真師田本研造により撮影されている。そこには当時の開拓使長官で、かねて写真に注目していた東久世通禧（1833-1912、図版54頁）の存在があった。また、山形県では明治8年県令となった三島通庸（1835-88、図版57頁）が在地の写真師菊地新学をして、自身の進める県の近代化に伴う、山形県庁に代表される洋風建築あるいは新設道路・橋などを撮影記録させた。また上野彦馬の西南戦争写真もしかりである。

以上に述べた事どもは官の要請によるものであるが、しかし写真師は在地に住む者達でありそこで生活している人々であった。したがってそこには需要もあったことがわかる。本展肖像写真でも116頁にふれられているように、印刷局以外で撮影されたものが国内に限れば九州・四国・北陸・東北などで30例にのぼるが、そのうちの宮城や四国など10例は管見の限りでは知られていない写真師であり、すでにこの時期地方での写真師の底辺はかなりの広がりを見せていたのである。肖像写真の撮影手順においても「各地方に勤務しているものは所在地にて撮影を」行うよう指示が出されており、すでに各地方でも撮影が出来る状況にあることを中央でも認識していたことがわかる。

明治という時代、それは官民挙げて近代化を推し進めていた時代である。そのような中、新渡来の写真という技術はそれ自体が近代化の一端を担い、また近代化を記録する格好の手段として、中央、地方の為政者達は写真師を大いに利用もしたのである。しかしそのことが写真という技法が浸透する後押しになったことも事実である。

写真という技法が官主導ではなく、幕末期に民間から沸き上がるように出てきたことは、その推進が早かったことと無関係ではない。

明治12、13年の肖像—本写真帖に収められた肖像写真から

本写真帖には、4531名もの肖像写真が収められている。本図録では、この中から、幕末～明治、大正期にかけて各界で活躍した人たち、373名を選び、その事績とあわせて紹介する。ここには、歴史上良く知られた人物の若年の姿や、これまで知られていなかった肖像など、数々の貴重な写真が含まれている。明治12～13年当時、28歳の若き明治天皇を支えてわが国の近代国家の礎を築いた人々の姿を如実に知ることが出来ることにおいても、その歴史的な史料性を高く評価出来よう。

ここに紹介する373名のうち、皇族および大臣、参議は収載されている全員を紹介し、華族は旧藩主や麝香間祗候の人物を主に選択した。また、その他の華族や高等官については、当時の官職に関わらず、後の彼らの事績を含めて著名な人物を中心に、下記の15の分野に分けて紹介している。

皇族 …… 28頁
大臣、参議 …… 31頁
華族 …… 35頁
天皇の側近として尽力した人々 …… 43頁
財政制度の確立に尽力した人々 …… 47頁
社会基盤の整備と産業の発展につとめた人々 …… 49頁
外交に寄与した人々 …… 54頁
地方の発展につとめた人々 …… 56頁
文化や教育の発展につとめた人々 …… 61頁
法制、法曹の分野で活躍した人々 …… 70頁
医学の発展に貢献した人々 …… 73頁
陸軍において活躍した人々 …… 75頁
海軍において活躍した人々 …… 81頁
神官、僧侶 …… 84頁
幕末維新において活躍した人々 …… 88頁

凡例

＊人名・官位勲等・年齢の表記は、〈Ⅰ類〉の写真台紙に記された内容によった。また、〈Ⅱ類〉と相違がある場合は、明らかな誤記と判断されるものも含めて、[ ]内に〈Ⅱ類〉の記載を記した。

＊人名の記載は、各肖像写真下は写真台紙の通りとし、解説文は新字を用いている。また、官職については新字で統一した。

＊肖像の掲載順は写真帖の収載順序とは、一致しない。

＊本写真帖に収められた4531名総ての人名等については、90頁より、五十音順にまとめて掲載した。

皇族

明治12年当時、皇室には、四親王家と呼ばれた伏見宮、有栖川宮、桂宮、閑院宮を含めて10の宮家があった。幕末から明治初期にかけての激動期、宮門跡にあった親王らが次々に復飾し、皇族として国事に深く関わることになる。四親王家以外の6宮家はすべて、伏見宮第19代貞敬親王、第20代邦家親王の皇子によって新設された宮家である。本写真帖には、9宮家の当主とその親王妃15名が収められているが、桂宮第12代淑子内親王や、明治11年に親王宣下を受けた有栖川宮威仁親王は含まれていないなど、当時の皇族方すべてではなく、その事情は明確でない。

幟仁親王
一品勲一等
69歳（1812-86）
有栖川宮第8代。同家は後陽成天皇第7皇子好仁親王を祖とし、寛永2年の創立。幟仁親王は有栖川流書道を大成させ、「五箇条の御誓文」を揮毫したことでも知られる。

熾仁親王
陸軍大将兼左大臣議定官二品大勲位
46歳（1835-95）
有栖川宮第9代。慶応3年、新政府の総裁に就任。東征大総督として江戸城を接収、東北地方も平定し、海陸軍の創設に尽力。天皇の名代として欧米各国を歴訪。

熾仁親王妃董子
26歳（1855-1923）
有栖川宮妃。旧越後新発田藩主溝口直溥第7女子。熾仁親王は先妻、貞子妃（徳川斉昭第11女子）薨去後、翌明治6年に董子妃と成婚。皇子女には恵まれなかった。

晃親王
二品勲一等
65[63]歳（1816-98）
山階宮初代。伏見宮邦家親王第1皇子で、文化14年勧修寺門跡となるが、元治元年に復飾、山階宮の称号を賜り、国事に参与した。

嘉彰親王
陸軍中将兼議定官近衛都督二品勲一等
35歳（1846-1903）
東伏見宮。伏見宮邦家親王第8皇子。仁和寺門跡。慶応3年に復飾し、英国留学を経て、陸軍に入り、後に要職を歴任。明治15年小松宮彰仁親王と改名。

嘉彰親王妃賴子
29歳（1852-1914）
東伏見宮妃。旧筑後久留米藩主有馬頼咸第1女子。明治2年に成婚。嘉彰親王との間に皇子女はない。19年嘉彰親王とともに訪欧。

貞愛親王
陸軍歩兵大尉兼議定官二品勲一等
23歳（1858-1922）
伏見宮第22、24代。伏見宮邦家親王第14皇子。同家は崇光天皇第1皇子栄仁親王を祖とし、室町時代の創立。貞愛親王は陸軍士官学校に学び、西南戦争、日清戦争、日露戦争に出征。

貞愛親王妃利子女王
23歳（1858-1927）
伏見宮妃。有栖川宮幟仁親王第4皇女。明治9年に成婚、邦芳王、昭徳王の2皇子が生まれた。

能久親王
陸軍歩兵中佐三品勲一等
34歳（1847-95）
北白川宮第2代。伏見宮邦家親王第9皇子。幼くして得度し、江戸に下る。明治2年に伏見宮に復籍し、翌年から10年までドイツに留学。同5年に同家を継承。

能久親王妃光子
22歳（1859-1920）
北白川宮妃。旧土佐高知藩主山内豊信第1女子。明治11年に成婚したが、18年に離婚。

博經親王
故海軍少将三品勲一等
享年26歳（1851-76）
華頂宮初代。伏見宮邦家親王第12皇子。明治3年海軍軍人を志し米国へ留学するも、病を得て5年に帰国、9年薨去。米国滞在中に撮影された写真を複写したものか。

博經親王妃郁子
28歳（1853-1908）
華頂宮妃。旧陸奥盛岡藩主南部利剛第1女子。明治7年に成婚。博經親王との間に明治8年に誕生した皇子（後の博厚親王）は、翌年に皇族に列せられるも、16年に病没。

朝彦親王
神宮祭主兼大教正三品勲一等
57歳（1825-91）
久邇宮初代。伏見宮邦家親王第4皇子。維新後は一時、広島藩預かりとなる。明治5年に伏見宮に復籍、8年に久邇宮。同年に神宮祭主となり、神宮の古儀復興に尽力した。

守脩親王
三品勲一等
62歳（1819-81）
梨本宮初代。伏見宮貞敬親王第10皇子。明治元年に梶井門跡から復飾して、3年に梨本宮と称する。継嗣なく、7年に山階宮晃親王の第1皇子菊麿王を養子とする。

載仁親王
三品
16歳（1865-1945）
閑院宮第6代。伏見宮邦家親王第16皇子。宝院門跡から明治4年に伏見宮へ復籍、翌年、男子継承者を欠いていた同家を継承。15年より仏国陸軍士官学校へ留学。

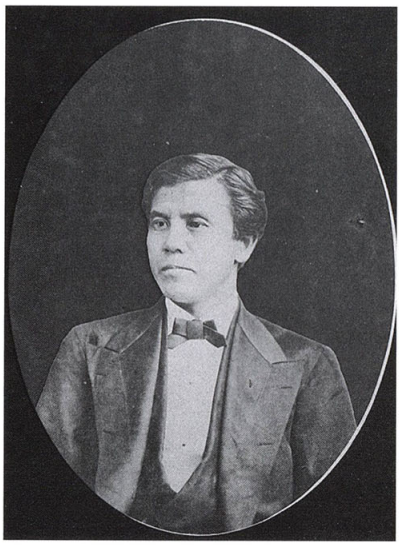
大臣、参議

皇族に続き、太政大臣三條実美以下、大臣、参議の要職にあった人々である。明治13年2月下旬、参議、各省卿が大きく改められたが、本写真帖にはその当時の複雑な政治背景が見え隠れしている。大蔵卿と記される人物が、大隈重信（明治13年2月まで大蔵卿）、佐野常民（明治14年10月まで大蔵卿）、松方正義（佐野の次代の大蔵卿、明治13年2月より内務卿）の3名いる一方で内務卿と記載される人物がいない点や、文部卿、工部卿と記載される人物もそれぞれ2名いる点など、それらは写真台紙への記名が官職の異動の時期と重なったためだけではなく、政治的配慮の一端を示しているといえよう。とはいえ、右大臣岩倉具視に続いて、故人でありながら大久保利通、木戸孝允が収められ、伊藤博文や西郷従道など、歴史上良く知られた面々の若かりし頃の肖像も含まれていて興味深い。

三條實美
太政大臣兼賞勲局総裁修史館総裁従一位勲一等
45[44]歳（1837-91）
尊皇攘夷派公家の中心的存在。薩摩藩ら公武合体派による文久3年8月18日の政変で長州へ逃れたが、王政復古とともに復官し、太政大臣、内大臣等の重責を担った。

岩倉具視
右大臣従一位勲一等
56歳（1825-83）
公武合体派であったが、尊攘派に糾弾され京都岩倉に蟄居。薩摩藩士らと通じて王政復古を図り、新政府の柱石として活躍。明治4年から6年にかけて使節団を率い欧米を訪問。

大久保利通
贈右大臣正二位勲一等
享年49歳（1830-78）
薩摩藩出身。岩倉具視と共に討幕運動の指導的役割を担った。維新後は岩倉使節団を経て初代内務卿となり、殖産興業政策を進めると共に内治優先の政治を主導した。



木戸孝允

故内閣顧問贈正二位勲一等

享年45歳（1833-77）

長州藩出身。吉田松陰門下。幕末に坂本龍馬の斡旋で西郷隆盛らと薩長同盟を結ぶ。新政府では参議、文部卿をつとめ数々の開明的な建言を行ったが若くして病に斃れた。

大隈重信

参議兼大蔵卿正四位勲一等

49歳（1838-1922）

佐賀藩出身。新政府では大蔵卿等を務めたが明治14年の政変で下野した後、わが国初の政党内閣を組織し、二度首相を務めた。早稲田大学を創立した。

大木喬任

参議兼議長正四位勲一等

49歳（1832-99）

佐賀藩出身。藩校弘道館に学び、幕末に佐賀勤王派として活躍。東京遷都に尽力し、その後は元老院議長や枢密院議長、山県内閣の司法大臣、松方内閣の文部大臣などを歴任した。

山縣有朋

陸軍中将兼参議議定官参謀本部長正四位勲一等

43歳（1838-1922）

長州藩出身。松下村塾に学び奇兵隊に参加。新政府では兵制を改革し陸軍の基礎を作る。首相はじめ大臣を歴任し、伊藤博文没後は最長老の元老として軍政両界に権勢を振るった。

伊藤博文

参議正四位勲一等

40歳（1841-1909）

長州藩出身。松下村塾に学び攘夷運動に参加。岩倉使節団や憲法調査のため西洋の諸制度を学び、内閣制度を創設し初代総理大臣となる。大日本帝国憲法の制定にも取り組んだ。

西郷従道

陸軍中将兼参議議定官正四位勲一等

38歳（1843-1902）

薩摩藩出身。西郷隆盛の弟。明治2年に山県有朋と欧州の兵制調査を行う。陸軍で近衛都督まで務めるが、のち海軍に転じ、第1次伊藤博文内閣では海軍大臣を務めた。

井上馨

参議兼外務卿正四位勲一等

45[46]歳（1835-1915）

長州藩出身。藩校明倫館に学び、維新後は外務、農商務、内務、大蔵大臣を歴任、財政・外交面での功績が大きく、紡績や鉄道など実業界の発展にも尽くした。

山田顯義

陸軍中将兼参議議定官正四位勲一等

37歳（1844-92）

長州藩出身。吉田松陰の松下村塾に学ぶ。維新の動乱で戦功を挙げ、陸軍で実力を発揮した後、初代司法大臣として法典整備に尽力した。日本大学、國學院大學の前身を創設した。

松方正義

参議兼大蔵卿正四位勲一等

45歳（1835-1924）

薩摩藩出身。大蔵卿と大蔵大臣を長期にわたり在任し、日本銀行の創設や紙幣整理、金本位制の導入など国家財政の立て直しに功績を残した。

大山巌

陸軍中将兼参議陸軍卿議定官正四位勲二等[陸軍中将兼陸軍卿議定官従四位勲二等]

39歳（1842-1916）

薩摩藩出身。西郷隆盛・従道の従兄弟。普仏戦争を視察、欧州で軍政を学んだ。帰国後は陸軍大臣を長らく務め陸軍の近代的改革を行い、山県有朋と並ぶ実力者となった。

榎本武揚

海軍中将兼海軍卿議定官従四位勲二等

45歳（1836-1908）

旧幕臣。戊辰戦争後は新政府に登用され、旧幕時代にオランダ留学で得た該博な知識を様々な分野に活用し、北海道開発を手がけ、逓信、農商務、文部、外務の各大臣を歴任した。

川村純義

海軍中将兼参議議定官正四位勲一等

41歳（1836-1904）

薩摩藩出身。長崎海軍伝習所で学び、戊辰戦争で活躍。海軍卿まで務めた後、宮中顧問官に転じた。明治天皇の信任が篤く、迪宮（昭和天皇）、淳宮（秩父宮）の養育を託された。

福岡孝弟

参議兼文部卿正四位勲二等[議官従四位]

46歳（1835-1919）

土佐藩出身。坂本龍馬や海援隊と提携し、藩の殖産興業を推進。後藤象二郎と共に徳川慶喜に大政奉還を勧告した。由利公正ら五箇条の御誓文の原案起草者の一人。

佐佐木高行

参議兼工部卿正四位勲二等[議官兼宮内省御用掛従四位]

51歳（1830-1910）

土佐藩出身。新政府では参議、司法大輔となり岩倉使節団に参加した。のち宮中顧問官、枢密院顧問官となり、その間に皇太子明宮（大正天皇）、皇女の御養育掛を務めた。

黒田清隆

陸軍中将兼内閣顧問正四位勲一等[陸軍中将兼参議開拓長官正四位勲一等]

41歳（1840-1900）

薩摩藩出身。五稜郭の戦いで戦功を挙げた後、開拓次官となり屯田兵を創設、外国人を招き北海道開拓の基礎を築いた。内閣総理大臣、枢密院議長等を務めた。

寺島宗則

元老院議長正四位勲一等［参議正四位勲一等］

49歳（1832-93）

薩摩藩出身。江戸で蘭学を学び、明治新政府では外務卿のほか英国、米国へ特命全権公使として赴任するなど外交官として、条約改正交渉に当たった。

佐野常民

大蔵卿従四位勲二等

59歳（1822-1902）

佐賀藩出身。前半生は海軍の基礎作りに尽力、後半生は博覧会事業を通じて日本の産業の近代化を図った。日本赤十字社の前身である博愛社や美術団体の龍池会を設立した。

河野敏鎌

文部卿従四位勲二等

37歳（1844-95）

土佐藩出身。佐賀の乱、西南戦争に際し裁判長を務めた。明治14年の政変で下野し、大隈重信らと立憲改進党を結成。のちに農商務、内務、司法、文部の各大臣を歴任した。

山尾庸三
工部卿従四位
44歳（1837-1917）
文久3年に伊藤博文、井上馨らと共に英国へ密航した長州五傑の一人。同国での各種工業の調査をもとに、工部卿など工学の推進に関わる重職を担った。

田中不二麻呂
司法卿従四位
36歳（1845-1909）
尾張藩出身。岩倉使節団に加わり欧米の教育制度を調査した。教育令を建白するなど近代的な教育の実施に功績を残した。イタリア、フランス公使を経て司法大臣を務めた。

徳大寺實則
宮内卿正二位勲一等
42歳（1839-1919）
公家。明治4年に侍従長と宮内卿を兼務。明治天皇崩御に至るまで侍従長として奉仕した。24年より先帝御事蹟取調掛長として『孝明天皇紀』の編修を主宰した。

華族

華族は、「麝香間祗候」（華族、親任官や維新の功労者を優遇するための名誉的な資格）という勅任官に準ずる待遇を受けた人々を始め、非役の人々を含めて、常に皇室を支える重要な役割を担っていた。肖像の年齢層は、最高齢91歳から最年少8歳までと幅広い。ここでの華族は、明治天皇の外祖父にあたる中山忠能を筆頭に、公家、旧藩主の出身者である。この中には、兄弟で政治的な立場を異にしながら活躍した徳川慶勝ら高須四兄弟や、伊達宗紀父子のように幕末から明治の転換期に様々に尽力した者も含まれる。

中山忠能
麝香間祗候従一位
72歳（1809-88）
公家。娘慶子は明治天皇の生母。大正天皇は7歳まで中山邸ですごした。一貫して王政復古を唱えるが、和宮降嫁に際しては岩倉らと尽力。慶応3年倒幕の密勅を薩摩・長州に下す。

九條道孝
麝香間祗候従一位
40[41]歳（1839-1906）
公家。貞明皇后の実父。維新では奥羽鎮撫総督として東北各地を転戦。明治23年貴族院議員。

九條優麿
従五位
12歳（1869-1933）
公家。道実。道孝の子。貞明皇后の兄。明治22年に英国留学、29年宮内省に出仕、掌典長を務めた。明治大正の大葬、大正昭和の大礼に尽力した。

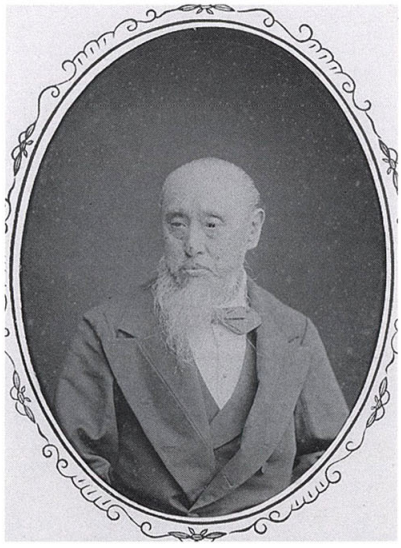
徳川慶勝
麝香間祗候従一位　元名古屋藩主
57歳（1824-83）
美濃高須藩主松平義建の次男。尾張徳川家を相続。王政復古に大きな役割を果たし、討幕側にくみして出兵する等、幕末維新の動向に大きな影響力を与えた。

徳川茂榮
従二位　元一橋藩主
50歳（1831-84）
茂徳。松平義建の五男。兄慶勝が将軍継嗣問題で隠居して後、尾張藩主となる。が、兄の政治復帰後、政治的立場を異にした対立解消のために自ら隠居、後に一橋家の当主となる。

松平容保
従五位　元斗南藩主
46歳（1835-93）
松平義建の六男。会津藩第9代藩主のとき、幕末の京都守護職として新撰組を配下に置き治安に努めた。斗南は維新後の旧会津藩の封地。

松平定敬
正五位　元桑名藩主
35歳（1846-1908）
松平義建の八男。幕末、京都守護職であった兄容保の下で京都所司代となり、兄弟で京都の治安維持に尽力した。

近衛忠熙
麝香間祗候従一位
73歳（1808-98）
公家。五摂関筆頭近衛家の幕末の当主。安政の大獄で失脚。四代の天皇に仕え皇事に活躍した。



久我建通
麝香間祗候正二位
66歳（1815-1903）
公家。孝明天皇の寵遇を得たが、和宮降嫁問題など幕府との関係で蟄居・落飾を命ぜられた。維新後は維新前諸儀式取調御用掛、宸翰御用掛を務めた。

嵯峨實愛
麝香間祗候正二位
61歳（1820-1909）
公家。家名「正親町三条」を明治3年に「嵯峨」と改める。幕末には国事御用掛、議奏などを務め、倒幕の密勅を薩長両藩に伝える。

長谷信篤
麝香間祗候従二位
63[60]歳（1818-1902）
公家。幕末に国事御用掛等を務める一方で、学習院学頭にも任じられる。王政復古後は参与、議定をつとめ、また刑法事務総督を兼ねた。初代京都府知事。

壬生基修
麝香間祗候従三位
46歳（1835-1906）
公家。幕末の条約勅許問題などで活動。文久3年8月18日の政変で失脚し世にいう七卿落ちする。維新後は東京府知事などを歴任。

大原重徳
贈正二位
享年78歳（1801-79）
公家。攘夷論者。島津久光の攘夷等に関する献策を幕府に承諾させるための勅使として下向したことは有名。明治元年集議院長官。

野宮定功

正二位

66歳（1815-81）

公家。和宮降嫁の際の御縁組御用掛。議奏、武家伝奏、国事御用掛を歴任。それらに関する自筆の記録類が当庁書陵部に多数伝存する。

六條有容

賀茂別雷神社宮司兼大教正正二位

67歳（1814-90）

公家。幕末には岩倉具視、中山忠能らと共に国事に奔走。その間参議、議奏にも任じられる。明治3年宮内大丞を務める。

西園寺公望

正三位

34歳（1849-1940）

公家。明治から昭和初期までの政治家。内政外政に活躍し、自らも明治期に2度首相をつとめる。他方詩文など学問的な造詣も深い文化人でもあった。

河鰭實文

内務省准奏任御用掛従四位

36歳（1845-1910）

慶応4年錦旗奉行を拝命し、有栖川宮熾仁親王に従い江戸城へ入城。維新後、東京府権少参事、内務省御用掛、元老院議官等を歴任した。三條実美の実弟。

蜂須賀茂韶

外務省准勅任御用掛従二位
元徳島藩主

35歳（1846-1918）

廃藩置県後、外務省御用掛、大蔵省関税局長、東京府知事、文部大臣、枢密顧問官等を歴任。

鍋島直大

特命全権公使従三位[外務省准勅任御用掛従三位]　元佐賀藩主

35歳（1846-1921）

慶応3年パリ万博に薩摩藩とともに、独自に参加。元年の上野戦争では藩兵がアームストロング砲を使用した。貴族院議員、宮中顧問官など歴任。

伊達宗紀
従四位　元宇和島藩主
91歳（1792-1889）
宗城の先代藩主。藩政改革を行い、商業の振興、検地、文武教育励行等を進め、他方高島流砲術の導入も行った。

伊達宗城
麝香間祗候従二位　元宇和島藩主
63歳（1818-92）
開明派で徳川斉昭や松平慶永らと親しく、一橋慶喜擁立にも尽力。維新後民部卿兼大蔵卿などを経、日清修好条規の調印では全権大使をつとめた。

松平慶永
麝香間祗候正二位　元福井藩主
53歳（1828-90）
号春嶽。攘夷論であったが開国論に転換。井伊により一時失脚するが、井伊が斃れたあと復帰し政事総裁職などで幕政の中心的存在となる。

淺野長勲
麝香間祗候正二位　元広島藩主
39歳（1842-1937）
薩長と倒幕の盟約を結び、大政奉還を勧告。王政復古後、議定、参与、元老院議官、イタリア公使、宮内省華族局長官などを歴任。

池田茂政
麝香間祗候正三位[麝香間祗候従二位]
元岡山藩主
42歳（1839-99）
実父は水戸の斎昭。その感化で尊王攘夷派を通し、長州征伐には出兵を拒否した。明治政府では弾正台に出仕、弾正大弼に任じた。

池田章政
麝香間祗候従三位　元岡山藩主
45歳（1836-1903）
慶応4年藩論を公武合体から倒幕へと転換。転換時に藩主となり明治を迎えた。

毛利元徳

麝香間祗候従二位　元萩[山口]藩主

42歳（1839-96）

第一次長州征伐時の藩主。長州藩の外国艦船砲撃を指示。王政復古後、議定、参議。のち東京に移住し、第十五国立銀行頭取を経て貴族院議員。

島津忠義

麝香間祗候従二位　元鹿児島藩主

41歳（1840-97）

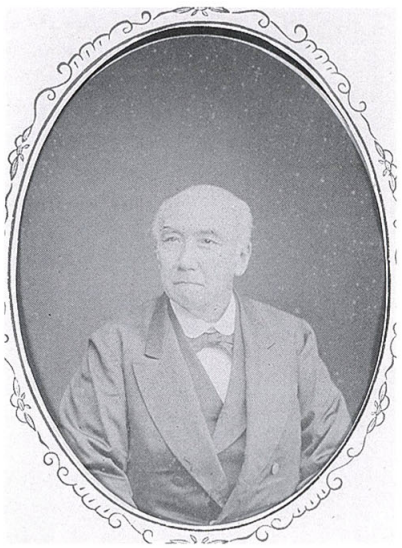
文久3年薩英戦争時の藩主。慶応元年には英国に留学生を派遣するなど交流を始め、3年のパリ万博にも参加し幕府とは別に薩摩藩として独自の展示を行った。

徳川茂承

従二位　元和歌山藩主

37歳（1844-1906）

第二次長州征伐の征長先鋒総督。鳥羽伏見の戦で敗走の幕府軍を海路江戸に搬送する。明治5年赤坂中屋敷地を献上、現在の赤坂御所となる。



前田齊泰

正三位　元金澤藩主

70歳（1811-84）

文政7年から慶応2年まで第13代の藩主を務めた。藩は徳川家との血縁が強く、維新時も最後まで佐幕であり、鳥羽伏見の戦でも援軍を送った。

細川護久

麝香間祗候従三位　元熊本藩主

42歳（1839-93）

王政復古後議定、参与に就任。3年熊本藩知事となり、洋学校、医学校を創設する。

山内豊範

麝香間祗候従三位　元高知藩主

35歳（1846-86）

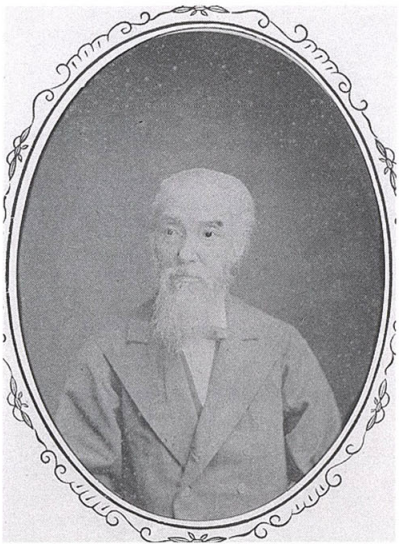
安政6年藩主となるが、藩政は前藩主容堂が主導した。明治6年5月の皇居火災の際、山内家蔵書の大半を皇室に献上した。

佐竹義堯

麝香間祗候従三位　元秋田藩主

56歳（1825-84）

幕末、勤王佐幕の藩論統一は難しかったが、鎮撫総督の秋田入りにより勤王に定まり、奥羽列藩軍と交戦。維新後は久保田藩知事。



亀井茲監

麝香間祗候従三位　元津和野藩主

59歳（1825-85）

藩政に武芸、国・蘭学を奨励し、大国隆正、福羽美静、西周らを育てた。自身は神祇事務局判事、神祇官副知事など、神祇行政に手腕を振るった。

亀井茲明

従五位

20歳（1861-96）

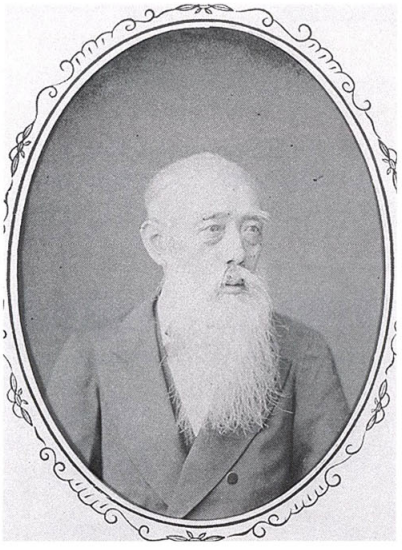
亀井茲監の養嫡子。明治中期にベルリンに留学、主に美術を学び、写真術も習得。帰国後日清戦争勃発により写真班を率いて従軍、従軍写真師の草分けとなる。

藤堂高猷

従三位　元津藩主

68歳（1813-95）

幕末には沿岸・伊勢神宮警備に当たり砲台を築き、神宮には大砲4門を献納した。藩でカメラを購入し、実験させる。



黒田長溥

従三位　元福岡藩主

70歳（1811-87）

蘭学に積極的で、シーボルトとの交際もあり、他藩の蘭学者にも経済的な援助を行った。藩士を長崎に派遣し医学、軍事、写真術などを学ばせた。

酒井忠篤

陸軍歩兵中尉従五位 元大泉藩主

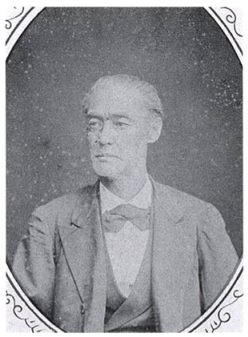
28歳（1853-1915）

元庄内藩主。戊辰戦争では佐幕派として優勢に戦うが、時流により降伏。しかし藩は西郷の配慮で残存した（明治2年、大泉藩と改称）。ために西郷を篤く敬慕、鹿児島にも遊学した。

松浦詮
麝香間祗候従四位
[麝香間祗候正四位]
元平戸藩主
41歳（1840-1908）
蘭学を奨励。福岡藩らと結び海防につき技術導入。

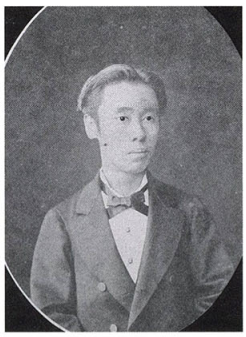
津輕承昭
麝香間祗候正四位
元弘前藩主
40歳（1840-1916）
和歌を嗜み、宮中への詠進歌も多い。

松平確堂
正四位　元津山藩主
67歳（1814-91）
名は斉民。徳川宗家を継いだ徳川家達の後見人。



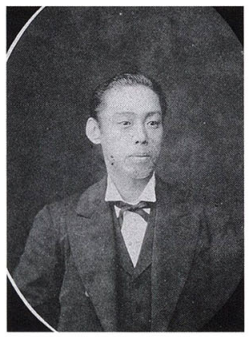
有馬頼咸
麝香間祗候従四位
元久留米藩主
58歳（1828-81）
兵制を改革し、編成を英国式にし、農兵も組織した。

松平忠禮
従五位　元上田藩主
31歳（1850-95）
米国に7年留学し、大学を卒業。写真を好んで撮影した。



戸田氏共
工部省御用掛准奏任従五位　元大垣藩主
27歳（1854-1936）
戊辰戦争に軍功。明治中期の宮内官僚。

鍋島直彬
沖縄県令正五位[沖縄県令兼判事従五位]
元鹿島藩主
38歳（1843-1915）
侍従、文学御用掛等歴任。初代沖縄県令。



鷲尾隆聚
工部少書記官正四位
39歳（1842-1912）
公家。倒幕のため慶応3年高野山に志士を集める。

柳原前光
議官兼特命全権公使正四位勲二等[元老院幹事正四位勲二等]
31歳（1850-94）
公家。大正天皇生母柳原愛子の兄。

四條隆謌
陸軍少将正四位勲二等
53歳（1828-98）
公家。尊皇攘夷派。長州への七卿落ちの一人。

近衛篤麿
従五位
18歳（1863-1904）
公家。貴族院議長として一貫して藩閥政治を批判。

東坊城任長
従四位
43歳（1838-86）
公家。明治2年最初の御講書始で『論語』を進講。

天皇の側近として尽力した人々

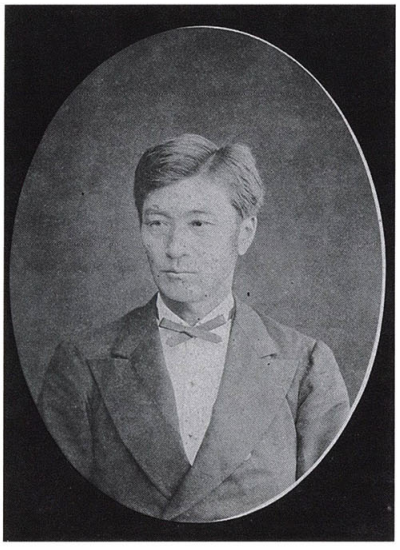
後に宮内大臣や侍従長をつとめ、明治・大正両天皇を支えた人々が多く含まれている。いずれも明治12年当時の肖像写真は知られておらず貴重である。その中には明治天皇に年齢も近く、側近として尽力した藤波言忠などがおり、当時の明治天皇周辺の面々の様子が現実的にうかがえることはとても興味深い。

杉孫七郎
宮内大輔従四位
46歳（1835-1920）
藩校明倫館に学び、また吉田松陰の薫陶を受けた。維新後は、秋田県令等を務め、明治6年以降、宮内大丞、宮内大輔、皇太后宮大夫など宮中の要職を歴任した。

土方久元
宮内少輔兼議定官正五位
48歳（1833-1918）
土佐勤王党に参加。中岡慎太郎と共に薩長連合の実現に尽力した。維新後は、内務、宮内少輔を経て、宮内大臣、枢密顧問官等を歴任した。

香川敬三
宮内大書記官兼皇太后宮亮従五位
40歳（1839-1915）
水戸藩士藤田東湖の門弟となり勤王を唱え国事に奔走。戊辰戦争では近藤勇を捕らえたことでも知られる。明治3年宮内省権大丞、19年皇后宮大夫を歴任した。

元田永孚
皇后宮大夫兼二等侍講正五位
63歳（1818-91）
儒学者。明治4年より宮内省に出仕、8年より20余年明治天皇の側近にあり儒学を講じた。儒教主義による国民教化に尽力し、『教学大旨』・『幼学綱要』を執筆した。



堤正誼
宮内権大書記官正六位
47歳（1834-1921）
安政4年橋本左内とともに海軍教授所に入り航海術を学ぶ。明治4年より侍従として奉仕、30年宮内次官に任ぜられ、宮中顧問官、貴族院議員となった。

髙崎正風

宮内省四等出仕従五位

45歳（1836-1912）

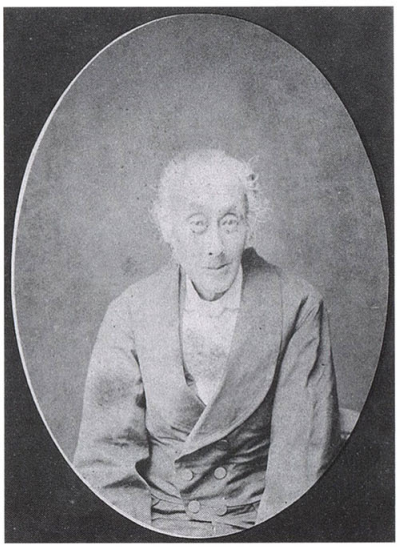
歌人。明治4年より新政府に仕え、左院少議官となり欧米視察。9年宮中の御歌掛を兼務、21年初代御歌所所長となり、45年に没するまでこの職にあった。

池原香穑

宮内省御用掛

51歳（1830-84）

国学者。号日南。明治9年、宮内省文学御用掛を拝命。高崎正風の下で学ぶ。13年山梨三重両県巡幸に供奉し、随行紀『みとものかず』を著す。



三條西季知

麝香間祗候宮内省御用掛正二位勲二等[宮内省御用掛正二位]

70歳（1811-80）

七卿の一人で尊攘派の公家。維新後は、明治天皇の近習・侍従となって歌道の指導にあたった。

山口正定

海軍中佐兼侍従長正六位

38歳（1843-1902）

明治11年に侍従長。のち主猟局長官、主殿頭、宮中顧問官などを歴任。日記に、明治12年12月16日7時に印刷局において海軍小礼服で撮影と記している。

米田虎雄

陸軍中佐兼侍従長正六位

42歳（1839-1915）

元熊本藩士。明治4年より公家に加えて士族も侍従に登用する宮中改革が行われ、侍従となり以降一貫して務めた。37年宮中顧問官、41年主猟頭を兼ねた。

藤波言忠

侍従従四位

28歳（1853-1926）

明治7年宮内省九等出仕となり、12年より侍従。馬の鑑識眼に秀で、新冠牧馬場御用掛などを経て、22年より主馬頭を務めた。のち宮中顧問官となる。

片岡利和

侍従従六位

45歳（1836-1908）

土佐勤王党に参加、武術にすぐれ、尊攘運動に活躍した。維新後は、東京府参事を経て明治4年侍従となり、この間数次にわたって北海道・千島を踏査した。

吉井友實

議官兼工部少輔従四位

53歳（1828-91）

西郷隆盛ら薩摩革新派と誠忠組を結成、国事に奔走。維新後は宮内少輔、元老院議官、宮内次官、枢密顧問官等を務めた。

田中光顯

陸軍会計監督長正五位勲三等

38歳（1843-1939）

土佐藩出身。土佐勤王党に参加し、維新後は陸軍少将、会計検査院長、警視総監、学習院長を経て宮内大臣を務めた。晩年は維新烈士の顕彰に尽力した。

渡邉千秋

鹿児島県令従六位[鹿児島県大書記官従六位]

38歳（1843-1921）

諏訪高島藩出身。鹿児島県、滋賀県、京都府の各知事や北海道庁長官、帝室林野局長官等を経て宮内大臣となり、明治天皇の御大喪では大喪使副総裁を務めた。

岩倉具定

内務省准奏任御用掛従四位

30歳（1851-1910）

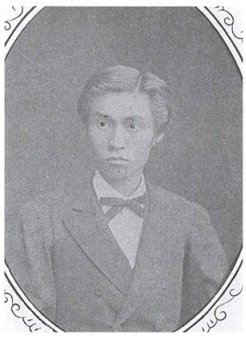
具視の第三子。孝明天皇の側近を務め、維新後は米国に留学したのち、諸官吏を経て、明治42年宮内大臣に任じられた。

波多野敬直

判事正八位

31歳（1850-1922）

肥前小城藩出身。司法省へ出仕、司法大臣を経て東宮大夫として宮内省へ転じ、後に宮内大臣を務めた。



中山孝麿
従五位
29歳（1853-1919）
明治14年東京日本橋区長、麹町区長を務め、のち東宮侍従長、宮中顧問官等を務めた。

兒玉愛二郎
宮内権大書記官正六位
41歳（1840-1930）
元萩藩士。維新後は宮内大書記官、皇后宮亮を務めた。

足立正聲
宮内少書記官従六位
40歳（1841-1907）
元鳥取藩士。維新後は、諸陵頭、図書頭等を歴任。

髙辻修長
侍従従三位
41歳（1840-1921）
慶応3年明治天皇に漢籍を進講、維新後は侍従、東宮侍従長等を歴任。

富小路敬直
侍従正四位
39歳（1842-92）
公家。明治2年より終身侍従として奉仕した。

西四辻公業
侍従従四位
43歳（1838-99）
公家。明治5年より終身侍従として奉仕した。

東園基愛
侍従従四位
31歳（1851-1920）
公家。侍従、掌典次長を務め、のち宮中顧問官となった。

北條氏恭
侍従従五位
36歳（1845-1919）
元狭山藩当主。明治2年狭山藩知事を経て、4年より侍従、のち宮中顧問官となった。

香渡晋
宮内省御用掛
49歳（1830-1902）
岩倉具視の顧問、明治憲法制定に貢献した。大正天皇の御用掛を務めた。

正親町實正
従四位
26歳（1855-1923）
公家。侍従長、賞勲局総裁等を歴任した。

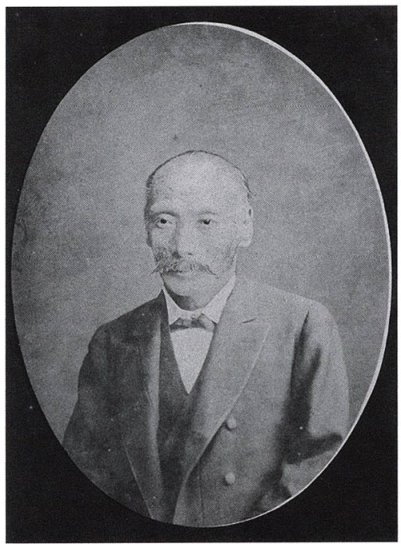
徳川達孝
従四位[従五位]
16歳（1865-1941）
御三卿田安家当主。のち貴族院議員、侍従長を務めた。

鷹司熙通
陸軍歩兵少尉正五位
26歳（1855-1918）
公家。東宮武官、侍従長など歴任した。

財政制度の確立に尽力した人々

近代貨幣制度、紙幣制度を確立した造幣局長遠藤謹助や印刷局長得能良介を始め、初代日銀総裁を務めた吉原重俊、西洋の財政学を日本へ初めて紹介した田尻稲次郎など、近代の造幣技術や財政制度の礎を築いた人々を紹介する。

吉原重俊
大蔵少輔正五位[大蔵大書記官従五位]
36歳（1845-87）
薩摩藩の米国留学生としてイェール大学に学び、帰国後、外務省から大蔵省に転じ日本銀行初代総裁となる。晩年にかなの会を起こす。



得能良介
大蔵大書記官従五位
56歳（1825-82）
幕末は薩摩藩士として国事に奔走し、新政府では大蔵省印刷局に出仕し、印刷局長として紙幣製造に尽力した。

遠藤謹助
大蔵大書記官従五位
45歳（1836-93）
幕末に長州藩から英国へ留学した、井上馨、伊藤博文ら長州五傑の一人。新政府では造幣局に出仕し、局長まで務めた。

郷純造
大蔵大書記官従五位
52歳（1825-1910）
旧幕臣。新政府では大蔵官僚として、渋沢栄一や前島密ら旧幕臣の登用を大隈重信や伊藤博文に薦めた。初代大蔵次官。

松尾臣善
大蔵少書記官従六位
38歳（1843-1916）
大蔵省から日本銀行第6代総裁となり、副総裁の高橋是清と共に日露戦争における外債募集などに取り組んだ。

渡部欽一郎
大蔵少書記官従六位
34歳（1845-86）
大蔵省在籍中に西洋式簿記に啓発され、日本語文の横書き・左起こしを進言、制度となるきっかけを作った。

藤島正健
大蔵少書記官従六位
35歳（1845-1904）
大蔵書記官を経て銀行局長となり、後に富山、千葉県知事、日本勧業銀行副総裁を務めた。

田尻稲次郎
大蔵少書記官
29歳（1850-1923）
明治4年から9年間米国へ留学、イェール大で学ぶ。大蔵省で要職を務め、日露戦争の戦費調達、債務処理に尽力。第6代東京市長。

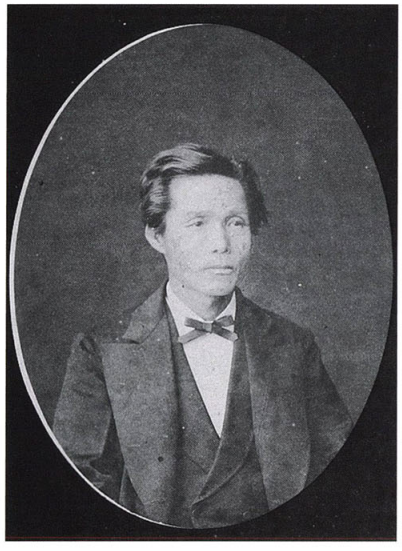
神鞭知常
大蔵権少書記官正七位
31歳（1848-1905）
大蔵省に出仕、1876年のフィラデルフィア博覧会御用掛等を経て、衆議院議員や法制局長官を務めた。

富田鐵之助
外務一等書記官正六位
記載なし（1835-1916）
勝海舟の蘭学塾に学び、勝小鹿と共に米国に留学。のち岩倉使節団の随員となり、以後外交官として活躍。帰国後、大蔵省に入り、日本銀行設立に尽力し、初代副総裁となる。

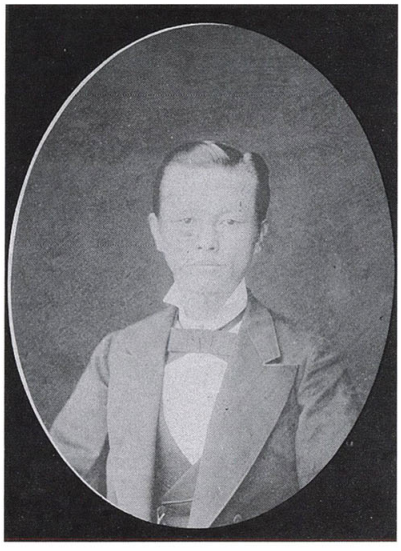
社会基盤の整備と産業の発展につとめた人々

当時の内務省の官吏には、郵便制度の確立者として有名な前島密のほか、通信事業や鉄道、さらに標準時を定めるなど、社会基盤の整備に貢献した人物が多数いる。さらに、産業振興の政策を進めた人物、実業界へ転じた人物など、多彩な経歴を持つ人々を紹介する。

前島密
駅逓総官従四位[内務少輔兼議官地租改正局三等出仕従四位]
44歳（1835-1919）
わが国の近代郵便制度の創始者。逓信次官、貴族院議員、関西鉄道や北越鉄道会社社長等を務める。1円普通切手の肖像。



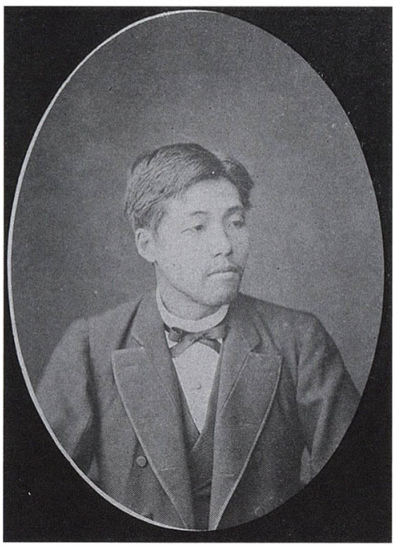
石丸安世
大蔵大書記官従五位
45歳（1839-1902）
佐賀藩出身。英国留学後、工部省に出仕、初代電信頭となる。国産碍子の生産、東京－長崎間の電信を架設、インフラ整備に努めた。



石井忠亮
工部少書記官従六位
41歳（1840-1901）
佐賀藩出身。海軍中佐から工部省に転じ、欧州の電信事情の視察後、逓信省の初代電信局長に就任、国営電話事業を開設。

井上勝
技監正五位
38歳（1843-1910）
井上馨らと英国留学した長州五傑の一人。鉱山や鉄道の技術を学んで帰国後、鉄道庁長官として鉄道事業の発展に尽くした。

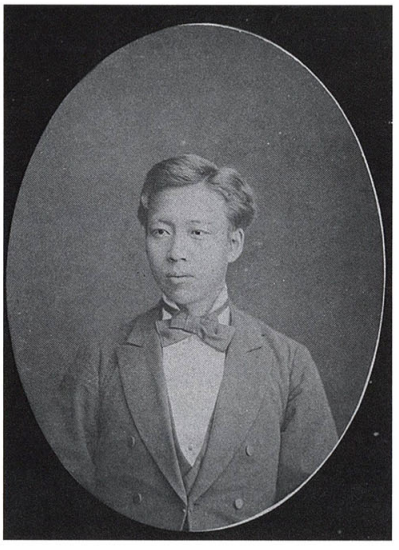
品川彌二郎
内務大書記官従五位勲四等
38歳（1843-1900）
長州藩出身。松下村塾に学び、木戸孝允と共に薩長同盟の成立に尽力。維新後は英仏独に留学、内務大臣、枢密顧問官等を務めた。信用組合の設立奨励を行った。



白根専一
内務少書記官従六位
32歳（1849-98）
内務省に入り、愛知県知事をへて、内務次官に就任。明治25年第2回衆議院議員総選挙において内務大臣品川弥二郎の下、大規模な選挙干渉を行った。

武井守正
内務権大書記官正六位
39歳（1842-1926）
明治11年、竹橋事件を事前に探知。のち農商務省局長、21年から鳥取県知事を務め、勧業政策を進める。26年以降実業家に転じ、帝国海上保険等を創設。

井上省三
内務省准奏任御用掛
32歳（1845-86）
明治4年よりベルリンに留学し、毛織技術を学ぶ。帰国後内務省勧業寮に入り、明治12年に千住製絨所初代所長に就任。殖産興業の発展に努めた。



中野武營
内務省准奏任御用掛
33歳（1848-1918）
内務省に勤めた後、明治14年の政変で下野し、立憲改進党の結成に参画。関西鉄道会社、東京商業会議所等で重役を務め、実業界の発展に貢献した。

益田克徳
内務省准奏任御用掛正七位
29歳（1852-1903）
司法省時代に海上保険例を作成し、民間に下ってからは自由民権運動に参加。東京海上保険会社の支配人や明治生命取締役等を歴任。
益田孝（鈍翁）の弟。

荒井郁之助
内務省准奏任御用掛従五位
45歳（1835-1909）
明治3年から開拓使仮学校において測量技術者として活躍。その後、内務省測量局長となり、日本の経度測定、標準時の制定に携わる。23年初代気象台長。

櫻井勉
内務権大書記官従六位
38歳（1843-1931）
明治10年内務省地理局長に就任。地誌編纂業務にあたったほか、全国の気象測候所の設置に尽力、気象観測網の基礎を築いた。

前田正名
大蔵省准奏任御用掛
30歳（1850-1921）
仏国留学後、殖産興業を推進し『興業意見』全30巻を提出。山梨県知事、農商務次官等を務め、後半生は北海道東部開発に尽力した。

大鳥圭介
工部大書記官従五位
48歳（1833-1911）
旧幕臣。新政府では技術官僚として殖産興業に貢献。工部大学校校長、学習院院長兼華族女学校校長、駐清特命全権公使など多彩な活躍をした。

平岡通義
工部大書記官従五位
50歳（1831-1917）
萩藩出身。工部省に出仕し建築を担当、セメントの製造を推進、皇居（明治宮殿）造営等に携わる。辰野金吾、片山東熊ら後進を育てた。

大野規周
造幣中技師従六位
61歳（1820-86）
幕府暦局御用時計師の家系。榎本武揚らとオランダへ留学、新政府では造幣局に出仕し近代度量衡の標準機器の製作に従事した。

加納久宜
従五位
33歳（1848-1919）
元一宮藩主。鹿児島県知事として西南戦争後の復興に尽力、帝国農会や東京競馬倶楽部の会長を務めた。

森岡昌純
兵庫県令従五位
47歳（1833-98）
兵庫県令、農商務少輔を経て、明治18年に共同運輸会社第2代社長に就任。郵便汽船三菱会社との合併を実現し、日本郵船会社初代社長に就任した。

人見寧
茨城県令従六位[茨城県大書記官従六位]
36[38]歳（1843-1922）
茨城県令を務めた後、内務省勧業寮で製茶業務を担当。民間に下りてからは、サッポロビール設立に関与した他、利根川運河の開通などに着手した。

牟田口元學
文部大書記官正六位[太政官権大書記官兼内閣権大書記官正六位]
37歳（1845-1920）
明治12年文部省大書記官に任命。山林局長に進み、明治14年官を辞す。東京馬車鉄道社長を長く務め、都市の交通網の充実に寄与した。

有島武
大蔵少書記官従六位
39歳（1842-1916）
財務官僚の後、第十五国立銀行や鉄道会社の取締役などを務める。有島武郎、里見弴、有島生馬の父。

中上川彦次郎
外務少書記官従六位
27歳（1854-1901）
工部省、外務省に勤務。官を辞してからは、井上馨の推薦で経営の悪化する三井銀行の再建をはじめ、三井財閥の経営正常化に尽力した。

河瀬秀治

大蔵大書記官従五位勲五等

42歳（1842-1907）

内務省に入省し明治10年内国勧業博覧会の開催に尽力。佐野常民とともに龍池会を結成、鑑画会設立にも関わった。後に富士（王子）製紙を設立した。

福原芳山

判事従六位

34歳（1847-82）

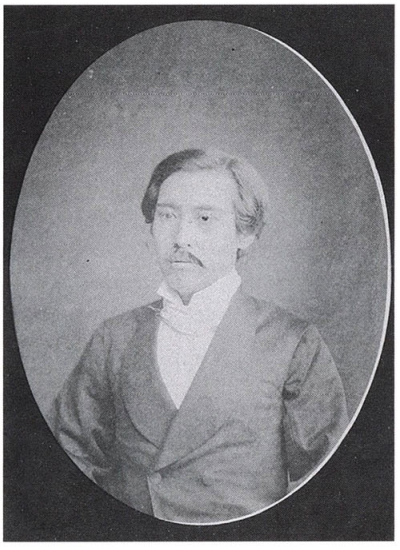
良通。慶応3年から明治7年まで英国留学。宇部の石炭鉱区の権利を買い、後に宇部興産となる。明治14年、大審院詰となる。

本野盛亨

大蔵権大書記官正六位

45歳（1836-1909）

日本最初の活版印刷会社となる日就社を創立。明治5年渡英、帰国後大蔵省勤務。7年に読売新聞社を創業し、のち2代目社長となる。

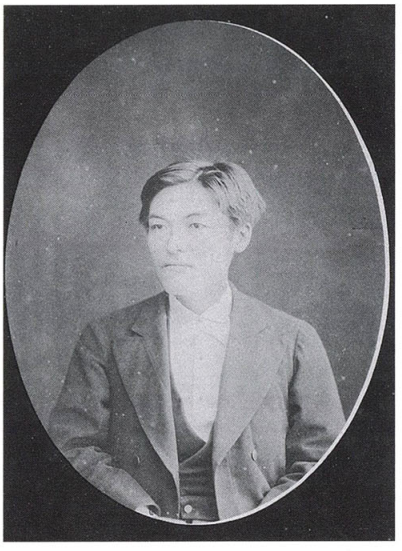


矢野文雄

大蔵少書記官従六位

31歳（1851-1931）

大蔵省勤務後、明治13年郵便報知新聞社社長に就任。宮内省御用掛、式部官、清国特命全権公使を歴任した。龍渓の号で、政治小説をはじめとした文筆活動も行った。



島田三郎

文部少書記官従六位［元老院少書記官従六位］

29歳（1852-1923）

元老院、文部省を経て明治14年に下野し、東京横浜毎日新聞社に入社。立憲改進党の創立に参加する。明治27年より毎日新聞社の社長を務めた。

曾禰荒助

陸軍省七等出仕

32歳（1849-1910）

フランスに留学後、陸軍省に出仕。初代衆議院書記官長として議事運営を指導。司法、農商務、大蔵大臣も務め、貴族院勅選議員、枢密顧問官、韓国統監等を歴任。

外交に寄与した人々

条約改正を始めとした対外交渉にあたった外交官には、のちに外務大臣を務めた青木周蔵などの姿がある。また、明治天皇の通訳官をつとめた長田銈太郎らのほか、本写真帖唯一の外国人、A.G.シーボルトが含まれている。

東久世通禧
議官従三位
48歳（1833-1912）
公家。文久3年の政変により京都を追われた七卿の一人。維新後、外国事務総督、開拓長官、侍従長などを歴任。のち元老院副議長、貴族院副議長、枢密院副議長等要職を務めた。

副島種臣
宮内省御用掛一等侍講兼務正四位
53歳（1828-1905）
佐賀藩出身。外務卿としてマリア・ルース号事件などで活躍。のち侍講、宮中顧問官、枢密顧問官等を務めた。書家としても著名。

青木周蔵
特命全権公使従四位勲三等
37歳（1844-1914）
明治元年ドイツ留学、駐独公使や大使を務め、ドイツ諸制度の日本移植に尽力した。のちに外相となり、条約改正交渉にあたった。

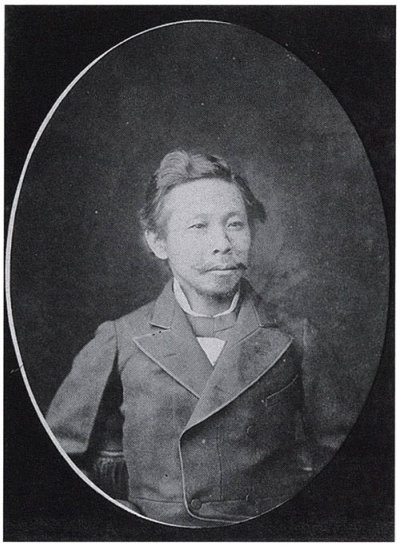
吉田清成
特命全権公使従四位勲三等
36歳（1845-91）
明治4年より大蔵省へ出仕し、外債募集に成功する。7年駐米公使として条約改正にあたり、日米約書の調印に成功するも、英独の反対で無効となった。

鮫島尚信
特命全権公使従四位勲二等
36歳（1845-80）
慶応元年薩摩藩留学生として渡英。維新後は外務大丞、弁理公使等を経て、特命全権公使に昇進。11年に仏国特命全権公使となるも、在職中に客死した。

花房義質
外務大書記官従五位勲四等
39歳（1842-1917）
岡山藩出身。外務大丞等を歴任し、中国、朝鮮、ロシアに派遣される。公使として対朝鮮、ロシア外交につくす。のち枢密顧問官、日本赤十字社社長等を歴任した。

宮本小一
外務大書記官従五位勲四等
45歳（1836-1916）
元幕臣。神奈川奉行支配組頭を務め、維新後外務省に出仕した。征韓論に反対し、江華島事件の処理に尽力、修好交渉に携わった。

林董
工部大書記官従五位
31歳（1850-1913）
幕府留学生としてロンドンに学ぶ。駐英公使として日英同盟締結の交渉に当たる。その後、外務大臣、逓信大臣となる。

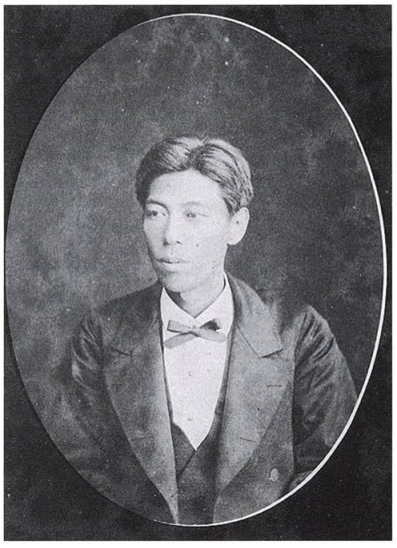


中井弘
工部権大書記官正六位
41歳（1838-94）
薩摩藩出身。後藤象二郎の援助で英国へ留学。英公使パークスの遭難に際して救援した。駐英公使館書記官等を経て滋賀県、京都府の知事を務めた。

三宮義胤
外務二等書記官従六位
38歳（1843-1905）
明治3年東伏見宮に随行して渡英、ドイツ公使館在勤を経て、16年宮内省に転じ式部官となり累進して式部長となった。英国人を夫人とした。

西徳二郎
外務二等書記官従六位
33歳（1847-1912）
薩摩藩出身。ロシアに留学後、中央アジアを調査のために踏破。外務大臣を務める。バロン西こと西竹一陸軍大佐の父。

長田銈太郎
外務二等書記官従六位
32歳（1849-89）
元幕臣。蕃書調所、横浜語学所で兵学・仏語をおさめ、開成所頭取となる。維新後は外務書記官、宮内省権大書記官等を務め、明治天皇の通訳を担当した。



竹添進一郎
大蔵少書記官正七位
39歳（1842-1917）
外交官、漢学者。大蔵省勤務を経て、明治13年に天津領事、15年朝鮮国弁理公使となる。朝鮮の開化派を支援し、甲申事変に関与した。

アレキサントル ハロン フオン シーボルト
書記官取扱
記載なし（1846-1911）
P.F.シーボルトの長男。安政6年父と共に来日、英国公使館の通訳官ののち、明治3年ベルリン駐在日本公使館書記官を務める。本写真帖中、唯一の外国人。

地方の発展につとめた人々

写真や油彩画を土木事業の報告の手段として活用した三島通庸、数々の洋風建築を建設した藤村紫朗など、県令（県知事）として、西洋の新しい技術を積極的に取り入れ、近代化を推し進めた人々がいる。また当時は、北海道や小笠原諸島などで、新たな国土の開発が行われつつあり、それらに尽力した人々が含まれる。

松田道之
東京府知事従五位勲三等
42歳（1839-82）
明治元年内国事務局権判事として新政府に出仕し、京都府大参事、大津県令、東京府知事等を歴任。12年、琉球処分を断行したことで知られる。

槇村正直
京都府知事従五位
47歳（1834-96）
明治10年より京都府知事を務める。養蚕所、製革所、牧畜場等、諸産業の振興を計り、学校、図書館、病院を建設するなど、京都の近代化に努めた。

國重正文

京都府大書記官正六位

41歳（1840-1901）

明治4年京都府小参事、ついで同大書記官となった後、富山県令、同知事を歴任した。20年内務省神社局長に任じられ、その後、國學院院長を務めた。

野村靖

神奈川県令従五位

38[39]歳（1842-1909）

長州藩出身。松下村塾に学び、維新後は岩倉使節団に参加後、神奈川県令、駐仏公使等を経て、内務、逓信の各大臣を務めた。晩年は皇女の御養育掛長を務めた。

三島通庸

山形県令従五位

46歳（1835-88）

明治7年酒田県令を任じられて以降、地方行政にあたり、山形、福島、栃木の各県令を歴任。栗子隧道などの土木工事を推進し、「土木県令」の異名をとった。

中條政恒

福島県大書記官従六位

40歳（1841-1900）

明治5年福島県典事になり、安積全域の開拓と、疎水の開削につくした。建築家中條精一郎の父、作家宮本百合子の祖父。

揖取素彦

群馬県令従五位

52歳（1829-1912）

初代群馬県令として、在任期間は9年に及び、養蚕業の発展、教育の振興など県の発展につくした。吉田松陰の妹を妻とした。

藤村紫朗

山梨県令従五位

36歳（1845-1909）

明治6年山梨県に権令として赴任、7年同県令に昇進した。教育、勧業、土木事業など多方面で急進的な文明開化政策を一貫して進めた。

安場保和

議官従四位[愛知県令従五位]

46歳（1835-99）

明治4年熊本藩少参事を務め、藩政改革に尽力、同年大蔵大丞・租税権頭へ転じる。福島、愛知、福岡の各県令、また北海道長官として諸産業振興に務めた。

籠手田安定

滋賀県令従五位

41歳（1840-1900）

滋賀県令として地租改正、小学校創立等を管掌した。その後元老院議官、済寧館御用掛、島根県知事等を歴任。山岡鉄舟の弟子で、剣術家として著名。

髙崎五六

岡山県令従五位

45歳（1836-96）

薩摩藩公武合体派の志士として活動。維新後は地方官に任じられ岡山県令、元老院議官、東京府知事などを歴任した。高崎正風の従兄弟。

千田貞暁

広島県令従五位[東京府大書記官正六位]

45歳（1836-1908）

広島、新潟、和歌山、愛知、京都、宮崎各地の知事を歴任。中央官庁との軋轢も辞さない気骨ある地方官として活躍。広島宇品港を建設した。

北垣國道

高知県令兼徳島県令従五位

45歳（1836-1916）

高知・徳島両県令を経て、明治14年より11年間京都府知事を務めた。琵琶湖疎水事業を計画、着手するなど、同地の殖産興業政策を進めた。

富岡敬明

熊本県令従五位勲四等

59歳（1822-1909）

明治9年に熊本県令となり神風連の乱を平定した。西南戦争では谷干城らと熊本城に籠城。その後、熊本県令、同県知事を歴任する。

澤簡徳

東京府神田区長従五位

45歳（1830-1903）

旧幕臣。文久3年より外国奉行を務めた。維新後、刑法官判事試補、若松県令等を務め、戊辰戦争で損傷した若松城の取り壊しを建言したことで知られる。

奈良原繁

内務権大書記官正六位

47歳（1834-1918）

元薩摩藩士。寺田屋騒動の久光側鎮圧隊の一人。明治期には政治家として内務省、農商務省、静岡県令、沖縄県令などを歴任。

小花作助

内務権少書記官正七位

52歳（1829-1901）

文久元年、幕府に派遣された水野忠徳に従い、小笠原諸島を調査。維新後、島が内務省の所管になるに及び、出張所長としてその開発に尽力した。

勝間田稔

内務権少書記官正七位

39歳（1843-1906）

維新後、山口県大属等を経て内務権大書記官となる。のち愛知、愛媛、宮城、新潟の県知事を歴任。明治34年以降は終生、宮内省図書頭を務めた。

山﨑直胤

大蔵権大書記官兼太政官権大書記官正六位[大蔵権大書記官正六位]

29歳（1852-1918）

工部留学生として渡仏後、太政官に出仕。伊藤博文の憲法調査に随行して渡欧。内務省初代県治局長の後、宮内省調度頭となる。

岩村通俊

議官正五位勲四等[鹿児島県令正五位勲四等]

41歳（1840-1915）

北海道の開拓に従事したのち、各地の県令を歴任、明治10年鹿児島県令となった際には西南戦争後の回復を計った。19年には初代北海道長官となる。

西村貞陽
開拓使三等出仕正五位
36歳（1845-86）
明治2年より開拓使に出仕、東京詰所に勤務。8年清国の農事を視察したほか、北海道海産物の市場拡大等の事業に拘わった。

安田定則
開拓大書記官従五位勲五等
36歳（1844-92）
明治4年より開拓使に出仕、長官黒田清隆の腹心として活躍。開拓使廃止後は、15年に農商務省大書記官、のち茨城県令、貴族院勅選議員等を歴任した。

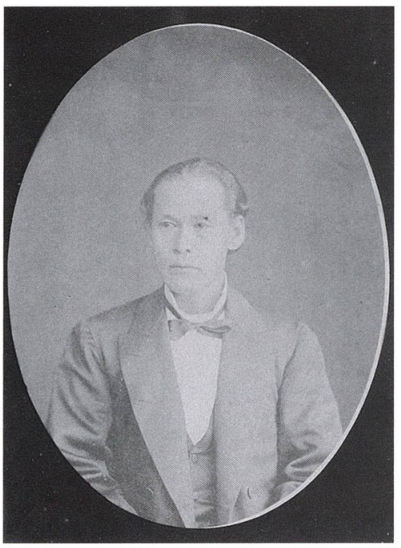
山内堤雲
開拓大書記官従五位
43歳（1838-1923）
慶応3年パリ万国博に派遣された徳川昭武の通訳として随行。開拓使でも外人顧客の通訳を務めた。のち鹿児島県知事、製鉄所長官等を歴任した。

調所廣丈
開拓大書記官従五位
41歳（1840-1911）
札幌農学校開校時の校長。樺太を視察し、ペチカ、馬そり等を北海道に導入した。明治15年初代札幌県令となり、高知、鳥取両県知事等を歴任した。

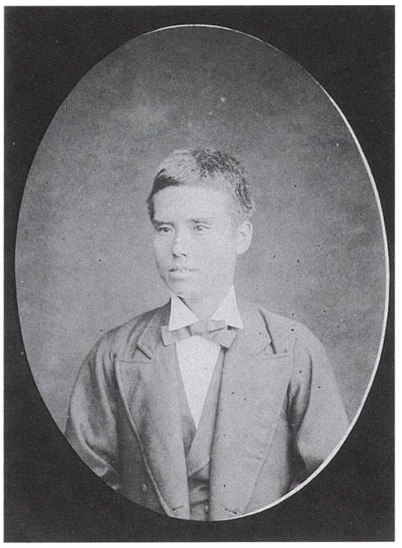
時任為基
開拓大書記官従五位
39歳（1842-1905）
明治10年より10年間、函館支庁に勤務し、函館地方の開拓と発展に尽力。また、同一の肖像を元とした横山松三郎制作の写真油絵が現存している。

清水谷公考
正四位
36歳（1845-82）
箱館府の知事として、蝦夷地統合に尽力した。榎本率いる旧幕府軍の箱館攻撃に対し、同地の政府軍を指揮、その軍功により賞賜にあずかった。

菊亭修季
従四位
24歳（1857-1905）
公家。明治12年開拓使御用掛を任じられて以降、北海道農政に拘わる。退官後、一時農場経営を行う。



楠本正隆
議官従五位
43歳（1838-1902）
新潟県令として内務卿大久保利通から天下随一の県令と激賞された。東京府知事も務めた。



中村修
宮内省御用掛
38歳（1843-1915）
元尾張名古屋藩士。維新後、宮内省御用掛、東京・函館裁判所検事を経て、明治22年より初代名古屋市長を務めた。

文化や教育の発展につとめた人々

文化行政に携わった官吏や、国史編纂に携わった編修官の他、官吏という枠には収まらない活躍をした人々を紹介する。例えば、国学者で知られる木村正辞、歴史学者の内藤耻叟は、明治12年当時、それぞれ判事、小石川区長という意外な役職で写真帖に収められている。また日本画家富岡鉄斎の壮年期の姿が神官の中に見られる。

福羽美静
議官従四位[議官兼宮内省御用掛従四位]
50歳（1831-1907）
国学者。明治元年神祇事務局権判事となり、明治天皇に『古事記』を進講した。2年侍講となり、神祇官、文部省等に出仕。元老院議官、貴族院議員等を歴任した。

多田好問
太政官権少書記官正七位
36歳（1845-1918）
有職故実にくわしく、内閣書記官、記録課長として皇室行事の典例調査に従事した。『岩倉公実記』を編修した。

重野安繹
一等編修官従五位
54歳（1827-1910）
歴史学者。太政官修史局（館）副長、臨時修史局編修長、史学会初代会長等を歴任。史料批判による実証史学を提唱し、近代史学の基礎を作る。

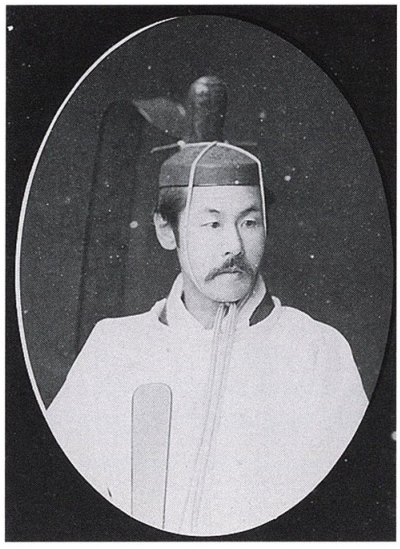
川田剛
一等編集官従五位
51歳（1830-96）
儒学者。維新後は宮内省、大学、諸陵寮等に出仕。非命に斃れた幕末志士達の小伝を集めた『殉難録稿』を編纂。

久米邦武
三等編修官従六位
42歳（1839-1931）
歴史学者。重野安繹らと実証史学を提唱。帝国大学文科大学教授兼臨時編年史編纂掛委員となる。永年の古文書調査から古文書学を提唱、基礎を築く。

依田百川
三等編修官従六位
48歳（1833-1909）
漢学者。学海。修史局編纂官、地方官会議書記官等を歴任。のち福地桜痴らと演劇改良会を起こし、歌舞伎等演劇の地位向上に尽力した。

藤野正啓
三等編修官従六位
55歳（1826-88）
歴史学者。号海南。幕末、昌平黌に学びのち舎長となる。維新後は修史局に出仕、『先朝紀略』の編纂に拘わる。

木村正辭
判事正七位
54歳（1827-1913）
国学者。幕府の和学講談所会頭助役に始まり、明治期は文部省、司法省および帝国大学文科大学教授等を歴任。万葉集の近代的研究に功績が大きい。



本居豐穎
権大教正
47歳（1834-1913）
宣長・内遠・豊穎と続く国学者であるが、明治初期は神官として活躍。明治29年東宮侍講に補され皇太子（大正天皇）の教育にあたった。

戸田忠至
正四位
72歳（1809-83）
元曽我野藩主。宇都宮藩家老時代、文久2年に藩命により天皇陵等の調査、修復に関わり、在京の学者らと整備に従い、文久度の山陵修復として評価される。

内藤耻叟
東京府小石川区長正七位
54歳（1827-1903）
歴史学者。名は正直。会沢正志斎、藤田東湖に師事。維新後は小石川区長、帝国大学文科大学教授等を歴任。『故事類苑』の編纂に拘わる。

阪谷素
内務省警視局御用掛准奏任正七位
59歳（1822-81）
儒学者。号朗廬。大塩平八郎、古賀侗庵に学ぶ。東京学士院創立時会員。

西村茂樹
文部大書記官兼宮内省御用掛従五位
53歳（1828-1902）
文部官僚、道徳思想家。東京修身学社（のち日本講道会）を創設。道徳の研究を行い、宮内省編『婦女鑑』の編纂に拘わる。

神田孝平
議官従四位
51歳（1829-98）
啓蒙思想家。維新後は集議院判官、元老院議官などを歴任。西洋の諸制度を紹介、考古学でも活躍し初代東京人類学会会長を務めた。

宇都宮三郎
権大技長正六位
47歳（1834-1902）
蘭学者、科学技術者。舎密のかわりに化学の訳語を提唱。セメントや耐火煉瓦製造研究に貢献、維新後の殖産興業に尽力した。

杉亨二
太政官権大書記官正六位
53歳（1828-1917）
統計の基礎を築いた先駆者。太政官正院政表大書記などを歴任、年ごとの統計表を作成するなど統計事務を統括した。明治12年、山梨県の人口調査を実施した。

近藤真琴
海軍省六等出仕従六位勲六等
50歳（1831-86）
明治の六大教育家の一人。測量術、航海術から国漢学、地理歴史などを教授する攻玉社（現攻玉社学園）を創立。また内国勧業博覧会の審査官を務めた。

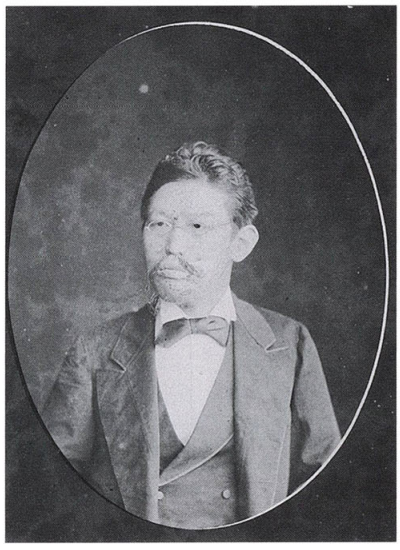
麻生武平
海軍省六等出仕従六位
46歳（1835-1907）
弼吉。科学技術啓蒙家。明治2年海軍操練所に出仕、4年より兵学寮教官。19年には、初代海軍機関学校校長を務め、軍事技術者として海軍機関大監まで栄進した。

乙骨太郎乙
海軍省御用掛准奏任
39歳（1842-1921）
旧幕臣、洋学者。幕末に蕃書調所（開成所）に出仕。維新後、沼津兵学校で英語を教授。多数の翻訳を手がけた。

西周
陸軍省御用掛正五位[陸軍省御用掛兼宮内省御用掛正五位]
52歳（1829-97）
西洋哲学者。幕末オランダのライデンに留学、万国公法などを学ぶ。維新後兵部省に出仕、徴兵令の制定に拘わる。また軍人勅諭の草案を起草。

永見裕
陸軍歩兵中尉従七位
42歳（1839-1902）
慶応2年、西周の下で英国へ留学。明治7年陸軍中将となる。仙台に居住し、私塾静竹舎を開設する。弟子に高山樗牛がいる。

野村素介
文部大書記官従五位
39歳（1842-1927）
長州藩藩校明倫館舎長を経て、文部大丞、元老院議官、貴族院議員、錦鶏間祗候を務めた。素軒の号で書家としても著名。



辻新次
文部権大書記官兼太政官権大書記官正六位
39歳（1842-1915）
文部官僚として教育制度策定に尽力、東京大学の前身である大学南校の校長、初代文部次官、貴族院議員、帝国教育会々長を務めた。

久保田譲
文部権少書記官正七位
34歳（1847-1936）
慶應義塾在学中に明六社に参加。文部省に出仕、文部次官、貴族院議員を経て文部大臣となり、晩年は枢密顧問官を務めた。

永井久一郎
内務省御用掛准奏任
29歳（1852-1913）
漢詩人。実業家。アメリカ留学後、内務省、文部省、日本郵船等に務める。永井荷風の父。

芳川顯正
外務少輔従五位[工部大書記官従五位]
40歳（1841-1920）
文部大臣として教育勅語発布に尽力。以後、司法、内務、逓信の各大臣を歴任した。

股野琢

太政官権大書記官正六位

43歳（1838-1921）

明治5年教部省出仕、ついで太政官正院へ。22年宮内省に入り、要職を歴任。33年宮内省官吏として初めて帝国博物館総長となる。漢文学の権威。

田中芳男

内務大書記官正六位勲五等

41歳（1838-1916）

博物館、動物園を含む公園設立のため尽力し、上野に実現する。農学、農林水産学の発展に貢献。

町田久成

内務大書記官従五位

43歳（1838-97）

明治5年壬申検査に参加。博物館の設置に尽力し、9年に初代博物館長となる。明治初期の古美術研究の先覚者。

山高信離

内務省准奏任御用掛勲五等

39歳（1842-1907）

慶応3年、徳川昭武とともに渡欧。維新後は博覧会事務に携わり、明治21年博物館長。同年竣工の明治宮殿の室内装飾に関与。

九鬼隆一

文部大書記官兼太政官大書記官従五位勲四等

29歳（1850-1931）

教育、文化行政に携わり、明治22年初代帝国博物館総長。全国に及ぶ文化財調査を主導し、文化財保護制度の整備に尽力。

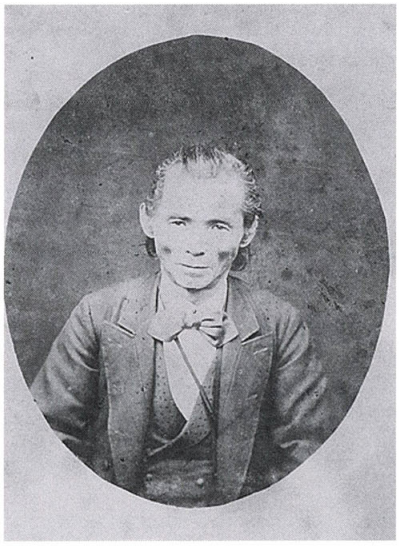
古澤滋

太政官権大書記官正六位

34歳（1847-1911）

明治7年、民選議員設立建白の起草に携わる。自由民権運動家。後に奈良県知事、石川県知事、山口県知事。

小牧昌業
開拓権大書記官正六位
38歳（1843-1922）
開拓使についで諸官を歴任し、22年奈良県知事、23年帝国奈良博物館長兼務。漢学者、文学博士としても知られる。



税所篤
堺県令正五位
54歳（1827-1910）
平田篤胤門下。西郷隆盛らの誠忠組に加わり、新政府では兵庫、奈良の各県知事を務めた。古美術鑑定を得意とし正倉院宝物の整理を行った。

森有禮
特命全権公使従四位勲二等
34歳（1847-89）
慶応元年より英国、米国へ留学。帰国後、啓蒙活動を目的に明六社を結成。明治18年に初代文部大臣を務め、教育政策に尽力。

渡邉洪基
太政官大書記官従五位
33歳（1848-1901）
明治4年岩倉使節団に随行、後に外交官、太政官および外務省大書記官。東京府知事、初代帝国大学総長。

秋月新太郎
陸軍省六等出仕従六位勲五等
40歳（1841-1913）
明治4年兵部省に出仕、以後、諸官を歴任。27年、女子高等師範学校校長、後に文部省参事官となる。

富岡百錬
大鳥神社宮司兼権少教正正七位
45歳（1836-1924）
鉄斎。文人画家として名高いが、国学、漢学、詩文、陽明学、仏教など幅広く学問を修め、大和石上神宮、和泉大鳥神社の宮司も務めた。

下條正雄
海軍大秘書正七位
38歳（1842-1920）
海軍主計大監、海軍主計学校校長、貴族院議員を歴任。また、狩野派を学んだ画家（号桂谷）でもあり、龍池会を結成し、日本美術協会の審査長を務める。

床次正精
検事正八位
39歳（1842-97）
司法省の検事、判事を歴任する一方で、独学で習得した油彩技法を用いて画家としても活躍した。グラント将軍の肖像画や憲法発布式の図などを描く。

八田知紀
故宮内省七等出仕
享年75歳（1799-1873）
薩摩藩出身。香川景樹に歌道を学ぶ。近衛家に仕え、維新後、宮内省に出仕し、歌道御用掛となる。高崎正風の師。

飯田年平
式部寮御用掛従七位
61歳（1820-86）
歌人。国学者。大平太平に師事、後伴信友に学ぶ。大平太平、加納諸平とともに歌人三平と称された。

村山松根
宮内省御用掛
59歳（1822-82）
歌人。国学者。歌を八田知紀に学ぶ。在京華族の歌道師範をつとめた。

毛利元敏
従五位
32歳（1849-1908）
元長府藩（豊浦藩）主。岩倉使節団に同行し米国へ留学。詩歌に優れ、御歌所寄人となる。歌集に『松の下葉』がある。

黒田清綱

議官従四位

51歳（1830-1917）

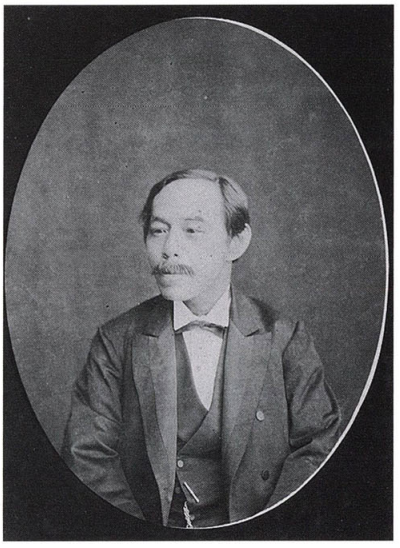
貴族院議員、枢密院顧問官を務める一方、和歌を八田知紀に学び、明治・大正天皇の歌を指導した。洋画家黒田清輝の養父。

金井之恭

内閣権大書記官正六位

48歳（1833-1907）

幕末に勤王の志士として活動。内閣大書記官、元老院議官、貴族院議員となった。明治期書壇を代表する一人。



巖谷修

一等編修官従五位

47歳（1834-1905）

号一六。中林梧竹、日下部鳴鶴とともに明治の三筆と称される能筆家。明治元年に徴士議政官吏官となり、当時の詔勅制令等の多くを清書した。

秋月種樹

従四位[議官従四位]

48歳（1833-1904）

高鍋藩主秋月種任の三男。将軍徳川家茂の侍読。新政府では侍読、元老院議官、貴族院議員を務め、書画にも優れた才を発揮した。

今村長賀

陸軍会計軍吏正七位勲五等

44歳（1837-1910）

陸軍一等主計を経て、全国の寺社旧家の武器武具を調査し、刀剣鑑定家として知られる。宮内省の御剣整理も担当した。

長屋重名

陸軍歩兵大佐従五位勲四等

38歳（1844-1915）

土佐藩出身。新政府では陸軍に出仕し歩兵大佐となる。退役後は刀剣鑑定、中でも鍔の研究に優れた業績を残した。

法制、法曹の分野で活躍した人々

大日本帝国憲法の起草を行った井上毅を始めとして法制度の確立に尽力した人々、今大岡と称えられた玉乃世履、護法の神と称えられた児島惟謙などの名裁判官、日本最初の弁護士とされる中定勝らを紹介する。

細川潤次郎
元老院幹事従四位[議官従四位]
47歳（1834-1923）
法制学者、洋学者。土佐藩で法典編纂事業に従事。維新後、開成学校権判事を任じられ、各種条例の起草にあたる。その後元老院などの要職を歴任。講書始の講師をつとめた。

尾崎三良
太政官大書記官従五位
39歳（1842-1918）
三条実美の側近として、幕末の国事に奔走、慶応4年英国で法律を学ぶ。帰国後、太政官に出仕、法令実務に携わり、井上毅と並び称される。24年法制局長官。

井上毅
内務大書記官従五位
38歳（1843-95）
岩倉使節団に随行し、フランスで司法行政を学ぶ。大日本帝国憲法と、教育勅語草案を起草し、立憲議会制国家の基礎を構築した官僚として名高い。

何禮之
内務権大書記官正六位
41歳（1840-1923）
英語の私塾を営み、教え子は前島密ほか多数。岩倉使節団に随行し、憲法を調査、モンテスキューの『法の精神』を翻訳。内務省では洋書の翻訳・調査にあたった。

伊東巳代治
内務権少書記官
24歳（1857-1934）
長崎出身。伊藤博文に抜擢されて憲法草案の起草に携わり、伊藤内閣で内閣書記官長、農商務大臣をつとめ、その後、枢密院でも影響力を維持した。

玉乃世履

司法大輔兼議官従四位

56歳（1825-86）

明治4年新設された司法省に入って判事となり、数々の事件で辣腕を振るい、各種の法典編纂に参与した。11年には大審院長に就任した。

箕作麟祥

議官従五位[司法大書記官従五位]

35歳（1846-97）

慶応3年徳川昭武に随行しフランスへ留学。帰国後、開成所御用掛一等訳官となり、司法大書記官、太政官大書記官に累進。西洋法律の翻訳に尽くした。

鶴田皓

検事従五位

46歳（1835-88）

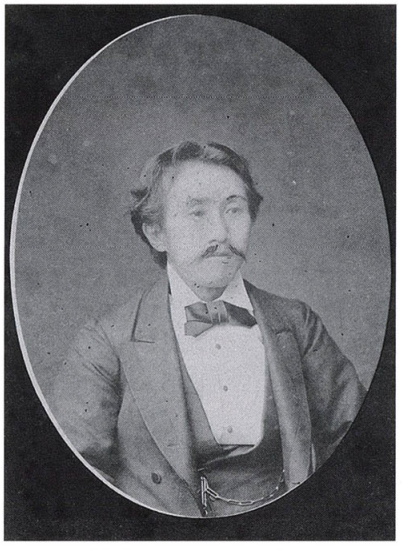
明治3年刑部少判事に任ぜられ、初の統一的刑法典『新律綱領』を撰修した。その後、元老院議官となり、治罪法その他の諸法典の編纂にも参画した。

中定勝

判事従六位

41歳（1840-1903）

日本最初の近代的代言人(弁護士)。大阪の蘭医中家の養子となり、維新後、軍医に任官するも辞職。福沢諭吉の食客となり法律の知識を得、明治9年より判事となる。

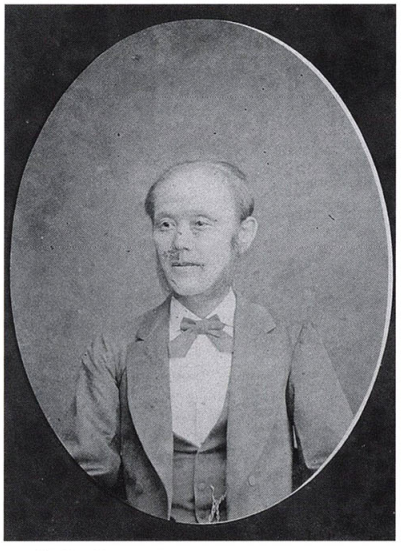


三好退藏

判事正六位

36歳（1845-1908）

慶應義塾に学ぶ。初代検事総長をつとめ、明治24年の大津事件では児島惟謙と対立し、政府の意を体して、被告人に死刑を求刑した。



児島惟謙

判事正六位

44歳（1837-1908）

明治4年より司法省に出仕、24年より大審院長に就任、直後に大津事件に直面し、政府による裁判干渉を退け、司法権の独立を護った。

清浦奎吾

司法権少書記官正七位[検事正七位]

31歳（1850-1942）

山県有朋の側近として司法大臣、農商務大臣、枢密院議長等を経て首相を務めた。

津田真道

議官従四位

52歳（1829-1903）

啓蒙思想家。幕末にオランダに留学、帰国後は司法界で活躍。森有礼らと明六社を創立した。

平田東助

大蔵少書記官兼太政官権少書記官正七位［大蔵少書記官正七位］

32歳（1849-1925）

ドイツで法学を学び、法務官僚から転じて農商務大臣、内務大臣、晩年は内大臣を務めた。

宮島誠一郎

修史館御用掛正六位[修史館御用掛兼宮内省御用掛正六位]

43歳（1838-1911）

米沢藩出身。自由民権運動に先駆けて憲法制定・議会開設を訴えた。書家宮島詠士の父。

小倉久

司法省御用掛

29歳（1852-1907）

仏国留学後、明治11年司法省大書記官に出仕、19年大阪控訴院検事のころ関西大学創立に拘わり、初代校長となる。和歌山、岐阜県等各県の知事を歴任した。

山脇玄

司法省御用掛

32歳（1849-1925）

明治3年から10年まで渡独、法学を学ぶ。司法省に入り、後に行政裁判所長官。山脇女子実修学校の創立者。

医学の発展に貢献した人々

日本最初の洋式病院である長崎養生所を開設し、陸軍の軍医制度の確立にも貢献した松本良順をはじめ、明治天皇の侍医を務めた池田謙斎、公衆衛生の分野で功績を残した長与専斎、日本初の医学博士となった三宅秀などが含まれている。

青木信寅
判事従五位
46歳（1835-86）
明治元年権判事となり、刑部大丞を経て、裁判官となる。好書家でもあり、その蔵書は静嘉堂文庫に収蔵される。

松本順
陸軍軍医総監正五位勲二等
49歳（1832-1907）
良順。長崎養成所開設に尽力、戊辰戦争では会津に軍医病院を開設し、戦傷者を治療した。明治6年には、初代陸軍軍医総監に就任した。

池田謙齋
陸軍軍医監兼一等侍医正五位勲四等
40歳（1841-1918）
緒方洪庵の門下。陸軍軍医監と、宮内省御用掛を兼ね、のち官立東京医学校（東大医学部）校長に就任。21年に日本初の医学博士となった。

佐藤進
陸軍軍医監従五位勲四等
36歳（1845-1921）
佐倉藩医佐藤尚中の養子。尚中没後の順天堂医院の院長を務めた。28年日清講話条約締結後、暴漢にピストルで撃たれた李鴻章を治療した。

橋本綱常

陸軍軍医監従五位勲四等

36歳（1845-1909）

明治16年大山巌に随行して欧州視察、万国赤十字条約加盟に貢献する。陸軍軍医総監、医務局長を経て、日本赤十字社病院初代院長に就任。橋本左内の弟。

緒方惟準

陸軍一等軍医正正六位勲四等

38歳（1843-1909）

緒方洪庵の次男。幕府の西洋医学所の教授を務める。慶応元年オランダに留学、帰国後宮内省出仕を経て陸軍医務に従事し、陸軍医務制度の設立に尽力した。

石黒忠悳

陸軍一等軍医正正六位勲四等

36歳（1845-1941）

明治4年兵部省に入り、軍医となる。軍医総監に昇進、草創期の軍医制度を確立した。森鴎外の上官としても知られる。

田代基徳

陸軍二等軍医正従六位勲四等

39歳（1839-98）

洋方医・医学啓蒙家。緒方洪庵の弟子。明治25年に陸軍医学校校長に就任した。整形外科の開祖。

長與専齋

内務大書記官兼文部省御用掛従五位

43歳（1838-1902）

緒方洪庵の適塾に入る。明治4年医学調査のため欧米を視察し、公衆衛生に着目する。医務局長、東京医学校校長、内務省衛生局長、東京検疫局幹事長等を歴任した。

三宅秀

内務省准奏任御用掛正七位

32[33]歳（1848-1938）

文久3年遣欧使節団に随行し、明治3年より東京大学に出仕、21年に日本初の医学博士となった。36年には東京大学初の名誉教授に推挙される。

陸軍において活躍した人々

名将として著名な児玉源太郎、乃木希典の若き肖像写真を始め、『坂の上の雲』の主人公となった秋山好古や、『ある明治人の記録』の原作者柴五郎など、後に日清・日露戦争で功績を残し、歴史小説で馴染みある人々や、日本警察の父と称される川路利良など、警察制度の確立に尽力した人々が含まれている。

鳥尾小彌太

陸軍中将従四位勲二等[陸軍中将兼議定官従四位勲二等]

34歳（1847-1905）

明治9年陸軍中将となり、その後参謀局長、近衛都督、初代統計局長、国防会議議員、元老院議官を歴任。枢密顧問官、貴族院議員となる。

谷干城

陸軍中将従四位勲二等

44歳（1837-1911）

熊本鎮台司令長官として西南戦争では熊本城を死守。陸軍士官学校長、学習院院長を歴任し、第1次伊藤内閣農商務大臣に任命され、佐賀出身者として唯一の入閣。

野津道貫

陸軍少将正五位勲三等

40歳（1841-1908）

日清戦争では第一軍司令官として活躍。近衛師団長、軍事参議官などを歴任し、日露戦争では第四軍司令官を務める。後に元帥、公爵となる。

黒木為楨

陸軍歩兵大佐従五位勲四等

38歳（1844-1923）

日清戦争では第六師団長として武功を挙げる。日露戦争では第一軍司令官として出征、鴨緑江から奉天会戦まで連戦し、明治40年、軍功により伯爵となった。

山川浩

陸軍歩兵中佐正六位勲四等

36歳（1845-98）

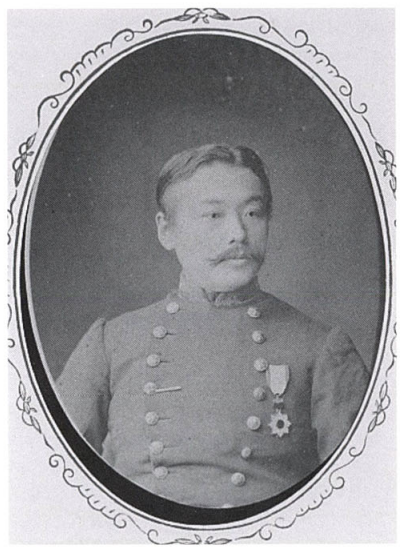
会津藩家老を務める。維新後、松平容保京都守護職在任中の記録をまとめ、弟の山川健次郎が『京都守護職始末』として明治44年に出版した。

川上操六
陸軍歩兵中佐正六位勲四等
44[34]歳（1848-99）
欧州の兵制を視察した他、ドイツに留学して兵学を学ぶ。軍制の改革、陸軍大学校の充実、人材の育成に努めた。

桂太郎
陸軍歩兵中佐兼太政官少書記官正六位
34歳（1848-1913）
明治34年より首相として日英同盟締結、日露戦争を主導。第2次内閣時には日韓併合を行う。内大臣兼侍従長を務め、大正元年に第3次内閣を組織した。

牧野毅
陸軍砲兵中佐正六位勲四等
38歳（1843-94）
明治4年に兵部省出仕。国産銅を用いた火砲を開発。また製鉄工業の必要性を説き、官営八幡製鉄所設立の礎を築いた。

乃木希典
陸軍歩兵中佐正六位勲四等
32歳（1849-1912）
日清戦争では旅順要塞を一日で陥落させた。日露戦争では旅順攻撃を指揮。後に学習院院長となる。明治天皇御大喪の日に夫人とともに自害。



村田經芳
陸軍歩兵少佐従六位勲四等
43歳（1838-1921）
明治8年に射撃技術調査のため渡欧し、帰国して初の国産銃十三年式村田銃を開発。以降も渡欧して銃の改良を重ねた。

兒玉源太郎
陸軍歩兵少佐従六位勲四等
29歳（1852-1906）
陸軍大学校校長、陸軍次官を歴任し、明治31年第4代台湾総督に就任。第4次伊藤内閣の陸相や第1次桂内閣の内相等を兼任。日露戦争では満州軍総参謀長を務める。

寺内正毅
陸軍歩兵少佐従六位勲五等
29歳（1852-1919）
士官教育、軍政の分野で活躍。陸相や初代朝鮮総督等の要職をつとめた。大正5年首相に就任するも、シベリア出兵による米騒動の責任を取り総辞職した。

大久保春野
陸軍歩兵少佐従六位
35歳（1846-1915）
日清・日露戦争に出征。薩長出身でない者として初めて陸軍大将となる。招魂社（靖国神社）の創立に尽力し初代宮司となる。

福島安正
陸軍歩兵中尉従七位
28歳（1852-1919）
朝鮮半島や満州の調査の命を受け、明治25年にシベリア鉄道建設状況を視察するため、ベルリンからウラジオストクまで単騎で横断した。

一戸兵衛
陸軍歩兵少尉正八位勲六等
26歳（1855-1931）
日清戦争では大島混成旅団先発隊に所属。日露戦争では旅順総攻撃に参加。大正4年大将に昇進した後、教育総監に就任した。

木越安綱
陸軍歩兵少尉正八位
26歳（1854-1932）
日清戦争では参謀長として桂太郎師団長を補佐。第3次桂内閣では陸軍大臣となる。退職後には貴族院議員に勅選された。

柴五郎
陸軍砲兵少尉
21歳（1859-1945）
明治12年、陸軍砲兵少尉に任官。明治33年に清国公使館付武官となり、義和団事件で北京籠城戦を指揮。その功により、英国をはじめ各国から勲章を授与される。

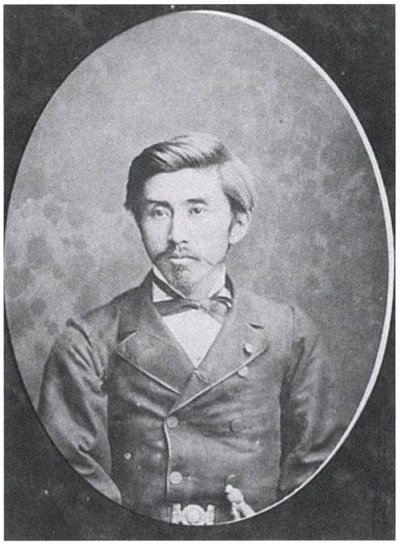
秋山好古
陸軍騎兵少尉
22歳（1859-1930）
日本陸軍騎兵の父。陸軍士官学校、陸軍大学校を経て明治20年よりフランスに留学。日露戦争では騎兵第一旅団長として多くの勲功をたてた。明治39年には騎兵監に昇任。

上原勇作
陸軍工兵少尉
23[28]歳（1856-1933）
陸軍士官学校を出てフランスに留学。日露戦争において第四軍参謀長を務める。第2次西園寺内閣の陸相に就任。のち教育総監、参謀総長。

川路利良
故陸軍少将兼大警視正五位勲二等
享年47歳（1834-79）
明治5年警察制度調査のため渡欧。警察制度改革の建白書を提出、7年東京警視庁の大警視となり、警察行政の確立にあたった。

樺山資紀
陸軍歩兵大佐兼大警視従五位勲三等
44歳（1837-1922）
西南戦争では、熊本鎮台参謀長として熊本城に籠城。11年陸軍大佐となり、13年大警視を兼ね、陸軍少将に進むが、16年海軍に転じる。海軍、内務、文部大臣等を歴任。

三間正弘
陸軍歩兵少佐兼少警視従六位勲四等
45歳（1836-99）
警察官。戊辰戦争において長岡藩で活躍する。明治7年警視庁に出仕、10年陸軍少佐兼権少警視となり西南戦争に出征。22年に初代憲兵司令官となる。



大浦兼武
陸軍歩兵中尉兼二等警視補従七位勲五等
31歳（1850-1918）
警察官として西南戦争で活躍。島根、山口、熊本県の各知事を歴任。警視総監ほか、逓信、農商務、内務大臣を歴任した。

野津鎮雄
陸軍中将従四位勲二等
46歳（1835-80）
野津道貫の兄。西南戦争では征討第一旅団司令長官として活躍。

三浦梧樓
陸軍中将従四位勲二等
35歳（1847-1926）
学習院院長、貴族院議員、朝鮮国駐在特命全権公使、枢密顧問官などを歴任。

井田譲
陸軍少将兼特命全権公使正五位勲二等
43歳（1838-89）
オーストリア、フランス各駐在全権公使、元老院議官などを歴任。

髙島鞆之助
陸軍少将正五位勲二等
36歳（1844-1916）
第1次松方内閣では陸相、第2次松方内閣では拓務相と陸相を兼任。

原田一道
陸軍砲兵大佐従五位勲四等
51歳（1830-1910）
軍務局権判事、兵学大学校教授などを務めた後、陸軍少将、貴族院議員となる。

中村重遠
陸軍歩兵大佐従五位勲四等
41歳（1840-84）
陸軍卿山県有朋を説得し、名古屋城、姫路城の取り壊しを阻止した。

佐久間左馬太
陸軍歩兵大佐従五位勲四等
37歳（1844-1915）
台湾総督、東京衛戍総督、近衛師団長等を歴任し、陸軍大将となる。

岡澤精
陸軍歩兵中佐正六位勲三等
37歳（1844-1908）
初代侍従武官長に任じられる。

永山武四郎
准陸軍中佐兼開拓少書記官正六位勲四等
44歳（1837-1904）
屯田兵制度を創設した他、生涯を通して北海道開拓に尽力。

山口素臣
陸軍歩兵中佐正六位勲四等
35歳（1846-1904）
佐賀の乱、西南戦争、日清戦争、北清事変などの歴戦を経て、陸軍大将となる。

奥保鞏
陸軍歩兵中佐正六位勲四等
35歳（1847-1930）
日露戦争では第二軍司令官として作戦を指揮。戦後参謀総長、元帥にいたる。

西田明則
陸軍工兵少佐従六位勲四等
54歳（1828-1906）
明治13年陸軍参謀局となり、陸軍技師として東京湾海堡工事に従事。

大迫尚敏
陸軍歩兵少佐従六位勲四等
37歳（1844-1927）
日清・日露戦争に出征した後、陸軍大将、学習院院長を務める。

大迫尚道
陸軍砲兵少尉正八位
27歳（1854-1934）
ドイツで砲術を学び、野戦砲兵監にまで進む。尚敏の弟。

立見尚文
陸軍歩兵少佐従六位勲五等
36歳（1845-1907）
日清戦争では歩兵第十旅団長を務める。日露戦争では黒溝台の会戦で活躍。

川村景明
陸軍歩兵少佐従六位勲四等
31歳（1850-1926）
日露戦争では奉天会戦に参加。東京衛戍総督、陸軍元帥にいたる。

梅澤道治
陸軍歩兵中尉従七位勲六等
28歳（1853-1924）
日露戦争では近衛後備混成旅団長として軍功をあげる。

中村覺
陸軍歩兵中尉従七位勲六等
27歳（1854-1925）
日清戦争では大本営侍従武官、日露戦争では歩兵第二旅団長として出征。

宇野重喜
陸軍歩兵少尉正八位勲六等
28歳（1853-1919）
日本初のキリスト教徒の陸軍軍人。同志社体操教師を務める。

早川怡與造
陸軍歩兵少尉正八位
27歳（1854-1903）
「今信玄」と評され、日露戦争に向けて対露戦略を練る。

井口省吾
陸軍砲兵少尉正八位
26歳（1855-1925）
日露戦争では満州軍総司令部参謀として奉天会戦を指揮。

長岡外史
陸軍歩兵少尉
23歳（1858-1933）
帝国飛行協会理事として航空界に尽力、またスキー技術を紹介した。

渋谷在明
陸軍騎兵少尉
25歳（1856-1923）
近衛騎兵連隊長、陸軍騎兵実施学校長などを歴任。

野田豁通
陸軍会計二等副監督従六位勲四等
37歳（1844-1913）
陸軍会計軍吏、経理局長、監督総監を務める。

海軍において活躍した人々

日露戦争の日本海海戦でバルチック艦隊に対して歴史上に例をみない完勝をおさめた東郷平八郎や、海軍の地位向上の最大の功労者とされる山本権兵衛の若年の貴重な肖像がある。

東郷平八郎
海軍少佐従六位
34歳（1847-1934）
明治4年から11年まで英国に留学。日清戦争では浪速艦長。連合艦隊司令長官として日露戦争の日本海海戦で完勝、世界にその名を轟かせた。

中牟田倉之助
海軍中将従四位勲二等
44歳（1837-1916）
安政3年長崎海軍伝習所へ入る。維新後、草創期の海軍兵学校教育にあたる。明治6年英国から教官団を招き、日本海軍が英国流に発展する基礎を築く。

赤松則良
海軍少将兼議定官正五位勲二等
40歳（1841-1920）
日本造船の父。文久2年オランダへ留学、造船学を学ぶ。明治9年横須賀造船所長、22年佐世保鎮守府初代司令長官。長女は森鴎外に嫁す。

仁禮景範
海軍大佐従五位勲三等
50歳（1831-1900）
慶応3年米国留学。明治4年兵部省、海軍省へ出仕、軍事部設置に努力し、17年軍事部長に就任。軍事部へ権限を集中するなど海軍省の機構改革に尽くした。

柳楢悦

海軍大佐兼海軍大書記官従五位

49歳（1832-91）

海洋測量の第一人者。数学者。海軍水路局の確立に尽力した他、海軍観象台による天文観測業務を開始した。明治13年海軍少将に進む。民芸を提唱した柳宗悦の父。

伊東祐亨

海軍中佐正六位勲四等

38歳（1843-1914）

勝海舟の神戸海軍操練所で学ぶ。維新後は日進、龍驤、扶桑、比叡の艦長を歴任。日清戦争で初代連合艦隊司令長官を務め、黄海海戦に勝利。

井上良馨

海軍中佐正六位勲四等

36歳（1845-1929）

明治8年江華島事件時の雲揚艦長。次いで横須賀造船所による国産第1号艦清輝の艦長となる。後に佐世保、横須賀、呉鎮守府司令長官を歴任。

伴鐵太郎

海軍少佐従六位

55歳（1825-1902）

万延元年、咸臨丸の測量方として太平洋横断。文久2年、朝陽丸艦長として小笠原開拓に参加。維新後も徳川家に従い、沼津兵学校一等教授。明治5年に海軍へ移る。

勝小鹿

海軍少佐従六位

29歳（1852-92）

勝海舟の子。慶応3年、富田鉄之助と共に米国留学。10年アナポリス米海軍兵学校卒業。帰国後、海軍に入り、13年摂津艦副長、18年横須賀屯営副長等を歴任した。

柴山矢八

海軍少佐正七位勲五等

31歳（1850-1924）

明治7年海軍に入り、水雷術を学ぶ。海軍初期の水雷術発展に貢献。日露戦争時、旅順口鎮守府初代司令長官となり、ロシア艦引揚げに携わる。

肝付兼行
海軍大尉正七位
28歳（1853-1922）
明治2年北海道開拓使に出仕、測量分野で活躍。5年に海軍省水路局に転じ、14年同局測量課長となる。37年海軍大学校長、大正2年大阪市長。

山本權兵衛
海軍中尉
29歳（1852-1933）
明治7年海軍兵学寮卒業。28年海軍の人事を含む大規模な行政改革を断行。31年－39年まで三代の内閣の海軍大臣を歴任。大正2年、12年内閣総理大臣。

上村彦之丞
海軍少尉
29[30]歳（1849-1916）
日露戦争において、第二艦隊司令長官としてウラジオストク艦隊を撃破、日本海海戦では判断よくバルチック艦隊の進路を塞ぎ、勝利に導く。

猪山成之
海軍主計少監従六位
37歳（1844-1920）
元加賀藩御算用者。大村益次郎に見出され、兵站業務にその経理手腕を発揮。後に海軍主計大監になる。『武士の家計簿』の主人公。

賀茂水穂
海軍中秘書兼海軍一等属従七位
41歳（1840-1909）
家職は遠江金山彦神社の神職。明治6年海軍少秘書となる。24年初代靖国神社宮司となった。

嘉納希芝
海軍権少書記官正七位
68歳（1813-85）
幕府の廻船方御用達を務めた。勝海舟のパトロンでもあった。柔道家加納治五郎の父。

神官、僧侶

明治維新はわが国の宗教界にも大きな変化をもたらした。インドへ初めて上陸した日本人とされる島地黙雷、キリスト教論の書物を著した養鸕徹定などがいる。また、政界でも活躍した出雲大社宮司の千家尊福、京都相国寺の財政再建で知られる荻野独園など、各宗派で功績を残した人々を紹介する。

千家尊福
出雲大社宮司兼大教正従五位
36歳（1845-1918）
宗教家、政治家。男爵。出雲大社教を創始。貴族院議員、埼玉県・静岡県・東京府各知事、司法大臣を歴任するなど政界で活躍した。

田中頼庸
神宮宮司兼大教正正六位
45歳（1836-97）
国学者、神道家。薩摩藩士。神祇省出仕を経て、伊勢神宮大宮司、神道神宮教初代管長に就任。伊勢派の指導者として活躍した。

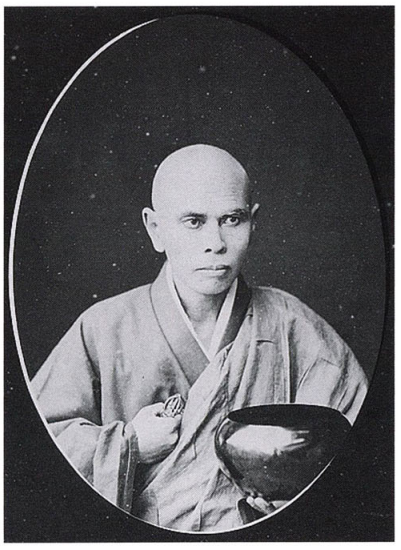
平山省齋
氷川神社宮司兼大教正正七位
66歳（1815-90）
幕末の外国奉行、神道家。維新後永蟄居となるも、程なく神道家として活動を開始。神道大成教および御岳教の創始者。

鴻雪爪
大教正
67歳（1814-1904）
宗教家。曹洞宗の僧侶から還俗の後、左院少議生、教部省出仕などを経て御嶽教第2代管長を務めた。肉食妻帯禁令の撤廃で知られる。

芳村正秉
神宮禰宜兼権中教正
38歳（1839-1915）
宗教家。神祇官・教部省等に出仕後、富士山・御嶽山などで山岳修行した。神習教として一派独立すると、初代管長に就任した。

常世長胤
権少教正
49歳（1832-86）
平田派国学者。維新後は神祇官内の宣教師に出仕。神祇官在勤中の回顧録『神教組織物語』を遺したことで知られる。

村田寂順
権中教正
43歳（1838-1905）
天台宗僧侶。天台座主238世。三千院・妙法院などの門跡を歴任。タイ国王から贈られた仏舎利の奉迎事業に尽力した。



釋雲照
権中教正
54歳（1827-1909）
真言宗僧侶。十善会を発足し戒律主義を主唱。ご誕生直後の昭和天皇のために祈祷を行う。山県有朋・伊藤博文ら政界からの帰依も篤い。

養鸕徹定
大教正
67歳（1814-91）
浄土宗僧侶。知恩院住職。古写経探索に基づく仏典などの考証学的研究のほか、キリスト教論の書物を多数著わした。

福田行誠
権大教正
76歳（1806-88）
浄土宗僧侶。増上寺住職。維新後、仏教諸宗の僧侶と同盟組織を結成するなど、仏法護持のために活動した傑僧。

荻野獨園
大教正
62歳（1819-95）
臨済宗僧侶。相国寺住持。財政危機に陥った相国寺の再建に尽力。新島襄が創立した同志社に校地を提供したことでも知られる。

今北洪川
中教正
65歳（1816-92）
臨済宗僧侶。鎌倉円覚寺管長。山岡鉄舟や鳥尾小弥太ら政治家が師事した他、弟子には釈宗演や鈴木大拙らを輩出したことで知られる。

島地黙雷
中教正
43歳（1838-1911）
真宗本願寺派僧侶。岩倉使節団に合流し欧米の宗教事情を視察後、政教分離を主唱。三宅雪嶺らと『日本人』を発刊する等言論活動を展開した。

大洲鐵然
権中教正
47歳（1834-1902）
真宗本願寺派僧侶。慶応元年、第二奇兵隊を組織。維新後は木戸孝允・品川弥二郎ら長州閥との人脈を生かし、宗教政策に寄与した。

赤松連城
少教正
40歳（1841-1919）
真宗本願寺派僧侶。欧州の学校制度を視察し、帰国後に僧侶教育に力を注ぐ。教団要職を歴任し、宗派の近代化に腐心した。

新居日薩
大教正
51歳（1831-88）
日蓮宗僧侶。久遠寺73世・日蓮宗一致派初代管長。孤児院福田会を開設するなど社会教化活動を展開し、日蓮宗の近代化に寄与した。

村雲日榮尼
少教正
26歳（1855-1920）
日蓮宗尼僧。京都瑞龍寺門跡。伏見宮邦家親王第8皇女。村雲婦人会の創立や篤志看護婦人会京都支部の活動など社会事業に貢献した。

鹿島則文
鹿島神宮宮司兼権中教正正七位
42歳（1839-1901）
鹿島神宮大宮司。

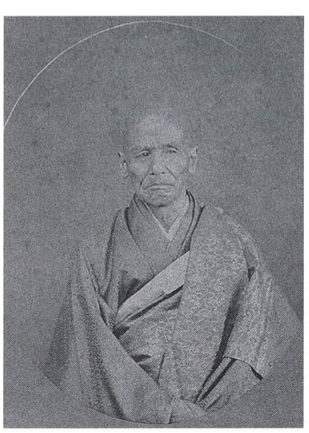
角田忠行
熱田神宮宮司兼少教正正七位
47歳（1834-1918）
熱田神宮大宮司。

折田年秀
湊川神社宮司兼権大教正正七位
56歳（1825-97）
要蔵。元薩摩藩士、湊川神社宮司。

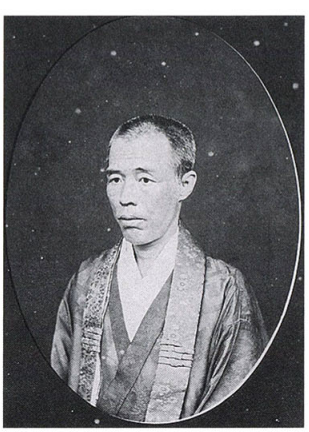
黒住宗篤
中教正
33歳（1848-89）
宗教家。黒住教第３代教主。

由理滴水
大教正
59歳（1822-99）
由利。臨済宗僧侶。天龍寺管長。

畔上楳仙
権中教正
55歳（1825-1901）
曹洞宗僧侶。総持寺貫主。



白鳥鼎三
権少教正
74歳（1805-92）
曹洞宗僧侶。愛知法持寺住持。



渥美契縁
少教正
41歳（1840-1906）
真宗大谷派僧侶。教団財政を再建。

真壁太陽
少教正
72歳（1809-87）
明治9年奥羽巡幸で瑞巌寺住職として奉迎。

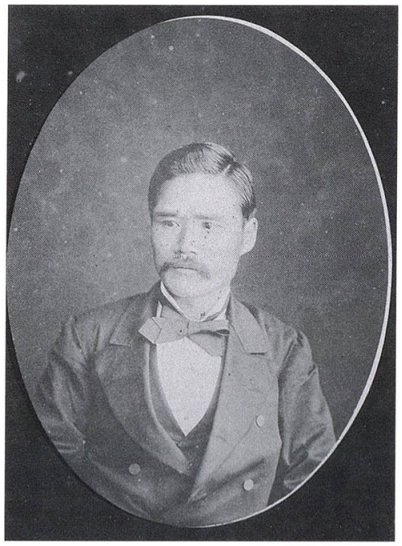
幕末維新において活躍した人々

当時官職についていなかった勝海舟、板垣退助の肖像が収められているのは、明治維新後の政府において、様々な分野で活躍した人たちとの繋がりを考慮してのことであろうか、本写真帖の中では例外的な二人である。そして、大久保一翁と山岡鉄舟は勝とともに江戸無血開城に尽力した、旧幕臣の主要人物である。海援隊に参加し、坂本龍馬と交流を持った中島信行は、後に板垣とともに自由党を結成し自由民権運動の指導者として活動した。この他、五稜郭の戦いに参加した松平太郎、安藤太郎らの姿も見える。

勝安芳
正四位
58歳（1823-99）
旧幕臣。海舟。ペリー来航の時には海防意見書を提出し、のちに海軍伝習生監督。咸臨丸を指揮し米国に渡航。大久保一翁、山岡鉄舟らとともに江戸城無血開城に尽力。

山岡鐵太郎
宮内大書記官兼皇后宮亮従五位
45歳（1836-88）
剣客。鉄舟。鳥羽伏見の戦のあと、慶喜の恭順の意を示すため、勝らと謀り駿府に西郷を訪ね、談判の結果江戸城無血開城につながった。のち宮内官僚。

大久保一翁
議官従四位
64歳（1817-88）
旧幕臣。忠寛。勝海舟らと徳川家の存続を訴え、江戸城に勅使橋本実梁・柳原前光を迎え、江戸城明け渡し、慶喜の水戸退去となり、自身は江戸の鎮撫取締にあたった。



中島信行
議官従四位
35歳（1846-99）
土佐郷士の子。尊王攘夷運動に参加し脱藩、海援隊に加わる。明治政府では民部省、大蔵省に出仕。のち神奈川県令、元老院議官となる。

関義臣
判事正六位
42歳（1839-1918）
亀山社中、海援隊で活躍。維新後、大阪府権判事を振り出しに、宮城控訴院検事長を経て大審院検事となる。徳島県・山形県両知事を歴任。

三吉慎蔵
宮内省御用掛
50歳（1831-1901）
龍馬の寺田屋遭難事件で同宿。共に難を逃れる。龍馬死後、妻の龍を長府の自宅に庇護。

板垣退助
正四位
44歳（1837-1919）
維新後は西郷らと共に征韓論を唱えるが、敗れて下野し立志社を創設、自由民権運動を進める。

松平太郎
外務七等出仕正七位
記載なし（1839-1909）
旧幕臣。鳥羽伏見の戦いのあと、主戦派として榎本武揚らと五稜郭に籠もるが、説得され榎本らとともに降伏。

安藤太郎
領事正七位[領事従七位]
35歳（1846-1924）
榎本武揚に従い五稜郭に戦う。維新後岩倉使節団に随行。のちハワイ総領事時代にキリスト教徒になり、禁酒活動を行い、退官後に日本禁酒同盟を組織した。

四五〇〇余名人名一覧

凡例

- ここには、本写真帖に収められた全4531名のうち、4530名について、その人名を五十音順に掲載している。残る1名は、陸軍省に所属しているが、写真台紙を外すことが出来ず、〈Ⅱ類〉にも同一人物を確認出来ないため、氏名等が確認出来ていない。
- 掲載の人名、所属、年齢は、本写真帖のうちの〈Ⅰ類 A〉〈Ⅰ類 B〉の写真台紙に記された内容によっているが、〈Ⅱ類〉と相違のある場合は［　］内に〈Ⅱ類〉の記載を記した。
- ここに記す所属とは、本写真帖における明治13年の、その人物の所属先であり、14頁表の「実際の分類内容」の記述にあるものである。また、兼務の場合は併記している。ただし、その写真を収納する冊が、〈Ⅰ類 A〉〈Ⅰ類 B〉と〈Ⅱ類〉に相違がある場合は、〈Ⅱ類〉の分類内容を（　）に記した。
- 皇族には宮号を付け、その宮号によっている。
- 姓は標準的な読み方を基本として分類している。ただし、複数の読み方がある姓は、河野→こうの、小山→こやま、など一通りに統一した。
- 姓名の文字は、便宜上、一部を新字に改めて掲載している。

人名	所属	年齢
あ		
相浦紀道	海軍省	40歳
相賀久茂	陸軍省	39歳
愛敬四郎次	海軍省	35歳
相沢武辰	警視庁・陸軍省	34歳
相場重義	陸軍省	31歳
相原安次郎	地方官	39歳
粟飯原寛	陸軍省	33歳
粟飯原常世	陸軍省	31歳
葵川信近	教導職	48歳
青木重義	華族	28歳
青木助次郎	陸軍省	25歳
青木住真	陸軍省	35歳
青木頼茂	陸軍省	29歳
青木兆	陸軍省	36歳
青木典則	陸軍省	40歳
青木尚細[直細]	陸軍省	36歳
青木宣純	陸軍省	22歳
青木幸躬	教導職	47歳
青木周蔵	外務省	37歳
青木信寅	判事	46歳
青柳義記	陸軍省	32歳
青柳敏吉	陸軍省	29歳
青柳高鞆	教導職	41歳
青柳忠次	陸軍省	29歳
青山朗	陸軍省	33歳
青山好昌	陸軍省	30歳
青山幸宜	華族	27歳
青山清	教導職	65歳
青山忠誠	華族	22歳
赤川戇助	地方官	38歳
赤木義彦	警視庁・陸軍省	33歳
赤沢昌行	陸軍省	41歳
明石退蔵	陸軍省	44歳
赤司欽一	工部省	40歳
赤羽友春	警視庁・陸軍省	39歳
赤羽正登	陸軍省	24歳
赤松則良	海軍省	40歳
赤松光映	教導職	62歳
赤松連城	教導職	40歳
赤嶺伍作	海軍省	32歳
秋浦定玄	教導職	37歳
秋尾利義	陸軍省	45歳
秋田映季	華族	23歳
秋月新太郎	陸軍省	40歳
秋月種繋	華族	24歳
秋月種樹	元老院・華族	48歳
秋月良種	警視庁	40歳

人名	所属	年齢
秋庭守信	陸軍省	28歳
秋元興朝	華族	24歳
秋元盛之	陸軍省	27歳
秋山茂悦	陸軍省	31歳
秋山好古	陸軍省	22歳
秋山則白	地方官	37歳
秋山光條	教導職	38歳
秋良貞温	教導職	70歳
浅井親政	陸軍省	46歳
浅井清二	陸軍省	30歳
浅井謹	陸軍省	38歳
浅井仁庵	陸軍省	27歳
浅井昌敬	陸軍省	34歳
浅井道博	陸軍省・太政官	38歳
朝枝惟一	海軍省	36歳
浅岡清	陸軍省	39歳
朝倉重厚	陸軍省	27歳
朝倉俊一郎	海軍省	27歳
朝倉盛明	工部省	37歳
浅田恭卿	陸軍省	47歳
浅田幸久	陸軍省	38歳
浅田信興	陸軍省	30歳
浅田徳則	外務省	33歳
浅田熙光	宮内省	36歳
浅田吉正	海軍省	32歳
浅野丞	陸軍省	28歳
浅野頼淹	陸軍省	37歳
浅野龍雄	陸軍省	32歳
浅野忠	教導職	64歳
浅野長勲	華族	39歳
浅野道興	教導職	66歳
浅野頼之	判事	40歳
浅羽義樹	陸軍省	46歳
浅羽幸勝	海軍省	45歳
朝日琇宏	教導職	39歳
朝比奈郡八	陸軍省	28歳
浅間俊英	教導職	73歳
浅海少介	警視庁・陸軍省	43歳
浅海通直	陸軍省	40歳
蘆匡道	教導職	71歳
味岡礼質	判事	39歳
芦沢釜三郎	陸軍省	25歳
蘆沢滋次	海軍省	35歳
蘆沢直道	警視庁・陸軍省	40歳
蘆田常徳	海軍省	40歳
葦名日周	教導職	53歳
葦原清風	大蔵省	36歳
飛鳥井雅古	陸軍省	35歳

人名	所属	年齢
飛鳥井雅典	華族	54歳
飛鳥井雅望	華族	39歳
安住保弘	海軍省	27歳
畔上楳仙	教導職	55歳
阿蘇惟敦	教導職（華族）	51歳
阿蘇三千麿	華族	16歳
麻生武平	海軍省	46歳
阿多実俊	陸軍省	24歳
阿武素行	陸軍省	41歳
阿武時助	陸軍省	26歳
愛宕通致	華族	53歳
足立衛	陸軍省	49歳
足立寛	陸軍省	39歳
足立武政	陸軍省	29歳
足立静	海軍省	48歳
足立太郎	工部省	29歳
足立正聲	宮内省	40歳
安立利綱	警視庁・陸軍省	49歳
安達重典	海軍省	37歳
渥美義勇	陸軍省	32歳
渥美契縁	教導職	41歳
渥美友成	警視庁	35歳
跡部貴直	陸軍省	31歳
阿野実允	華族	31歳
油小路隆董	華族	42歳
油小路隆晃	華族	60歳
安部久馬次郎	陸軍省	36歳
安倍尭復	陸軍省	33歳
阿部定次	海軍省	31歳
阿部達	陸軍省	30歳
阿部林吉	陸軍省	32歳
阿部正功	華族	21歳
阿部正桓	華族	30歳
阿部正恒	華族	42歳
阿部隆宝	教導職	55歳
甘粕重教	陸軍省	37歳
天方道	陸軍省	42歳
天岸省一	陸軍省	31歳
天野清	陸軍省	24歳
天野貞省	陸軍省	46歳
天野真倫	警視庁・陸軍省	37歳
天野富太郎	陸軍省	25歳
天野誠	陸軍省	46歳
天野才蔵	海軍省	28歳
天野仙輔	大蔵省	41歳
天野正世	判事	43歳
雨宮知剛	陸軍省	27歳
雨宮正	陸軍省	26歳

人名	所属	年齢
綾小路有良	華族	32歳
綾小路有長	華族	89歳
綾瀬和三次	陸軍省	39歳
鮎川富五郎	陸軍省	27歳
荒井宗道	陸軍省	49歳
荒井宗懿	陸軍省	31歳
荒井義通	陸軍省	33歳
荒井郁之助	内務省	45歳
新井勝利	海軍省	38歳
新井太郎	陸軍省	32歳
新井晴簡	陸軍省	28歳
新井春道	陸軍省	24歳
新井庸虎	陸軍省	30歳
新井一業	判事	46歳
新井有貫	海軍省	32歳
新居日薩	教導職	51歳
荒尾成之	陸軍省	30歳
荒尾成之	陸軍省	42歳
荒川豊敏	陸軍省	30歳
荒川秀俊	陸軍省	31歳
荒川勇居	海軍省	53歳
荒川邦蔵	外務省	29歳
荒城重雄	開拓使・陸軍省	36歳
荒木田定興	陸軍省	29歳
荒木博臣	判事	44歳
荒木亮一	海軍省	28歳
有泉政三	海軍省	28歳
有尾敬重	大蔵省(地租改正局)	31歳
有川貞白	海軍省	25歳
有島武	大蔵省	39歳
有栖川宮幟仁親王	皇族	69歳
有栖川宮熾仁親王	皇族・大臣	46歳
有栖川宮熾仁親王妃董子	皇族	26歳
有田徳一	陸軍省	45歳
在田彦龍	教導職	56歳
有竹裕	開拓使	43歳
有地品之允	海軍省	38歳
有馬純一	陸軍省	35歳
有馬純尭	警視庁	36歳
有馬純行	海軍省	40歳
有馬純武	海軍省	41歳
有馬太郎	陸軍省	24歳
有馬道純	華族	44歳
有馬頼咸	華族	58歳
有馬頼万	華族	17歳
有村武敏	海軍省	47歳
アレキサンドルハロンフオンシーボルト	外務省	なし
阿波恕安	陸軍省	41歳
粟田口定孝	教導職(華族)	44歳
粟津高明	海軍省	43歳
粟津義夫	陸軍省	29歳
粟屋如忠	陸軍省	31歳
粟屋信純	陸軍省	39歳
粟屋信友	陸軍省	36歳
粟屋則傚	陸軍省	39歳
粟屋幹	陸軍省	30歳
安西恕	陸軍省	30歳
安東貞一郎	陸軍省	28歳
安藤源五郎	判事	31歳
安藤定	陸軍省	30歳

人名	所属	年齢
安藤就高	大蔵省(地租改正局)	51歳
安藤太郎	外務省	35歳
安藤貞美	陸軍省	28歳
安藤俊蔵	陸軍省	29歳
安藤照	陸軍省	34歳
安藤直行	華族	23歳
安藤直裕	華族	60歳
安藤信勇	華族	32歳
安藤信守	華族	16歳
安部信発	華族	36歳
安部信順	華族	23歳
い		
井伊直憲	華族	33歳
井伊直安	華族	30歳
飯倉好察	陸軍省	37歳
飯島貞芳	陸軍省	28歳
飯島順之	陸軍省	33歳
飯田幸永	陸軍省	30歳
飯田俊助	陸軍省	35歳
飯田巽	大蔵省	39歳
飯田恒男	判事	53歳
飯田俊徳	工部省	34歳
飯田直幸	海軍省	39歳
飯田年平	式部寮	61歳
飯田信臣	海軍省	35[25]歳
飯森則正	陸軍省	29歳
伊内利安	判事	39歳
家村住彭	海軍省	33歳
家村住義	開拓使・陸軍省	42歳
生田精	司法省	51歳
井口省吾	陸軍省	26歳
生原重周	陸軍省	43歳
伊熊醇一	陸軍省	36歳
池尾武成	海軍省	35歳
池神重清	判事	51歳
池尻知麿	華族	10歳
池田兼規	警視庁・陸軍省	32歳
池田詮政	華族	16歳
池田綱平	陸軍省	28歳
池田政良	海軍省	43歳
池田録太郎	海軍省	31歳
池田章政	華族	45歳
池田源	華族	35歳
池田謙斎	宮内省・陸軍省	40歳
池田慶政	華族	58歳
池田貞賢	海軍省	47歳
池田貞周	海軍省	34歳
池田貞道	教導職	49歳
池田茂政	華族	42歳
池田輝知	華族	22歳
池田徳定	華族	33歳
池田徳潤	地方官	34歳
池田昇	教導職	50歳
池田政保	華族	17歳
池田政礼	華族	32歳
池田弥一	判事	49歳
池永丑太郎	陸軍省	32歳
池永柔遊	陸軍省	38歳
池野逞蔵	陸軍省	32歳
池原香穑	宮内省	51歳

人名	所属	年齢
池部弥一郎	陸軍省	49歳
池辺尚能	海軍省	42歳
生駒親敬	華族	32歳
伊崎光照	陸軍省	29歳
伊崎良熙	陸軍省	30歳
居崎政光	海軍省	27歳
石井賢吉	陸軍省	33歳
石井準太	陸軍省	25歳
石井文碩	陸軍省	26歳
石井政徳	陸軍省	34歳
石井要	陸軍省	40歳
石井収	警視庁・陸軍省	35歳
石井猪太郎	海軍省	27歳
石井邦猷	警視庁・内務省	44歳
石井省一郎	内務省	42歳
石井大順	教導職	59歳
石井大宣	教導職	77歳
石井忠恭	判事	48歳
石井忠亮	工部省	41歳
石井実禅	教導職	51歳
石岡武真	陸軍省	36歳
石神六郎	海軍省	29歳
石川敬直	陸軍省	36歳
石川輔依	陸軍省	36歳
石川高宗	陸軍省	35歳
石川利行	海軍省	49歳
石川仲佺	陸軍省	33歳
石川成徳	華族	27歳
石川成誠	陸軍省	32歳
石川浪彦	陸軍省	31歳
石川則致	陸軍省	43歳
石川愽	陸軍省	26歳
石川昌彦	陸軍省	34歳
石川昌世	陸軍省	33歳
石川義仙	陸軍省	27歳
石川良信	陸軍省	56歳
石川総紀	華族	66歳
石川日大	教導職	66歳
石川有幸	大蔵省	37歳
石川亮	警視庁・陸軍省	51歳
石河正養	教導職	60歳
石口胤家	陸軍省	28歳
石黒重熙	陸軍省	32歳
石黒茂幸	陸軍省	34歳
石黒忠悳	陸軍省	36歳
石黒光正	陸軍省	39歳
石黒務	地方官	41歳
石坂篤保	陸軍省	33歳
石阪惟寛	陸軍省	41歳
石沢謹吾	警視庁・陸軍省	47歳
石嶋寿平	陸軍省	31歳
石田厚哉	陸軍省	35歳
石田熊六	海軍省	37歳
石田正珍	陸軍省	28歳
石田保謙	陸軍省	26歳
石田英吉	地方官	41歳
伊地知季清	陸軍省	27歳
伊地知季建	海軍省	50歳
伊地知季春	陸軍省	34歳
伊地知弘一	海軍省	33歳

人名	所属	年齢
伊地知正治	宮内省	53歳
石津政俊	陸軍省	35歳
石津半七	海軍省	31歳
石塚左玄	陸軍省	30歳
石塚烈三郎	陸軍省	28歳
石野基佑	華族	46歳
石野基安	華族	63歳
石橋俊勝	開拓使	44歳
石橋重朝	大蔵省	35歳
石橋政方	外務省	41歳
石原氏基	陸軍省	29歳
石原応恒	陸軍省	31歳
石原吉弘	陸軍省	28歳
石原廬	陸軍省	25歳
石原近義	警視庁	50歳
石原豊貫	大蔵省	37歳
石原勇五郎	海軍省	29歳
伊島惟正	陸軍省	36歳
石巻清隆	判事	34歳
石丸三七郎	陸軍省	34歳
石丸芳雄	陸軍省	32歳
石丸義孚	陸軍省	46歳
石丸和義	海軍省	43歳
石丸安世	大蔵省	45歳
石室孝暢	教導職	44歳
石本綱	陸軍省	38歳
石山三造	陸軍省	22歳
石山貞家	海軍省	36歳
石山基文	華族	51歳
石山基正	華族	38歳
伊集院兼善	内務省	64歳
伊集院兼寛	元老院	43歳
石渡貞夫	大蔵省(地租改正局)	45歳
出石猷彦	陸軍省	33歳
泉省巳	陸軍省	31歳
井関正方	陸軍省	35歳
井石順介	陸軍省	31歳
井石豊徳	陸軍省	35歳
伊勢地好成	陸軍省	34歳
磯貝静蔵	地方官	30[31]歳
磯嶋新七	陸軍省	30歳
磯野直言	陸軍省	36歳
磯野節	陸軍省	32歳
磯野健	海軍省	29歳
磯林真三	陸軍省	29歳
磯部勝正	海軍省	39歳
磯部鐶	陸軍省	26歳
磯部四郎	判事	29歳
磯部最信	教導職	55歳
磯辺包義	海軍省	39歳
磯村惟亮	陸軍省	36歳
磯本義方	陸軍省	39歳
井田譲	外務省	43歳
板垣義成	陸軍省	36歳
板垣退助		44歳
板倉松叟	華族	58歳
板倉勝弼	華族	34歳
板倉勝達	宮内省	42歳
板倉勝己	華族	30歳
板倉勝弘	華族	43歳

人名	所属	年齢
伊丹正庸	陸軍省	36歳
伊丹秀人	陸軍省	34歳
伊丹重賢	元老院	51歳
一賀道文	判事	37歳
一川研三	大蔵省	42歳
市川確	陸軍省	32歳
市川易継	陸軍省	37歳
市川英林	陸軍省	29歳
市川貫一	判事	44歳
市川莞尓	陸軍省	25歳
市川常孝	陸軍省	33歳
市川祐義	陸軍省	30歳
市川正寧	大蔵省(地租改正局)	38歳
一條忠貞	華族	19歳
一戸兵衛	陸軍省	26歳
一瀬直久	判事	31歳
一瀬正藩	陸軍省	35歳
市橋寿永若	華族	15歳
市橋長義	華族	60歳
市原直好	陸軍省	35歳
一丸正親	陸軍省	32歳
一柳末徳	華族	31歳
一柳紹念	華族	21歳
一柳頼明	華族	23歳
鴨脚光麗	陸軍省	37歳
伊月一郎	海軍省	33歳
五辻高仲	華族	72歳
五辻安仲	宮内省	36歳
伊津野千里	陸軍省	32歳
井出静	陸軍省	28歳
井出正章	陸軍省	36歳
井手昇	陸軍省	30歳
井戸順行	陸軍省	35歳
井戸弘光	陸軍省	25歳
糸井世則	陸軍省	33歳
伊藤伊真太	陸軍省	29歳
伊藤一幸	陸軍省	32歳
伊藤克巳	陸軍省	41歳
伊藤謙吉	判事	45歳
伊藤知彰	陸軍省	31歳
伊藤信一	陸軍省	38歳
伊藤祐順	陸軍省	37歳
伊藤直朝	陸軍省	35歳
伊藤武薫	陸軍省	29歳
伊藤益見	陸軍省	28歳
伊藤基	警視庁・陸軍省	42歳
伊藤元善	陸軍省	36歳
伊藤元祐	陸軍省	35歳
伊藤泰明	陸軍省	29歳
伊藤祐範	陸軍省	40歳
伊藤祐宗	陸軍省	38歳
伊藤祐義	陸軍省	29歳
伊藤常作	海軍省	32歳
伊藤雋吉	海軍省	41歳
伊藤博文	参議	40歳
伊藤祐輝	教導職	44歳
伊藤無関	教導職	72歳
伊東兎熊	陸軍省	24歳
伊東幸平	海軍省	38歳
伊東武	陸軍省	30歳

人名	所属	年齢
伊東本支	陸軍省	38歳
伊東武重	大蔵省	38歳
伊東長寿	華族	37歳
伊東方成	宮内省	47歳
伊東蒙吉	海軍省	39歳
伊東盛貞	宮内省	54[55]歳
伊東祐直	陸軍省	31歳
伊東祐帰	華族	26歳
伊東祐亨	海軍省	38歳
伊東祐麿	海軍省	49歳
伊東巳代治	内務省	24歳
居藤高次郎	陸軍省	27歳
到津公誼	教導職(華族)	36歳
糸賀虎次郎	陸軍省	32歳
稲生震也	海軍省	31歳
稲垣之治	陸軍省	27歳
稲垣政敏	陸軍省	39歳
稲垣正幸	陸軍省	39歳
稲垣長敬	華族	27歳
稲垣湛空	教導職	43歳
稲津良賢	陸軍省	32歳
稲葉久通	華族	38歳
稲葉正邦	華族	47歳
稲葉正善	華族	33歳
井波豊	陸軍省	30歳
稲村元資	陸軍省	33歳
稲村貞務	陸軍省	34歳
乾金義	陸軍省	32歳
乾学愍	教導職	54歳
犬塚能	警視庁・陸軍省	31歳
犬塚重遠	判事	32歳
犬塚盛巍	検事	38歳
猪野忠敬	陸軍省	40歳
井野好修	陸軍省	32歳
井上教通	陸軍省	44歳
井上思服	陸軍省	27歳
井上親忠	陸軍省	37歳
井上祥	陸軍省	30歳
井上章	陸軍省	27歳
井上毅	内務省	38歳
井上亨	陸軍省	31歳
井上時義	陸軍省	32歳
井上俊	陸軍省	46歳
井上直貞	陸軍省	34歳
井上映一郎	陸軍省	44歳
井上東一	陸軍省	28歳
井上光	陸軍省	30歳
井上充	陸軍省	35歳
井上孟一	陸軍省	33歳
井上義行	陸軍省	39歳
井上義矣	海軍省	58歳
井上回	陸軍省	29歳
井上馨	参議・外務卿	45[46]歳
井上自衛	陸軍省	46歳
井上省三	内務省	32歳
井上徳太郎	判事	31歳
井上正義	陸軍省	30歳
井上政継	陸軍省	28歳
井上正亮	陸軍省	36歳
井上正直	教導職(華族)	44歳

人名	所属	年齢
井上正秀	陸軍省	28歳
井上正己	華族	25歳
井上正永	陸軍省	32歳
井上正也	陸軍省	32歳
井上勝	工部省	38歳
井上良馨	海軍省	36歳
井上好武	判事	41歳
井上廉	太政官	35歳
猪狩哲夫	陸軍省	27歳
猪坂順進	陸軍省	30歳
猪山成之	海軍省	37歳
井原熊之照	陸軍省	31歳
茨木惟昭	陸軍省	32歳
雪吹常之	陸軍省	41歳
今井兼利	陸軍省	46歳
今井艮一	検事	37歳
今井直治	陸軍省	22歳
今井信義	陸軍省	29歳
今井兼輔	海軍省	43歳
今泉勇慈	陸軍省	34[37]歳
今川貞山	教導職	55歳
今北洪川	教導職	65歳
今小路沢悟	教導職	47歳
今園国映	華族	28歳
今田唯一	陸軍省	37歳
今田亮	陸軍省	31歳
今鷹重敦	陸軍省	25歳
井街清顕	陸軍省	36歳
今津孝則	陸軍省	36歳
今津利馬	陸軍省	28歳
今出川行全	教導職	54歳
今橋知勝	陸軍省	27歳
今村義心	陸軍省	28歳
今村緝熙	陸軍省	27歳
今村四郎	陸軍省	29歳
今村長賀	陸軍省	44歳
今村信敬	陸軍省	28歳
今村武吉	陸軍省	30歳
今村和郎	内務省	35歳
今村為邦	陸軍省	35歳
今村信行	判事	41歳
井門重晴	陸軍省	30歳
入江祐晟	陸軍省	29歳
入江惟一郎	警視庁・陸軍省	35歳
入江倫愛	陸軍省	36歳
入江太美麿	華族	11歳
入佐清静	警視庁・陸軍省	33歳
岩井忠直	陸軍省	35歳
岩井信	陸軍省	27歳
岩井半吉	海軍省	29歳
岩尾惇正	陸軍省	38[28]歳
岩城正信	海軍省	52歳
岩城隆邦	華族	37歳
岩倉具定	内務省	30歳
岩倉具綱	式部寮	40歳
岩倉具経	大蔵省・太政官	28歳
岩倉具視	大臣	56歳
岩佐専太郎	陸軍省	31歳
岩佐純	宮内省	46歳
岩佐為春	地方官	53歳

人名	所属	年齢
岩崎高行	陸軍省	40歳
岩崎俊安	海軍省	32歳
岩崎敏孟	陸軍省	23歳
岩崎正勝	陸軍省	29歳
岩崎之紀	陸軍省	36歳
岩崎維儼	内務省	47歳
岩崎直礼	判事	41歳
岩崎小二郎	大蔵省	35歳
岩下敬蔵	警視庁・陸軍省	29歳
岩下長十郎	陸軍省	28歳
岩下方平	元老院	54歳
岩田豊保	陸軍省	34歳
岩田直晟	陸軍省	36歳
岩田武儀	判事	34歳
岩根常重	陸軍省	28歳
岩橋政太郎	陸軍省	32歳
岩淵繁隆	陸軍省	33歳
岩村兼善	海軍省	36歳
岩村定高	地方官	53歳
岩村高俊	内務省[地方官]	36歳
岩村通俊	元老院[地方官]	41歳
岩元貞英	陸軍省	31歳
巌谷修	編修官	47歳
巌谷龍一	判事	51歳
岩山敬義	内務省	40歳
う		
上島明政	警視庁	39歳
上嶋善重	陸軍省	27歳
上杉勝道	華族	55歳
上杉斎憲	華族	61歳
上杉茂憲	宮内省	37歳
上田有沢	陸軍省	31歳
上田五郎	陸軍省	28歳
上田正	陸軍省	38歳
上田直孝	陸軍省	31歳
上田文太郎	陸軍省	28歳
上田良貞	警視庁・陸軍省	35歳
上田照遍	教導職	53歳
植田謙八	陸軍省	44歳
植田登	陸軍省	36歳
上野貞雄	陸軍省	35歳
上野直行	陸軍省	32歳
上野元立	陸軍省	30歳
上野庸	陸軍省	25歳
上野景範	外務省	37歳
上野相憲	教導職	49歳
植野守近	陸軍省	34歳
上原尚英	陸軍省	26歳
上原勇作	陸軍省	23[28]歳
上原温重	海軍省	47歳
植松考秀	陸軍省	37歳
植松雅穂	華族	38歳
植松雅平	華族	28歳
上村彦之丞	海軍省	29[30]歳
上村正之丞	海軍省	29歳
上村行徴	地方官	54歳
上村晴説	陸軍省	34歳
上村鐃三郎	陸軍省	24歳
植村家壺	華族	34歳
植村家保	華族	44歳

人名	所属	年齢
植村長	判事	36歳
植村永孚	海軍省	32歳
上山正友	陸軍省	30歳
魚角象三	陸軍省	34歳
養鷓徹定	教導職	67歳
宇賀地新八	陸軍省	33歳
浮田真郷	陸軍省	36歳
浮村直養	陸軍省	36歳
宇佐川一正	陸軍省	32歳
宇佐美亘勝	陸軍省	38歳
牛嶋実満	陸軍省	28歳
牛嶋本蕃	陸軍省	28歳
牛田孝光	陸軍省	29歳
臼井常彬	警視庁・陸軍省	38歳
臼杵重英	陸軍省	30歳
太泰供康	華族	13歳
宇田光行	陸軍省	29歳
宇田淵	宮内省	54歳
内海春震	陸軍省	45歳
内海氏善	海軍省	28歳
内海忠勝	地方官	37歳
内海政雄	教導職	38歳
内海利貞	開拓使	51歳
内桶義安	陸軍省	31歳
内田安民	陸軍省	37歳
内田一心	陸軍省	36歳
内田英一	陸軍省	27歳
内田尊徳	陸軍省	25歳
内田忠雄	陸軍省	35歳
内田正	陸軍省	32歳
内田忠直	陸軍省	28歳
内田正寿	陸軍省	35歳
内田晧	陸軍省	41歳
内田正学	陸軍省[華族]	34歳
内田善太郎	海軍省	27歳
内田正敏	海軍省	30歳
内山功	陸軍省	26歳
内山小二郎	陸軍省	22歳
内山伸一	陸軍省	26歳
内山満之	陸軍省	29歳
内山邦久	海軍省	33歳
宇都純隨	警視庁・陸軍省	34歳
宇都宮九	陸軍省	40歳
宇都宮三郎	工部省	47歳
宇都宮信綱	海軍省	43歳
鵜野曺好	陸軍省	34歳
宇野冨良	陸軍省	33歳
宇野美算	陸軍省	28歳
宇野重喜	陸軍省	28歳
宇橋為久	海軍省	36歳
馬屋原二郎	判事	35歳
馬屋原務本	陸軍省	33歳
馬屋原亨	陸軍省	52歳
馬屋原彰	太政官	37歳
馬屋原孝範	海軍省	37歳
馬渡作二郎	陸軍省	32歳
馬渡貞礼	警視庁・陸軍省	36[37]歳
馬渡平蔵	陸軍省	31歳
梅上沢融	教導職	46歳
梅小路栄麿	華族	14歳

人名	所属	年齢
梅崎信量	陸軍省	34歳
梅沢一直	陸軍省	31歳
梅沢遵義	陸軍省	34歳
梅沢武久	陸軍省	28歳
梅沢道治	陸軍省	28歳
梅沢績	陸軍省	36歳
梅園実静	華族	39[41]歳
梅園実紀	華族	54歳
梅園実師	華族	18歳
梅園春男	教導職	64歳
梅谷梅吉	陸軍省	32歳
梅溪通昌	華族	19歳
梅渓通善	華族	60歳
梅溪通治	華族	50歳
梅地庸之煕	陸軍省	29歳
梅林潔	陸軍省	41歳
浦春輝	判事	37歳
浦上将一	陸軍省	28歳
裏辻公愛	華族	60歳
浦野重徳	陸軍省	48歳
裏松良光	陸軍省	31歳
浦本万生	陸軍省	36歳
宇和川匡義	陸軍省	23歳
え		
穎川君平	外務省[内務省]	38歳
江木高遠	外務省	32歳
江口高知	海軍省	37歳
江口助六	陸軍省	27歳
江口昌條	陸軍省	28歳
江口高確	陸軍省・警視庁	38歳
江田国容	陸軍省	31歳
江塚庸謹	地方官	36歳
榎本弥太郎	陸軍省	36歳
榎本武揚	海軍省	45歳
江橋貞雄	陸軍省	32歳
江橋亮	陸軍省	28歳
江幡篤	陸軍省	34歳
海老原和一	陸軍省	45歳
江間孚通	陸軍省	31歳
江間経治	陸軍省	36歳
江村忠精	陸軍省	31歳
円乗豁	警視庁・陸軍省	35歳
遠藤昶	陸軍省	23歳
遠藤啓	陸軍省	36歳
遠藤敬吉	陸軍省	27歳
遠藤周民	陸軍省	47歳
遠藤慎司	陸軍省	28歳
遠藤伸二郎	陸軍省	21歳
遠藤文之進	陸軍省	28歳
遠藤謹助	大蔵省	45歳
遠藤玄雄	教導職	77歳
遠藤信道	教導職	30歳
遠藤允信	教導職	45歳
遠藤増蔵	海軍省	34歳
お		
及川勢太郎	陸軍省	21歳
正親町実徳	華族	67歳
正親町実正	華族	26歳
大井確士	陸軍省	30歳
大石吉治	海軍省	51歳

人名	所属	年齢
大石良弼	陸軍省	31歳
大炊御門師前	華族	26歳
大炊御門家信	華族	63歳
大生定孝	陸軍省	35歳
大内雄蔵	陸軍省	27歳
大内守静	陸軍省	24歳
大浦兼武	警視庁・陸軍省	31歳
大岡忠貫	華族	34歳
大岡忠敬	華族	53歳
大岡忠明	華族	24歳
大川清成	陸軍省	35歳
大木房之助	陸軍省	28歳
大木喬任	参議・元老院	49歳
大木延建	海軍省	31歳
大木良房	地方官	39歳
大城戸義制	陸軍省	33歳
大給近説	華族	53歳
大給近道	華族	27歳
大給恒	元老院	42歳
大口栄章	陸軍省	32歳
大久保徳明	陸軍省	21歳
大久保直道	陸軍省	29歳
大久保春成	陸軍省	31歳
大久保春野	陸軍省	35歳
大久保銑太郎	陸軍省	27歳
大久保継久	陸軍省	43歳
大久保一翁	元老院	64歳
大久保誠知	陸軍省	41歳
大久保忠尚	海軍省	56歳
大久保忠礼	華族	40歳
大久保忠順	華族	24歳
大久保親正	判事	43歳
大久保利和	華族	22歳
大久保利貞	陸軍省	36歳
大久保利通	贈右大臣	享年49歳
大久保教義	華族	56歳
大久保亮	陸軍省	52歳
大隈英麻呂	内務省	25歳
大隈重信	参議・大蔵卿	49歳
大蔵平三	陸軍省	29歳
大胡豊	陸軍省	23歳
大河内信古	華族	52歳
大河内正質	陸軍省	37歳
大崎督太郎	陸軍省	41歳
大崎行智	教導職	42歳
大迫尚敏	陸軍省	37歳
大迫尚道	陸軍省	27歳
大迫貞清	地方官	56歳
大沢昌督	陸軍省	54歳
大沢正心	海軍省	38歳
大島貞恭	陸軍省	39歳
大島友綱	陸軍省	33歳
大島久直	陸軍省	33歳
大島久誠	陸軍省	35歳
大島道義	陸軍省	33歳
大嶋貞洲	陸軍省	29歳
大嶋義昌	陸軍省	31歳
大須賀利勝	陸軍省	29歳
大杉覚宝	教導職	70歳
大鈴弘毅	陸軍省	39歳

人名	所属	年齢
大洲鉄然	教導職	47歳
大関増勤	華族	29歳
大関増式	華族	42歳
太田栄次郎	陸軍省	24歳
太田義隆	陸軍省	41歳
太田欽哉	陸軍省	28歳
太田貞固	陸軍省	31歳
太田資美	華族	27歳
太田如矩	陸軍省	32歳
太田徳三郎	陸軍省	32歳
太田正徳	陸軍省	22歳
太田左門	宮内省	38歳
大高坂正元	陸軍省	31歳
大立目尭寛	陸軍省	22歳
大谷梧楼	陸軍省	25歳
大谷恒之煕	陸軍省	34歳
大谷喜久蔵	陸軍省	25歳
大谷元忠	陸軍省	33歳
大谷玄嶺	教導職	57歳
大谷勝珍	教導職	27歳
大谷靖	大蔵省	37歳
大谷良胤	教導職	65歳
大多和七郎	陸軍省	31歳
大多和篤義	陸軍省	39歳
大田原清一	陸軍省	37歳
大田原勝清	華族	20歳
大塚貫一	陸軍省	27歳
大塚庸俊	陸軍省	37歳
大塚暢雄	海軍省	26歳
大塚正男	判事	35歳
大築尚志	陸軍省	46歳
大槻栄行	陸軍省	33歳
大槻靖	陸軍省	31歳
大坪正慎	海軍省	45歳
大寺安純	陸軍省	35歳
大戸直則	陸軍省	32歳
大供太郎	陸軍省	31歳
大鳥圭介	工部省	48歳
鴻雪爪	教導職	67歳
大西茂達	陸軍省	34歳
大西恒	陸軍省	33歳
大沼親誠	警視庁・陸軍省	40歳
大沼渉	陸軍省	37歳
大野梅太郎	陸軍省	36歳
大野清助	陸軍省	32歳
大野斎	陸軍省	31歳
大野忠光	陸軍省	32歳
大野恒徳	陸軍省	35歳
大野規周	陸軍省	61歳
大野誠	太政官	47歳
大野義方	海軍省	44歳
大野義範	海軍省	59歳
大野直輔	大蔵省	40歳
大庭景一	陸軍省	25歳
大橋永信	陸軍省	38歳
大橋清直	陸軍省	46歳
大橋信忠	陸軍省	29歳
大畑弘国	教導職	37歳
大林重吉	陸軍省	31歳
大原宗敬	陸軍省	37歳

人名	所属	年齢
大原重徳	華族	享年78歳
大原重朝	外務省	33歳
大平周禎	陸軍省	34歳
大平正脩	陸軍省	28歳
大藤彬	海軍省	35歳
大宮以季	華族	23歳
大村一三	陸軍省	31歳
大村純熙	華族	51歳
大村屯	陸軍省	35歳
大村武郎	華族	30歳
大室勝武	陸軍省	32歳
大森次久	陸軍省	43歳
大森甫	海軍省	32歳
大森雅義	海軍省	43歳
大森盛業	陸軍省	29歳
大屋善二郎	陸軍省	27歳
大八木吉享	陸軍省	31歳
大山政彦	警視庁・陸軍省	40歳
大山約	陸軍省	33歳
大山巌	陸軍卿	39歳
大類義長	海軍省	46歳
岡吉春	陸軍省	51歳
岡千仞	陸軍省	31歳
岡忠順	陸軍省	31歳
岡恒春	陸軍省	32歳
岡徳吉	陸軍省	28歳
岡直臣	陸軍省	30歳
岡林三	陸軍省	33歳
岡泰卿	陸軍省	28歳
岡保義	工部省[宮内省]	35歳
岡吉胤	教導職	50歳
岡井高尚	陸軍省	26歳
岡内重俊	判事	39歳
岡崎武平	陸軍省	34歳
岡崎生三	陸軍省	31歳
岡崎成勝	教導職	42歳
岡沢精	陸軍省	37歳
小笠原義徒	陸軍省	34歳
小笠原賢蔵	内務省	39歳
小笠原賢之進	華族	14歳
小笠原尚弼	警視庁・陸軍省	34歳
小笠原貞孚	華族	31歳
小笠原貞正	華族	41歳
小笠原忠忱	華族	19歳
小笠原恒通	海軍省	31歳
小笠原長育	華族	22歳
小笠原長守	華族	47歳
小笠原寿長	華族	27歳
岡島均	陸軍省	29歳
岡田昭義	陸軍省	29歳
岡田貫之	陸軍省	28歳
岡田謙吉	陸軍省	30歳
岡田鎌吉	陸軍省	24歳
岡田好樹	内務省	33歳
岡田善長	陸軍省	44歳
岡田忠徳	陸軍省	34歳
岡田利義	陸軍省	29歳
緒方惟準	陸軍省	38歳
緒方惟勝	海軍省	41歳
緒方三郎	陸軍省	28歳

人名	所属	年齢
岡田石窓	教導職	50歳
尾形惟善	海軍省	31歳
岡林茂基	陸軍省	51歳
岡部勘六	陸軍省	35歳
岡部政蔵	陸軍省	26歳
岡部長民	陸軍省	37[27]歳
岡部綱紀	地方官	45歳
岡部譲	教導職	32歳
岡見正美	陸軍省	29歳
尾上貞固	陸軍省	29歳
岡村明之	陸軍省	33歳
岡村養義	陸軍省	29歳
岡村為蔵	判事	38歳
岡村長三郎	陸軍省	32歳
岡村信秀	陸軍省	34歳
岡村宜温	陸軍省	46歳
丘本弘斎	陸軍省	37[25]歳
岡本一布	陸軍省	33[30]歳
岡本隆徳	陸軍省	45歳
岡本忠能	陸軍省	34歳
岡本兵四郎	陸軍省	35歳
岡本保雄	陸軍省	27歳
岡本寔	陸軍省	42歳
岡本益道	内務省	48歳
岡本和	大蔵省	41歳
岡本貞	地方官	45歳
岡本孝承	海軍省	43歳
岡本豊章	判事	45歳
岡本長之	開拓使	72歳
岡谷繁実	編修官	46歳
小川邦臣	陸軍省	28歳
小川信	陸軍省	28歳
小川直一	海軍省	32歳
小川光正	陸軍省	30歳
小川博明	陸軍省	29歳
小川政賢	海軍省	34歳
小川又次	陸軍省	33歳
小川維時	陸軍省	38歳
小川喜成	陸軍省	39歳
小川亮	陸軍省	29歳
小川親政	海軍省	40歳
小川直生	陸軍省	26[27]歳
隠岐重節	陸軍省	33歳
沖一平	海軍省	52歳
沖守固	地方官	39歳
荻昌吉	宮内省	27歳
荻田濵	陸軍省	30歳
興津景敏	陸軍省	24歳
息長沢祐	教導職	39歳
沖野精義	陸軍省	25歳
荻野孝恭	陸軍省	36歳
荻野独園	教導職	62歳
沖原光孚	陸軍省	30歳
奥青輔	内務省	35歳
奥保鞏	陸軍省	35歳
奥了寅	教導職	57歳
奥井脩孝	判事	37歳
奥田篤政	陸軍省	42歳
奥田賢英	陸軍省	32歳
奥田正忠	陸軍省	29歳

人名	所属	年齢
奥田俊方	陸軍省	27歳
奥田直明	華族	42歳
奥田直弘	華族	20歳
奥田直賀	華族	38歳
奥田之美	華族	35歳
奥平昌邁	華族	26歳
奥宮正勝	陸軍省	30歳
奥村郁太郎	陸軍省	31歳
奥村弘哉	海軍省	36歳
奥山義章	陸軍省	31歳
奥山政敬	判事	36歳
小倉可晴	陸軍省	30歳
小倉信明	陸軍省	34歳
小倉信恭	陸軍省	28歳
小倉義信	陸軍省	26歳
小倉長季	華族	42歳
小倉久	司法省	29歳
小倉準	陸軍省	22歳
小栗道幸	海軍省	32歳
尾越蕃輔	内務省	36歳
生越安貞	陸軍省	27歳
尾崎種弘	陸軍省	35歳
尾崎忠治	判事	50歳
尾崎三良	太政官	39歳
尾崎房豊	判事	39歳
長田銈太郎	外務省	32歳
小山内建	陸軍省	35歳
小沢徳平	陸軍省	26歳
小沢豁郎	陸軍省	23歳
小沢武雄	陸軍省	37歳
押上森蔵	陸軍省	26歳
押小路公亮	華族	40歳
押小路師成	華族	27歳
小副川知治	海軍省	39歳
小田新太郎	陸軍省	28歳
小田亨	海軍省	34歳
織田信学	華族	62歳
織田長猷	華族	29歳
織田信親	華族	31歳
織田信及	華族	37歳
織田信敏	華族	28歳
織田信成	華族	38歳
小田切盛徳	元老院	45歳
越智通博	陸軍省	28歳
落合兼知	陸軍省	32歳
落合寛太	陸軍省	28歳
落合泰蔵	陸軍省	31歳
落合豊三郎	陸軍省	20歳
落合直亮	教導職	54歳
落合直澄	教導職	41歳
乙骨太郎乙	海軍省	39歳
音羽安成	判事	37歳
小野敦善	陸軍省	35歳
小野安尭	陸軍省	24歳
小野重勤	陸軍省	26歳
小野重憲	陸軍省	37歳
小野実	陸軍省	23歳
小野実理	陸軍省	32歳
小野攻	陸軍省	26歳
小野衡	陸軍省	28歳

人名	所属	年齢
小野忠義	陸軍省	33歳
小野忠治	陸軍省	41歳
小野恒明	陸軍省	33歳
小野直治	陸軍省	27歳
小野六郎	陸軍省	30歳
小野修一郎	地方官	44歳
小野尊光	教導職	32歳
小野尊安	華族	66歳
小野方賢宝	教導職	54歳
小野崎静道[通]	陸軍省	29歳
小野崎通亮	教導職	49歳
小野田健二郎	陸軍省	27歳
小野田為賛	陸軍省	47歳
小野田藤次郎	陸軍省	33歳
小野田元熙	警視庁・陸軍省	33歳
小畑美稲	判事	52歳
小畑茂穂	陸軍省	37歳
小畑蕃	陸軍省	32歳
小花作助	内務省	52歳
小原正恒	陸軍省	28歳
小原芳次郎	陸軍省	29歳
小原勘三郎	陸軍省	29歳
小原重哉	内務省	45歳
小原正朝	地方官	37歳
小尾章	陸軍省	28歳
尾間忠一	陸軍省	39歳
臣佐武	判事	44歳
面高俊一	陸軍省	30歳
尾本知道	海軍省	31歳
折笠晴雄	陸軍省	30歳
折田平内	開拓使	37歳
折田年秀	教導職	56歳
か		
何幸五	工部省	38歳
何礼之	内務省	41歳
甲斐敬直	陸軍省	41歳
海瀬敏行	陸軍省	33歳
海津三雄	陸軍省	28歳
海津武次郎	陸軍省	38歳
海部保寿	陸軍省	34歳
加賀美光賢	海軍省	35歳
加川市郎	陸軍省	25歳
香川景俊	陸軍省	32歳
香川景信	判事	31歳
香川敬三	宮内省	40歳
香川富太郎	陸軍省	28歳
香川葆晃	教導職	42歳
賀川東斎	陸軍省	37歳
蠣崎広高	陸軍省	34歳
柿沼広身	教導職	54歳
角田信道	教導職	35歳
角田秀松	海軍省	32歳
筧元忠	判事	38歳
景山朝輔	陸軍省	24歳
景山直明	陸軍省	28歳
笠川徳脩	陸軍省	25歳
笠嶋省吾	陸軍省	26歳
笠原親寧	陸軍省	33歳
笠原半九郎	判事	40歳
風間繁成	陸軍省	30歳

人名	所属	年齢
風間年長	陸軍省	45歳
笠間広盾	海軍省	36歳
花山院家威	華族	24歳
梶井恒	陸軍省	33歳
梶川十左衛門	警視庁・陸軍省	42歳
加治木栄介	海軍省	32歳
加治木敬介	海軍省	33歳
梶野行篤	華族	46歳
鹿島則文	教導職	42歳
加島義質	陸軍省	33歳
梶山鼎介	陸軍省	33歳
梶山杏庵	陸軍省	34[39]歳
勧修寺顕允	華族	26歳
柏原公馨	陸軍省	31歳
柏原長繁	海軍省	29歳
柏村庸	陸軍省	32歳
梶原景謙	陸軍省	29歳
梶原三盾	陸軍省	34歳
糟谷精一	海軍省	32歳
風早公紀	華族	40歳
片江義高	海軍省	36歳
片岡弘正	陸軍省	39歳
片岡七郎	海軍省	28歳
片岡利和	宮内省	45歳
片桐貞篤	華族	40歳
片倉千万多	陸軍省	27歳
片倉顕矩	陸軍省	30歳
片野友雄	陸軍省	36歳
片野真雄	陸軍省	30歳
交野時万	華族	49歳
片部三郎	陸軍省	30歳
片山集義	陸軍省	47歳
片山義次	陸軍省	34歳
片山源太	陸軍省	40歳
片山中行	陸軍省	34歳
片山道堅	陸軍省	33歳
片山重範	内務省(地租改正局)	43歳
華頂宮博経親王	皇族	享年26歳
華頂宮博経親王妃郁子	皇族	28歳
勝小鹿	海軍省	29歳
勝安芳		58歳
勝尾通直	陸軍省	33歳
勝賀瀬元	陸軍省	24歳
香月三郎	陸軍省	22歳
勝田四方蔵	陸軍省	36歳
甲藤為直	海軍省	44歳
勝野惣三郎	陸軍省	25歳
勝部静男	判事	39歳
勝間田稔	内務省	39歳
勝見有庸	陸軍省	30歳
桂熊太郎	陸軍省	28歳
桂太郎	陸軍省	34歳
桂真澄	陸軍省	29歳
桂盛業	陸軍省	43歳
桂芳三	陸軍省	28歳
葛城義方	陸軍省	36歳
勘解由小路資承	華族	21歳
勘解由小路資生	華族	54歳
勘解由小路光尚	華族	39歳
加藤重遠	陸軍省	30歳

人名	所属	年齢
加藤重任	陸軍省	30歳
加藤清明	警視庁・陸軍省	36歳
加藤国四郎	陸軍省	30歳
加藤寿	陸軍省	33歳
加藤鷹之介	陸軍省	26歳
加藤俊為	陸軍省	51歳
加藤永之	陸軍省	29歳
加藤正秀	陸軍省	38歳
加藤祐善	陸軍省	32歳
加藤好堅	陸軍省	38[42]歳
加藤経高	陸軍省	33歳
加藤明実	華族	33歳
加藤明軌	華族	53歳
加藤里路	教導職	41歳
加藤重成	海軍省	27歳
加藤七郎	陸軍省	28歳
加藤祖一	判事	33歳
加藤種之助	海軍省	37歳
加藤直方	海軍省	43歳
加藤日馨	教導職	64歳
加藤治幹	地方官	34歳
加藤泰秋	華族	35歳
加藤泰令	華族	43歳
加藤体応	教導職	63歳
門田見陳秀	陸軍省	27歳
門屋道四郎	海軍省	34歳
鹿取忠行	陸軍省	30歳
揖取素彦	地方官	52歳
香取保礼	教導職	43歳
金井允釐	警視庁	34[44]歳
金井俊行	地方官	31歳
金井信之	開拓使	46歳
金井之恭	太政官	48歳
鼎龍暁	教導職	43歳
金竹烈太	陸軍省	38歳
金藤之明	陸軍省	29歳
可児市太	陸軍省	29歳
可児春琳	陸軍省	35歳
可児正久	陸軍省	33歳
金子忠至	陸軍省	38歳
金子直寿	陸軍省	21歳
金子有卿	教導職	36歳
金田貞尋	陸軍省	35歳
金田醇雄	陸軍省	32歳
金田常全	教導職	56歳
金土十一郎	海軍省	27歳
加納謙	検事	38歳
加納文桂	陸軍省	32歳
加納久宜	華族	33歳
嘉納希芝	海軍省	68歳
樺山資紀	警視庁・陸軍省	44歳
鏑木融	海軍省	48歳
鎌田宜正	陸軍省	29歳
鎌田正晟	陸軍省	29歳
鎌田景弼	判事	39歳
神尾一信	陸軍省	36歳
神尾光臣	陸軍省	26歳
神代清之進	陸軍省	33歳
神谷景昌	陸軍省	24歳
神谷真観	教導職	50歳

人名	所属	年齢
神谷大周	教導職	40歳
神谷光貞	海軍省	43歳
上月秀実	陸軍省	27歳
上利勝世	陸軍省	35歳
神藤才一	陸軍省	23歳
神山譲	判事	45歳
神山郡廉	地方官	52歳
神山聞	大蔵省	48歳
上領頼方	陸軍省	30歳
香村俊昌	陸軍省	33歳
亀井益雄	陸軍省	33歳
亀井茲明	華族	20歳
亀井茲監	華族	59歳
亀岡泰辰	陸軍省	29歳
亀岡為定	陸軍省	31歳
加茂政直	陸軍省	39歳
賀茂水穂	海軍省	41歳
蒲生知郷	陸軍省	38歳
鴨川有敏	陸軍省	29歳
賀屋義矩	陸軍省	36歳
香山永隆	海軍省	41歳
唐沢忠備	陸軍省	27歳
烏丸一郎	陸軍省	34歳
烏丸亨二郎	華族	16歳
唐橋在正	華族	29歳
唐橋在綱	陸軍省	39歳
苅屋正身	陸軍省	40歳
川井守一	陸軍省	28歳
河井令信	陸軍省	29歳
河井時階	海軍省	33歳
河井瓢	陸軍省	26歳
河合源達	陸軍省	28歳
川上操六	陸軍省	34歳
川上親英	海軍省	37歳
川上親賢	陸軍省	42歳
川上信成	陸軍省	25歳
川上又四郎	陸軍省	34歳
河上繁栄	陸軍省	33歳
河北俊弼	陸軍省	37歳
河北祐充	陸軍省	34歳
川口清俊	陸軍省	27歳
川口住武	陸軍省	33歳
川口武定	陸軍省	35歳
河口定義	判事	37歳
川越重国	陸軍省	28歳
河越重幸	陸軍省	36歳
川崎辰巳	陸軍省	44歳
川崎祐名	陸軍省	48歳
川崎宗則	陸軍省	32歳
川崎強八	判事	41歳
川崎寅三	陸軍省	27歳
川崎宮吉	陸軍省	29歳
川路利国	警視庁・陸軍省	45歳
川路利行	警視庁・陸軍省	33歳
川路利良	陸軍省・警視庁	享年47歳
川路利暖	警視庁・陸軍省	37歳
川島虎夫	海軍省	29歳
河島至誠	陸軍省	27歳
河嶋雅兄	陸軍省	23[33]歳
河瀬秀治	大蔵省	42歳

人名	所属	年齢
河瀬真孝	元老院	41歳
川田剛	編修官	51歳
河田景福	海軍省	46歳
河田景与	元老院	53歳
河田日因	教導職	53歳
川谷致秀	陸軍省	22[23]歳
河津祐賢	陸軍省	38歳
河津祐之	元老院	32歳
川畑種長	警視庁・陸軍省	41歳
川畑平吉	陸軍省	23歳
川幡清貞	警視庁・陸軍省	45歳
川端知十郎	陸軍省	26歳
河原要一	海軍省	32歳
河鰭公篤	華族	24歳
河鰭斎	大蔵省	40歳
河鰭実文	内務省	36歳
河辺隆次	華族	16歳
川俣佳辰	陸軍省	34歳
川俣国伝	陸軍省	37歳
川村景明	陸軍省	31歳
川村益直	陸軍省	28歳
川村応心	判事	43歳
川村純義	参議・海軍省	41歳
川村弘貞	海軍省	31歳
河村馬吾七	陸軍省	36歳
河村五一	陸軍省	41歳
河村五三郎	陸軍省	31歳
河村辰彦	陸軍省	37歳
河村光治	陸軍省	28歳
河村正孝	陸軍省	30歳
河村正之	海軍省	46[35]歳
河村豊洲	海軍省	32歳
川本清一	外務省	42歳
閑院宮載仁親王	皇族	16歳
神田一之	陸軍省	29歳
神田金太郎	陸軍省	30歳
神田節三	陸軍省	38歳
神田息胤	教導職	38歳
神田孝平	元老院	51歳
完道譲	陸軍省	27歳
坎宥永	教導職	78歳
甘露寺義長	華族	29歳
き		
紀俊尚	教導職(華族)	46歳
菊池篤忠	陸軍省	36歳
菊地主殿	陸軍省	23歳
菊地成	陸軍省	37歳
菊池武文	陸軍省	34歳
菊地盛文	陸軍省	30歳
菊池量海	陸軍省	40歳
菊地節蔵	陸軍省	27歳
菊池和太郎	陸軍省	24歳
菊亭修季	華族	24歳
菊野景衛	陸軍省	28歳
木越安綱	陸軍省	26歳
騎西安遷	警視庁・陸軍省	43歳
岸信和	陸軍省	31歳
岸用和	陸軍省	30歳
喜志潜蔵	陸軍省	32歳
貴志一郎	陸軍省	39歳

人名	所属	年齢
貴志敬之	海軍省	38歳
貴志米吉	陸軍省	29歳
貴志典正	陸軍省	25歳
岸上恢嶺	教導職	43歳
貴島兼誼	海軍省	44歳
岸良兼養	判事	44歳
岸良俊介	内務省	37歳
喜多千頴	検事	36歳
喜田精一	陸軍省	25歳
北大路公久	華族	16歳
北岡吉秋	陸軍省	32歳
北垣国道	地方官	45歳
北川知孝	陸軍省	38歳
北川精一	陸軍省	38歳
北川正与	陸軍省	42歳
北川武	陸軍省	24歳
北川柳造	陸軍省	32歳
北河原公憲	華族	34歳
北小路和麻呂	華族	18歳
北小路隨光	華族	49歳
北小路俊昌	華族	45歳
北小路俊茂	華族	25歳
北小路俊親	華族	31歳
北島信厚	陸軍省	39歳
北島脩孝	華族	43歳
北島全孝	華族	78歳
北島殿若丸	華族	19歳
北嶋沖	陸軍省	40歳
北白川宮能久親王	皇族	34歳
北白川宮能久親王妃光子	皇族	22歳
北代正臣	判事	40歳
喜多野徳隅	陸軍省	29歳
北畠学丈	陸軍省	36歳
北畠治房	判事	48歳
北畠通城	華族	32歳
北村敬慎	海軍省	42歳
北村泰一	判事	40歳
北村正存	陸軍省	38歳
喜多村儀嗣	海軍省	47歳
喜多村辰次	陸軍省	25歳
基太村不二	陸軍省	42歳
北森義敬	警視庁・陸軍省	31歳
木付義路	判事	41歳
木戸正二郎	華族	20歳
木戸孝允	太政官	享年45歳
木梨精一郎	内務省・陸軍省	36歳
木下忠信	陸軍省	32歳
木下安楠	陸軍省	29歳
木下勝知	陸軍省	47歳
木下俊敦	華族	79歳
木下俊愿	華族	享年44歳
木下武夫	陸軍省	30歳
木下利恭	華族	49歳
木庭堅盤	陸軍省	26歳
木原義実	陸軍省	37歳
木藤貞良	海軍省	32歳
木辺賢慈	教導職(華族)	40歳
木全多見	陸軍省	24歳
君島胤広	海軍省	36歳
木村有恒	陸軍省	30歳

人名	所属	年齢
木村起善	陸軍省	30歳
木村重	陸軍省	28歳
木村寛良	陸軍省	37歳
木村金三郎	陸軍省	26歳
木村才蔵	陸軍省	33歳
木村新九郎	陸軍省	30歳
木村政養	陸軍省	39歳
木村漸	陸軍省	38歳
木村達	陸軍省	33歳
木村宣明	陸軍省	29歳
木村唯蔵	陸軍省	26歳
木村喬一郎	判事	39歳
木村重任	教導職	64歳
木村信宝	海軍省	32歳
木村文吾	警視庁・陸軍省	43歳
木村平蔵	海軍省	40歳
木村正辞	判事	54歳
木村元礼	陸軍省	46歳
木村頼蔵	海軍省	34歳
肝付兼行	海軍省	28歳
木山稠	陸軍省	29歳
久徳宗義	陸軍省	35歳
京極朗徹	華族	53歳
京極高厚	華族	48歳
京極高富	華族	46歳
京極高典	華族	45歳
京極高徳	華族	23歳
清浦奎吾	司法省[検事]	31歳
清岡公張	判事	40歳
清岡長説	華族	49歳
清岡長延	華族	36歳
清田哲二	陸軍省	31歳
霧隠泰龍	教導職	53歳
桐淵直	陸軍省	32歳
桐山八郎	陸軍省	32歳
木脇良	警視庁・内務省	32歳
く		
久我環溪	教導職	64歳
久我誓円尼	教導職	53歳
九鬼隆義	華族	44歳
九鬼隆備	華族	47歳
九鬼隆都	華族	80歳
九鬼隆一	文部省・太政官	29歳
久木田直道	開拓使・陸軍省	38歳
久木村治休	警視庁・陸軍省	38歳
草鹿瑍	判事	40歳
日下秀明	海軍省	35歳
草刈義哉	陸軍省	35歳
草野英行	陸軍省	31歳
草野可孝	陸軍省	34歳
草野允素	司法省	50歳
草葉真作	陸軍省	32歳
草場彦輔	陸軍省	32歳
草間時雄	陸軍省	28歳
櫛笥隆義	華族	27[29]歳
串田孝記	陸軍省	35歳
九條道孝	華族	40[41]歳
九條優麿	華族	12歳
葛岡信綱	陸軍省	36歳
楠川敬助	陸軍省	28歳

人名	所属	年齢
楠瀬幸彦	陸軍省	22歳
楠田英世	元老院	51歳
楠永直光	地方官	34歳
楠玉諦	教導職	63歳
楠正位	判事	37歳
楠目正幹	海軍省	43歳
楠本三蔵	陸軍省	なし
楠本正隆	元老院	43歳
久世通章	華族	20[22]歳
久世広業	華族	23歳
朽木為綱	華族	33歳
沓屋貞諒	陸軍省	40歳
沓屋精一	陸軍省	33歳
工藤寅吉	陸軍省	27歳
工藤則勝	判事	35歳
国貞廉平	地方官	40歳
国重正文	地方官	41歳
国冨重信	陸軍省	31歳
国友次郎	海軍省	32歳
久邇宮朝彦親王	皇族	57歳
国安達	陸軍省	24歳
功刀栄植	陸軍省	37歳
久能賢親	陸軍省	31歳
久野敬義	陸軍省	42歳
久野廉	陸軍省	25歳
久野宗熙	宮内省	27歳
久芳光直	陸軍省	31歳
久保豪介	陸軍省	27歳
久保秀景	判事	52歳
久保季茲	教導職	52歳
久保了寛	教導職	53歳
窪島珎儀	陸軍省	32歳
久保田重直	陸軍省	38歳
久保田譲	文部省	34歳
窪田祐章	海軍省	32歳
隈岡長道	陸軍省	35歳
熊谷直服	陸軍省	28歳
熊谷宣篤	陸軍省	30歳
熊谷正躬	陸軍省	28歳
隈崎守約	海軍省	33歳
熊沢安定	陸軍省	29歳
熊野誠之	陸軍省	41歳
熊野九郎	地方官	38歳
隈房翹	大蔵省	39歳
隈部潜	陸軍省	33歳
熊丸義直	陸軍省	36歳
隈元実道	警視庁・陸軍省	29歳
隈元政次	陸軍省	26歳
隈元道義	海軍省	43歳
隈元実就	海軍省	36歳
久米邦武	編修官	42歳
久米幹文	教導職	53歳
倉内末盛	警視庁・陸軍省	46歳
蔵重政実	陸軍省	44歳
蔵田安宗	陸軍省	26歳
蔵田信一	陸軍省	28歳
蔵田珍平	陸軍省	41歳
蔵田乕助	陸軍省	27歳
蔵田直寛	陸軍省	30歳
倉辻靖二郎	陸軍省	27歳

人名	所属	年齢
倉橋愛橘	陸軍省	31歳
倉橋豊家	陸軍省	26歳
倉橋泰顕	華族	46歳
倉橋泰清	華族	26歳
倉橋泰聡	華族	66歳
倉光利諒	陸軍省	31歳
倉山唯永	陸軍省	43歳
九里孫次郎	陸軍省	33歳
栗林頼弘	陸軍省	36歳
栗原一郎右衛門	陸軍省	46歳
栗原乙也	陸軍省	28歳
栗原実	海軍省	34歳
栗原績	海軍省	29歳
栗原正人	陸軍省	40歳
栗本久勝	陸軍省	38歳
栗本貞次郎	外務省	42歳
栗山勝三	陸軍省	27歳
栗山留吉	陸軍省	31歳
久留島通簡	華族	22歳
栗栖毅太郎	陸軍省	34歳
栗栖亮	陸軍省	28歳
黒岩直教	陸軍省	42歳
黒岩直方	判事	44歳
黒岡帯刀	海軍省	20歳
黒川晋	警視庁・陸軍省	31歳
黒川通軌	陸軍省	38歳
黒川秀行	陸軍省	33歳
黒川誠一郎	司法省	32歳
黒木為楨	陸軍省	38歳
黒沢嫡	陸軍省	31歳
黒住宗敬	教導職	25歳
黒住宗篤	教導職	33歳
黒瀬義門	陸軍省	32歳
黒田久孝	陸軍省	36歳
黒田清隆	陸軍省・内閣顧問	41歳
黒田清綱	元老院	51歳
黒田長和	華族	43歳
黒田長成	華族	14歳
黒田長徳	華族	33歳
黒田長溥	華族	70歳
黒萩重和	陸軍省	33[32]歳
黒原和友	海軍省	38歳
桑木崇台	陸軍省	32歳
桑島景連	陸軍省	38歳
桑島忠孝	陸軍省	40歳
桑島道男	陸軍省	48歳
桑田衡平	内務省	45歳
桑名素男	陸軍省	25歳
桑野弦蔵	陸軍省	34歳
桑波田景堯	陸軍省	29歳
桑幡清馨	警視庁・陸軍省	31歳
桑原輔長	華族	32[34]歳
桑原諸武	海軍省	45歳
桑門順光	教導職	49歳
桑山敏	開拓使	39歳
け		
外記康昌	海軍省	31歳
こ		
小蘆弥八郎	海軍省	43歳
小池新	陸軍省	32歳

人名	所属	年齢
小池正文	陸軍省	51歳
小池友愛	陸軍省	39歳
小泉親正	陸軍省	34歳
小泉策郎	陸軍省	29歳
小出電吉	陸軍省	23歳
小出義之	陸軍省	34歳
小出喜助	陸軍省	31歳
小出英尚	華族	32歳
広日光	教導職	45歳
香坂昌邦	警視庁	36歳
郷純造	大蔵省	52歳
古宇田信近	陸軍省	32歳
郷田兼徳	地方官	41歳
甲谷為邦	陸軍省	38歳
香渡晋	宮内省	49歳
香渡範三郎	陸軍省	22歳
厚東武直	陸軍省	38歳
厚東樹臣	大蔵省	53歳
河南環	陸軍省	28歳
河野栄次郎	海軍省	47歳
河野往阿	教導職	42歳
河野覚阿	教導職	62歳
河野貫道	陸軍省	33歳
河野春庵	陸軍省	24歳
河野通行	陸軍省	30歳
河野通成	陸軍省	30歳
河野通知	陸軍省	39歳
河野通好	陸軍省	31歳
河野通故	判事	48歳
河野通信	工部省	41歳
河野通政	海軍省	35歳
河野通保	海軍省	31歳
河野通猷	大蔵省	41歳
河野通倫	地方官	33[34]歳
河野通	地方官	43歳
河野亨	陸軍省	28歳
河野敏鎌	文部省	37歳
河野孫四郎	陸軍省	30歳
紅林武治	大蔵省(地租改正局)	48歳
神戸守正	陸軍省	31歳
神鞭知常	大蔵省	31歳
古賀鋭	陸軍省	43歳
古賀喜三郎	海軍省	38歳
古賀晋介	海軍省	46歳
古賀明銓	判事	38歳
久我建通	華族	66歳
久我通久	華族	40歳
国司信	陸軍省	23歳
国司順正	陸軍省	39歳
国司仙吉	式部寮	35歳
国分景虎	陸軍省	23歳
小郷武	陸軍省	36歳
五古快全	教導職	55歳
御座雄貞	陸軍省	31歳
小坂千尋	陸軍省	31歳
皷坂荐海	教導職	51歳
小崎利準	地方官	43歳
古志正綱	陸軍省	28歳
古志頴徳	陸軍省	29歳
小嶋政憲	陸軍省	38歳

人名	所属	年齢
小嶋忠純	陸軍省	27歳
小嶋秀道	陸軍省	29歳
小島政利	陸軍省	38歳
児島益謙	陸軍省	43歳
児島惟謙	判事	44歳
古城胤保	陸軍省	30歳
五條為明	華族	20歳
五條為栄	華族	41[39]歳
小杉直吉	判事	45歳
小菅智淵	陸軍省	49歳
小菅栄脩	検事	39歳
小菅揆一	大蔵省	35歳
小鷹狩元凱	陸軍省	35歳
小瀧昌美	陸軍省	34歳
小谷種美	陸軍省	36歳
児玉軍太	陸軍省	30歳
児玉源太郎	陸軍省	29歳
児玉徳太郎	陸軍省	25歳
児玉利賢	海軍省	30歳
児玉利武	海軍省	36歳
児玉良友	陸軍省	36歳
児玉愛二郎	宮内省	41歳
児玉源之丞	宮内省	55歳
児玉利国	海軍省	41歳
児玉利純	海軍省	28歳
児玉包孝	海軍省	30歳
籠手田安定	地方官	41歳
後藤義文	陸軍省	42歳
後藤常伴	陸軍省	34歳
後藤広貞	判事	38歳
後藤雄吉	陸軍省	28歳
五藤国幹	海軍省	38歳
五島孝継	内務省	38歳
五島盛成	華族	65歳
伍堂卓尓	陸軍省	37歳
琴陵宥常	教導職	41歳
小西蘊	内務省	42歳
小西有勲	式部寮	41歳
近衛篤麿	華族	18歳
近衛高鳳尼	教導職	29歳
近衛忠熙	華族	73歳
小橋誠人	陸軍省	33歳
小幡環	陸軍省	30歳
小幡豊之助	陸軍省	30歳
小早川大船	教導職	35歳
小林勝彬	陸軍省	30歳
小林資敬	陸軍省	32歳
小林重賢	陸軍省	39歳
小林師現	陸軍省	30歳
小林千和岐	陸軍省	46歳
小林忠直	海軍省	33歳
小林保三	陸軍省	29歳
小林枢庵	陸軍省	35歳
小林虎三郎	陸軍省	26歳
小林一知	内務省	45歳
小林三敬	陸軍省	37歳
小林藹	判事	36歳
小林春三	海軍省	29歳
小林好愛	大蔵省	37歳
小林日昇	教導職	49歳

人名	所属	年齢
小林廉平	海軍省	31歳
小藤亨三	陸軍省	31歳
小藤孝行	宮内省	42歳
狛林之助	工部省	33歳
小牧昌業	開拓使	38歳
駒木根又市	陸軍省	43歳
駒沢保定	陸軍省	28歳
小松宮彰仁親王	皇族	35歳
小松宮彰仁親王妃頼子	皇族	29歳
小松弘隆	判事	32歳
小松維直	陸軍省	39歳
小松行敏	華族	34歳
駒留良蔵	警視庁・内務省	30歳
小宮山昌寿	陸軍省	39歳
小村隣	教導職	33歳
米田虎雄	宮内省・陸軍省	42歳
小守庵	陸軍省	40歳
古森日経	教導職	62歳
小森沢長政	海軍省・太政官	38歳
小山教能	陸軍省	43歳
小山勝興	陸軍省	40歳
小山熊次郎	陸軍省	31歳
小山高光	陸軍省	38歳
是石武敬	陸軍省	48歳
是枝頼行	警視庁・陸軍省	35歳
金剛宥性	教導職	60歳
権田正三郎	海軍省	27歳
近藤篤	警視庁・陸軍省	40歳
近藤快造	陸軍省	31歳
近藤清久	陸軍省	35歳
近藤陣冨	陸軍省	31歳
近藤政明	陸軍省	33歳
近藤正近	陸軍省	32歳
近藤政敏	陸軍省	30歳
近藤正則	陸軍省	30歳
近藤正弘	陸軍省	30歳
近藤真鋤	外務省	41歳
近藤真琴	海軍省	50歳
近藤清石	教導職	48歳
近藤幸正	内務省	38歳
近藤芳樹	宮内省	享年80歳
近藤芳介	教導職	57歳
さ		
西園寺公望	華族	34歳
斎川昇	陸軍省	28歳
才木高尚	陸軍省	34歳
西郷従道	参議・陸軍省	38歳
税所篤文	陸軍省	26歳
税所篤	地方官	54歳
斉藤栄	外務省	55歳
斉藤次郎太	大蔵省	50歳
斉藤利行	元老院	59歳
斎藤亀三郎	陸軍省	23歳
斎藤貫五郎	陸軍省	33歳
斎藤郡太	陸軍省	23歳
斎藤惟一	陸軍省	39歳
斎藤太郎	陸軍省	31歳
斎藤時之	陸軍省	29歳
斎藤徳明	陸軍省	34歳

人名	所属	年齢
斎藤利忠	陸軍省	38歳
斎藤正貫	陸軍省	30歳
斎藤正言	陸軍省	46歳
斎藤政美	陸軍省	29歳
斎藤義範	陸軍省	39歳
斎藤龍関	教導職	50歳
佐伯成言	陸軍省	40歳
佐伯義次郎	陸軍省	27歳
佐伯惟孝	陸軍省	28歳
佐伯半次	判事	38歳
佐伯旭雅	教導職	53歳
佐伯菅雄	教導職	42歳
佐伯惟馨	大蔵省	36歳
左乙女英武	陸軍省	39歳
阪修	陸軍省	31歳
坂井重勝	陸軍省	25歳
坂井環	陸軍省	34歳
阪井重季	陸軍省	35歳
酒井清	陸軍省	30歳
酒井次郎	陸軍省	20歳
酒井融	陸軍省	41歳
酒井元太郎	陸軍省	32歳
酒井明	地方官	30歳
酒井忠篤	陸軍省	28歳
酒井忠彰	華族	29歳
酒井忠匡	華族	25歳
酒井忠方	華族	76歳
酒井忠績	華族	54歳
酒井忠惇	華族	42歳
酒井忠利	海軍省	24歳
酒井忠宝	華族	25歳
酒井忠道	華族	30歳
酒井忠経	華族	33歳
酒井正房	海軍省	26歳
境二郎	地方官	45歳
榊原宰之助	陸軍省	22歳
榊原昇造	陸軍省	21歳
榊原政敬	華族	38歳
榊原忠誠	陸軍省	21歳
嵯峨公勝	華族	19歳
嵯峨実愛	華族	61歳
坂田善得	陸軍省	33歳
坂田之重	陸軍省	28歳
坂田春雄	内務省	32歳
坂田次郎	海軍省	30歳
阪田厳三	陸軍省	33歳
阪田莠	教導職	51歳
阪谷素	内務省	59歳
坂根近義	陸軍省	46歳
坂野親伯	警視庁・陸軍省	31歳
阪部正修	陸軍省	43歳
坂部長照	大蔵省	46歳
坂本政均	判事	50歳
坂本英延	陸軍省	30歳
坂本基柱	陸軍省	43歳
阪本行也	陸軍省	35歳
阪本日桓	教導職	56歳
坂元純熙	陸軍省	38歳
相楽冨道	華族	21歳
相良孝道	陸軍省	40歳

人名	所属	年齢
相良行政	陸軍省	25歳
相良長発	陸軍省	47歳
相良長裕	陸軍省	35歳
相良頼紹	華族	28歳
酒匂景信	陸軍省	31歳
佐川耕作	陸軍省	28歳
佐川長閑	陸軍省	34歳
佐川和風	陸軍省	25歳
佐川晃	海軍省	32歳
佐幹観鏡	教導職	62歳
鷺原量長	華族	23歳
作間一介	太政官	35歳
佐久間潔	陸軍省	33歳
佐久間義一郎	海軍省	37歳
佐久間国安	海軍省	28歳
佐久間虎三	陸軍省	24歳
佐久間成己	陸軍省	28歳
佐久間左馬太	陸軍省	37歳
佐久間浩	陸軍省	24歳
佐久間盛義	陸軍省	34歳
佐久間秀脩	判事	42歳
桜井重寿	陸軍省	31歳
桜井供義	華族	26歳
桜井庫五郎	陸軍省	24歳
桜井貞	海軍省	45歳
桜井三平	陸軍省	30歳
桜井忠興	華族	33歳
桜井直一	陸軍省	40歳
桜井直養	判事	47歳
桜井能監	内務省	37歳
桜井規矩之左右	海軍省	32歳
桜井敬徳	教導職	47歳
桜井純造	宮内省	55歳
桜井勉	内務省	38歳
桜木貞陸	陸軍省	32歳
桜田親義	外務省	38歳
鮭延良治	陸軍省	31歳
座光寺糾	判事	43歳
迫田甚之丞	海軍省	29歳
迫水周一	陸軍省	30歳
左近允景良	海軍省	47歳
佐々長道	陸軍省	31歳
笹尾精行	海軍省	30歳
佐々木忠哉	陸軍省	37歳
佐々木直前	陸軍省	37歳
佐々木透	陸軍省	33歳
佐々木直	陸軍省	27歳
佐々木峯二	陸軍省	30歳
佐々木高行	参議・工部卿	51歳
佐々木文次郎	警視庁・陸軍省	36歳
佐々木千尋	警視庁	47歳
佐々木長淳	宮内省	51歳
佐治為善	陸軍省	38歳
佐双左仲	海軍省	29歳
佐竹義生	華族	14歳
佐竹義脩	陸軍省	27歳
佐竹義方	陸軍省	39歳
佐竹義理	華族	23歳
佐竹義尭	華族	56歳
佐武広命	陸軍省	42歳

人名	所属	年齢
佐藤介蔵	陸軍省	31歳
佐藤存	陸軍省	48歳
佐藤英敦	陸軍省	33歳
佐藤栄信	陸軍省	28歳
佐藤舜海	陸軍省	38歳
佐藤進	陸軍省	36歳
佐藤正	陸軍省	32歳
佐藤惟一郎	警視庁・陸軍省	37歳
佐藤忠義	陸軍省	23歳
佐藤常政	陸軍省	31歳
佐藤當可	陸軍省	28歳
佐藤直次郎	陸軍省	25歳
佐藤暢	警視庁・陸軍省	29[31]歳
佐藤信有	陸軍省	35歳
佐藤春立	陸軍省	33歳
佐藤秀行	陸軍省	36歳
佐藤房郁	警視庁・陸軍省	36歳
佐藤義方	陸軍省	35歳
佐藤吉徳	陸軍省	42歳
佐藤良歆	陸軍省	29歳
佐藤鎮雄	海軍省	30歳
佐藤説門	教導職	55歳
佐藤同学	教導職	65歳
佐藤秀顕	開拓使	29歳
佐藤与三	工部省	38歳
佐土原祐吉	陸軍省	27歳
里見守行	陸軍省	31歳
真田幸民	華族	31歳
真田義一	海軍省	37歳
佐波隆次郎	陸軍省	27歳
佐野猪三郎	陸軍省	25歳
佐野運籌	陸軍省	34歳
佐野尚徳	陸軍省	36歳
佐野常民	大蔵省	59歳
佐橋佳衡	海軍省	53歳
鮫島宗城	陸軍省	33歳
鮫島員規	海軍省	36歳
鮫島尚信	外務省	36歳
佐本寿人	陸軍省	30歳
佐和正	警視庁・太政官	37歳
沢正明	陸軍省	31歳
沢簡徳	地方官	45歳
沢為量	華族	68歳
沢太郎左衛門	海軍省	47歳
沢長麿	華族	21歳
沢井近知	警視庁・陸軍省	39歳
佐脇安之	陸軍省	43歳
沢本良樹	陸軍省	36歳
沢崎正信	陸軍省	24歳
沢野種鉄	海軍省	46歳
沢野久種	海軍省	35歳
沢良渙	海軍省	28歳
三條実美	大臣	45[44]歳
三條西公允	宮内省	40歳
三條西乗禅	教導職	37歳
三條西季知	宮内省	70歳
三宮義胤	外務省	38歳
斬波良平	海軍省	59歳
し		
塩田三郎	外務省	45[38]歳

人名	所属	年齢
塩坪恭良	判事	36歳
塩谷信好	陸軍省	34歳
塩屋方国	陸軍省	32歳
志賀範之	陸軍省	30歳
鹿園亥五郎	華族	15歳
志方之勝	判事	45歳
鹿野良哉	陸軍省	36歳
鹿野勇之進	海軍省	29歳
滋岡功長	教導職	77歳
重地為則	陸軍省	26歳
重野安繹	編修官	54歳
滋野清彦	陸軍省	35歳
滋野井公寿	華族	38歳
重信常憲	警視庁	46歳
重久篤行	海軍省	28歳
重松能通	陸軍省	32歳
慈光寺右仲	華族	39[41]歳
慈光寺有仲	華族	53歳
志道貫一	海軍省	32歳
志道保勝	陸軍省	32歳
獅岳快猛	教導職	68歳
獅子吼観定	教導職	62歳
宍戸民輔	陸軍省	23歳
宍戸昌	地方官	40歳
宍野半	教導職	37歳
四條隆謌	陸軍省	53歳
四條隆平	宮内省	40歳
静間浩輔	陸軍省	30歳
信太正脩	陸軍省	57歳
設楽一	陸軍省	32歳
設楽謙堂	地方官	45歳
七條信義	華族	23[24]歳
七里千涛	陸軍省	40歳
品川氏章	陸軍省	36歳
品川梅蔵	陸軍省	29歳
品川弥二郎	内務省	38歳
品川忠直	外務省	41歳
品川四方一	海軍省	36歳
篠崎彦二	開拓使・陸軍省	33歳
篠崎仲純	海軍省	24歳
篠塚義春	陸軍省	35歳
篠塚不著	教導職	38歳
篠原国清	陸軍省	42歳
四宮信応	陸軍省	32歳
篠森泰度	開拓使・陸軍省	39歳
柴五郎	陸軍省	21歳
柴恒房	陸軍省	24歳
柴直言	陸軍省	48歳
芝直照	陸軍省	33歳
柴岡孝徳	海軍省	48歳
芝小路豊訓	華族	51歳
斯波有造	地方官	37歳
柴田至	陸軍省	44歳
柴田五郎次	海軍省	37歳
柴田正孝	陸軍省	30歳
柴田忠雄	陸軍省	30歳
柴田花守	教導職	72歳
柴田基範	教導職	64歳
芝亭実忠	華族	22歳
柴野義広	陸軍省	35歳

人名	所属	年齢
柴原和	元老院[地方官]	49歳
柴山尚則	陸軍省	27歳
柴山矢八	海軍省	31歳
芝山寛禎尼	教導職	72歳
柴祐介	海軍省	38歳
渋谷在明	陸軍省	25歳
渋谷彦一郎	陸軍省	42歳
渋谷直武	海軍省	43歳
島惟精	地方官	47歳
島輝	海軍省	37歳
嶋時中	陸軍省	35歳
嶋良忠	陸軍省	31歳
島川宗儀	海軍省	43歳
島崎好忠	海軍省	30歳
島地黙雷	教導職	43歳
島田一義	陸軍省	28歳
島田繁	陸軍省	23歳
島田正章	判事	38歳
島田泰夫	内務省	55歳
島田三郎	文部省[元老院]	29歳
島田修海	海軍省	38歳
島津忠亮	華族	32歳
島津忠寛	華族	53歳
島津忠義	華族	41歳
島名常貴	陸軍省	36歳
島野翠	陸軍省	31歳
島村成允	陸軍省	38歳
嶋村友直	陸軍省	38歳
清水滸	陸軍省	21歳
清水重矩	陸軍省	50歳
清水重信	陸軍省	29歳
清水軌郷	陸軍省	32歳
清水進	陸軍省	29歳
清水鋭威	陸軍省	31歳
清水仲	陸軍省	32歳
清水光儀	陸軍省	51歳
清水篤守	外務省	25[29]歳
清水清	海軍省	32歳
清水俊	陸軍省	34歳
清水生清	陸軍省	29歳
清水鍬三郎	陸軍省	32歳
清水武定	陸軍省	32歳
志水小一郎	陸軍省	27歳
清水谷公正	華族	72歳
清水谷公考	華族	36歳
清水谷祥明	教導職	57歳
持明院基静	華族	21[23]歳
志村徳行	陸軍省	34歳
示野重武	陸軍省	36歳
下元貞	陸軍省	32歳
下枝観一郎	陸軍省	34歳
下條親英	陸軍省	48歳
下條正雄	海軍省	38歳
下瀬猛輔	陸軍省	38歳
下田正文	陸軍省	30歳
下村勝成	陸軍省	22歳
下村定辞	陸軍省	33歳
下山清	陸軍省	28歳
下山尚	地方官	39歳
釈雲照	教導職	54歳

人名	所属	年齢
釈越溪	教導職	71歳
釈堯寛	教導職	57歳
釈暁宗	教導職	62歳
釈隆燈	教導職	47歳
釈日実	教導職	61歳
釈日貫	教導職	60歳
釈日禎	教導職	62歳
樹下諦善	教導職	72歳
修多羅亮栄	教導職	67歳
生源寺希徳	教導職	26歳
城嶋栄光	陸軍省	27歳
昌谷千里	判事	43歳
松涛舜成	教導職	45歳
松涛泰成	教導職	58歳
少林梅嶺	教導職	60歳
白井寛	陸軍省	27歳
白井孝義	陸軍省	30歳
白井胤良	陸軍省	37歳
白井巳胤	陸軍省	41歳
白江景由	陸軍省	42歳
白上直方	地方官	32歳
白川資訓	華族	40歳
白鳥鼎三	教導職	74歳
白根専一	内務省	32歳
白根多助	地方官	62歳
白浜実右	海軍省	36歳
城多董	元老院	49歳
志和池尭行	陸軍省	46歳
進十六	地方官	38歳
新宮駟	海軍省	43歳
神宮司純粋	海軍省	32歳
宍道幸七郎	海軍省	31歳
新庄憲章	陸軍省	28歳
新荘直陳	華族	25歳
進藤重知	陸軍省	33歳
進藤長安	陸軍省	31歳
新保正	陸軍省	30歳
神保新作	陸軍省	33歳
神保正十	陸軍省	36歳
神保日淳	教導職	49歳
神力之進	陸軍省	31歳
す		
末川久敬	海軍省	36歳
末弘孝彝	陸軍省	36歳
末弘直方	警視庁	34歳
須賀政蔵	陸軍省	30歳
菅井誠美	警視庁	32歳
菅覚阿	教導職	47歳
菅田直輝	陸軍省	39歳
菅波允升	陸軍省	29歳
菅野順	陸軍省	28歳
菅埜尚喬	陸軍省	34歳
菅野覚兵衛	海軍省	37歳
菅野退輔	海軍省	30歳
菅原恭助	陸軍省	22歳
菅原思朗	海軍省	34歳
杉亨二	太政官	53歳
杉治平	陸軍省	40歳
杉実信	工部省	46歳
杉孫七郎	宮内省	46歳

人名	所属	年齢
杉盛道	海軍省	38歳
杉生多四郎	陸軍省	23歳
杉浦幸治	陸軍省	31歳
杉田豊実	陸軍省	34歳
杉溪言長	華族	14歳
椙原透	陸軍省	26歳
杉村愿簡	陸軍省	24歳
杉本重遠	警視庁	35歳
杉本直形	陸軍省	42歳
杉本芳熙	検事	43歳
杉山三男	陸軍省	28歳
杉山由哲	陸軍省	29歳
杉山孝敏	司法省	42歳
須崎三郎	陸軍省	39歳
図師民嘉	工部省	27歳
調所広丈	開拓使	41歳
鈴木安民	陸軍省	38歳
鈴木栄澄	陸軍省	33歳
鈴木慧淳	教導職	31歳
鈴木重郎	陸軍省	33歳
鈴木義雄	警視庁・陸軍省	36歳
鈴木清聡	警視庁・陸軍省	31歳
鈴木敬事	陸軍省	29歳
鈴木幸次郎	陸軍省	31歳
鈴木在寛	陸軍省	41歳
鈴木知康	陸軍省	27歳
鈴木奉憲	陸軍省	38歳
鈴木為義	陸軍省	29歳
鈴木常武	陸軍省	30歳
鈴木直義	陸軍省	26歳
鈴木正言	陸軍省	48歳
鈴木昌平	陸軍省	29歳
鈴木良光	陸軍省	32歳
鈴木利亨	陸軍省	29歳
鈴木畏三郎	陸軍省	32歳
鈴木貫一	外務省	39歳
鈴木金蔵	外務省	41歳
鈴木尚寛	海軍省	37歳
鈴木精忠	陸軍省	31歳
鈴木大三郎	海軍省	28歳
鈴木大亮	開拓使	39歳
鈴木利亨	大蔵省	36歳
鈴田宣貞	陸軍省	30歳
須藤貞教	陸軍省	31歳
須藤定穀	陸軍省	32歳
須藤綱一	海軍省	36歳
須永武義	陸軍省	27[26]歳
周布公平	太政官	31歳
澄田定興	陸軍省	32歳
摺沢静夫	陸軍省	28歳
諏訪重中	陸軍省	40歳
諏訪親良	陸軍省	32歳
諏訪好和	陸軍省	33歳
諏訪棲	警視庁・陸軍省	27歳
諏訪忠誠	教導職(華族)	60歳
せ		
青蔭雪鴻	教導職	50歳
清閑寺経房	華族	15[16]歳
清閑寺盛房	華族	36歳
揖斐章	陸軍省	37歳

人名	所属	年齢
関新平	判事	39歳
関成功	陸軍省	40歳
関定暉	陸軍省	37歳
関迪教	陸軍省	39歳
関鰲巓	教導職	59歳
関義臣	判事	42歳
関博直	華族	27歳
関文炳	海軍省	31歳
関無学	教導職	63歳
関川尚義	陸軍省	45歳
関口貞斎	陸軍省	33歳
関口久照	判事	42歳
関口隆吉	地方官	45歳
関口忠篤	大蔵省	49歳
関沢明清	内務省	48歳
石泉信和	教導職	52歳
関本茂行	陸軍省	31歳
関谷銘二郎	陸軍省	21歳
関屋生三	判事	46歳
瀬崎久誠	陸軍省	32歳
瀬戸競	陸軍省	33歳
瀬戸口重雄	陸軍省	32歳
瀬戸山長祥	警視庁・陸軍省	33歳
瀬名義利	陸軍省	29歳
妹尾義稠	警視庁・陸軍省	40歳
世良田弥	陸軍省	27歳
芹沢政温	判事	42歳
千家尊紀	華族	19歳
千家尊福	教導職(華族)	36歳
仙石久利	華族	61歳
仙石政固	宮内省	38歳
千住成貞	海軍省	36歳
千田貞幹	陸軍省	28歳
千田登文	陸軍省	34歳
千田貞暁	地方官	45歳
仙波種艶	陸軍省	30歳
仙波太郎	陸軍省	26歳
仙波永孚	海軍省	26歳
そ		
宗重正	華族	34歳
宗義和	華族	63歳
曹溪牧宗	教導職	62歳
相馬充胤	華族	62歳
副島仲謙	陸軍省	35歳
副島種臣	宮内省	53歳
副島種藤	海軍省	29歳
副島信陽	海軍省	26歳
曽我千三郎	陸軍省	30歳
曽我祐準	陸軍省	38歳
祖式可守	陸軍省	26歳
曽田儀一	陸軍省	33歳
曽田美成	陸軍省	28歳
率溪考恭	教導職	45歳
曽祢荒助	陸軍省	32歳
曽根二郎	陸軍省	27歳
曽根良一	陸軍省	35歳
曽根俊虎	海軍省	34歳
園基資	華族	25歳
園基祥	華族	48歳
園池公静	華族	46歳

人名	所属	年齢
園池実康	華族	24歳
園田孝吉	外務省	33歳
園田弘	判事	42歳
薗田守宣	教導職	38歳
園田安賢	陸軍省・警視庁	31歳
染川済	陸軍省・警視庁	38歳
染川行義	海軍省	39歳
染木清懿	陸軍省	37歳
曽山庸	陸軍省	42歳
た		
他阿尊教	教導職	71歳
醍醐忠敬	華族	32歳
醍醐忠順	華族	51歳
平浄宣	教導職	15歳
田内三吉	陸軍省	27歳
高井敬義	陸軍省	37歳
高丘礼季	華族	16歳
高丘紀季	華族	49歳
高岡増隆	教導職	58歳
高木一蔵	陸軍省	46歳
高木栄之	陸軍省	36歳
高木作蔵	陸軍省	26歳
高木秀臣	司法省	47歳
高木正善	華族	28歳
高木正坦	華族	52歳
高木彝二郎	陸軍省	29歳
高木英次郎	海軍省	30歳
高木三郎	外務省	40歳
高岸文喬	陸軍省	26歳
高木勤	判事	36歳
高木安行	海軍省	37歳
高倉永則	華族	15歳
高桑忠基	陸軍省	30歳
高坂静好	陸軍省	35歳
高崎五六	地方官	45歳
高崎正風	宮内省	45歳
高崎親章	警視庁	28歳
高沢正宜	陸軍省	30歳
高沢重道	検事	45歳
高志大了	教導職	44歳
高塩又四郎	判事	44歳
高階経徳	宮内省	47歳
高島鞆之助	陸軍省	36歳
高嶋信茂	陸軍省	38歳
高城義孝	陸軍省	31歳
高州忠光	陸軍省	27歳
高杉春祺	海軍省	31歳
高瀬貞者	陸軍省	29歳
高瀬精	陸軍省	27歳
高瀬盛脩	陸軍省	29歳
高田政久	海軍省	28歳
高田忠良	陸軍省	26歳
高田信清	陸軍省	31歳
高田籌雄	海軍省	29歳
高田賢龍	教導職	63歳
高田善一	陸軍省	33歳
高千穂有綱	華族	25歳
高塚泰久	陸軍省	27歳
鷹司熙通	陸軍省	26歳
高辻修長	宮内省	41歳

人名	所属	年齢
高藤三郎	大蔵省	53歳
高野瀬廉	海軍省	26歳
高野保建	華族	44歳
高橋生皮	陸軍省	38歳
高橋栄司	海軍省	41歳
高橋清行	警視庁・陸軍省	35歳
高橋小十郎	陸軍省	28歳
高橋駒彦	陸軍省	29歳
高橋種生	陸軍省	38歳
高橋智久	陸軍省	39歳
高橋忠敏	陸軍省	34歳
高橋豊蔵	陸軍省	39歳
高橋信宝	陸軍省	33歳
高橋春庵	陸軍省	29歳
高橋藤吾	警視庁・陸軍省	34歳
高橋平治	陸軍省	26歳
高橋維則	陸軍省	33歳
高橋義輝	陸軍省	37歳
高橋利安	陸軍省	37歳
高橋新吉	地方官・大蔵省	36歳
高畠信貫	陸軍省	46歳
高畠眉山	海軍省	54歳
高浜順之	陸軍省	27歳
高藤正誼	陸軍省	27歳
高松寛剛	陸軍省	32歳
高松公村	華族	24歳
高松実村	華族	39歳
高松称	海軍省	34歳
田上俊介	陸軍省	30歳
田上覚	陸軍省	33歳
高峰涼樹	陸軍省	31歳
鷹森茂	陸軍省	45歳
多賀谷正輔	陸軍省	30歳
高安知明	海軍省	46歳
高柳定常	陸軍省	34歳
高柳致知	陸軍省	47歳
高柳信昌	陸軍省	36歳
高山喜英	警視庁・陸軍省	35歳
高山信明	陸軍省	32歳
高山則通	陸軍省	33歳
高山一祥	警視庁	54歳
田川篤忠	判事	43歳
田川忠順	陸軍省	39歳
田川正要	陸軍省	35歳
瀧千尋	陸軍省	31歳
瀧弥太郎	判事	39歳
瀧吉弘	内務省	39歳
瀧断泥	教導職	44歳
瀧谷琢宗	教導職	45歳
瀧野盤	陸軍省	35歳
瀧野直俊	海軍省	35歳
瀧本美輝	陸軍省	36歳
田口直美	陸軍省	29歳
田口悳	海軍省	40歳
田口義尚	海軍省	37歳
詫摩之武	大蔵省(地租改正局)	49歳
宅和誠之助	陸軍省	26歳
武井守正	内務省	39歳
竹内真彦	陸軍省	38歳
竹内正策	陸軍省	30歳

人名	所属	年齢
竹内久孝	陸軍省	28歳
竹内盛雅	陸軍省	36歳
竹内鉄次	陸軍省	24歳
竹内鉸次郎	陸軍省	29歳
竹内惟忠	華族	23歳
竹内治則	華族	45歳
竹内正信	宮内省	45歳
武内誠之	陸軍省	32歳
竹垣直行	陸軍省	39歳
竹腰正美	華族	62歳
武司重緯	陸軍省	42歳
竹下篤敬	海軍省	36歳
竹下津一	陸軍省	31歳
竹下盛武	陸軍省	41歳
竹添進一郎	大蔵省	39歳
竹田実行	陸軍省	35歳
竹田春風	工部省	36歳
武田建貞	陸軍省	31歳
武田信賢	陸軍省	30歳
武田信恭	陸軍省	32歳
武田省三郎	陸軍省	31歳
武田秀山	陸軍省	28歳
武田敬孝	宮内省	61歳
武田義徹	教導職	59歳
武冨邦鼎	海軍省	29歳
竹中経義	陸軍省	26[27]歳
竹中謙輔	陸軍省	27歳
竹中安太郎	陸軍省	35歳
竹野敏行	判事	43歳
竹橋尚文	陸軍省	30歳
竹花彪三郎	陸軍省	26歳
武久昌孚	判事	44歳
武弘亘路	陸軍省	31歳
建部秀隆	華族	24歳
武部廉三	陸軍省	35歳
岳邨静彦	陸軍省	33歳
武谷豊	陸軍省	28歳
竹屋光冨	華族	21歳
竹屋光昭	華族	44歳
竹屋光有	華族	70歳
田実貞徳	警視庁・陸軍省	33[37]歳
田嶋応親	陸軍省	30歳
田尻稲次郎	大蔵省	29歳
田尻唯一	海軍省	31歳
田尻愛種	陸軍省	32歳
田代郁彦	海軍省	38歳
田代基徳	陸軍省	39歳
多田可磨	陸軍省	33歳
多田保房	陸軍省	29歳
多田正英	陸軍省	38歳
多田好問	太政官	36歳
館興敬	地方官	41歳
立花輝幸	海軍省	38歳
立花種恭	華族	45歳
立花寛治	華族	24歳
橘七三郎	陸軍省	27歳
竜岡資峻	陸軍省	40歳
田付景賢	陸軍省	43歳
立田彰信	大蔵省	47歳
立田革	大蔵省	34歳

人名	所属	年齢
立見尚文	陸軍省	36歳
伊達海遵	教導職	51歳
伊達宗敦	華族	29歳
伊達宗基	華族	13[15]歳
伊達宗城	華族	63歳
伊達宗孝	華族	60歳
伊達宗陳	華族	21歳
伊達宗徳	華族	51歳
伊達宗紀	華族	91歳
立石正義	陸軍省	31歳
立石忠興	陸軍省	36歳
楯石駛二郎	警視庁・陸軍省	31歳
建野郷三	地方官[宮内省]	40歳
立山頼景	陸軍省	28歳
田所美之	陸軍省	40歳
田所平左衛門	海軍省	46歳
田中温之	陸軍省	24歳
田中貫一	陸軍省	29歳
田中兼太郎	陸軍省	45歳
田中克明	陸軍省	34歳
田中国方	陸軍省	29歳
田中侍郎	陸軍省	26歳
田中新二郎	陸軍省	32歳
田中種光	陸軍省	37歳
田中忠直	陸軍省	27歳
田中忠孝	陸軍省	32歳
田中伸稲	陸軍省	30歳
田中信隣	陸軍省	27歳
田中久勝	警視庁・陸軍省	34歳
田中弘義	陸軍省	34歳
田中元朝	陸軍省	45歳
田中律造	陸軍省	25歳
田中耕造	警視庁	30歳
田中貞靖	判事	39歳
田中綱常	海軍省	39歳
田中尚房	教導職	42歳
田中不二麻呂	司法省	36歳
田中正基	陸軍省	38歳
田中光顕	陸軍省	38歳
田中芳男	内務省	41歳
田中義忠	判事	41歳
田中頼庸	教導職	45歳
棚橋照昌	陸軍省	33歳
田辺信孝	陸軍省	40[47]歳
田辺光正	陸軍省	29歳
田辺良顕	警視庁・陸軍省	47歳
田辺良成	陸軍省	33歳
田辺狷吉	陸軍省	31歳
田辺輝実	地方官	40歳
谷衛昉	華族	70歳
谷干城	陸軍省	44歳
谷勤	教導職	46歳
谷信久	海軍省	34歳
谷岡端	陸軍省	27歳
谷木義為	海軍省	36歳
谷口居治	陸軍省	29歳
谷口剛右衛門	陸軍省	35歳
谷口起孝	地方官	44歳
谷沢福秀	陸軍省	41歳
谷田栄寿	陸軍省	36歳

人名	所属	年齢
谷田義直	陸軍省	44歳
谷田文衛	陸軍省	25歳
谷村猪介	陸軍省	37歳
谷村晴光	陸軍省	31歳
谷元道之	海軍省	36歳
谷森真男	太政官	34歳
谷山隆英	陸軍省	30歳
田沼健	地方官	35歳
多納光儀	陸軍省	40歳
田原鑑一	陸軍省	28歳
田原茂穂	陸軍省	34歳
田淵義氏	陸軍省	35歳
田部正壮	陸軍省	32歳
玉井嚨虎	陸軍省	27歳
玉川一以	陸軍省	35歳
玉置勝卓	陸軍省	30[31]歳
玉置弥吉	陸軍省	27歳
玉越彪八郎	陸軍省	33歳
玉乃世履	司法省・元老院	56歳
玉野日志	教導職	48歳
玉松真幸	華族	21歳
玉虫教七	陸軍省	34歳
玉村巍	陸軍省	37歳
田村寛一	陸軍省	39歳
田村義一	陸軍省	25歳
田村義長	陸軍省	37歳
田村惟一	陸軍省	35歳
田村五郎	警視庁・陸軍省	29歳
田村胤祚	陸軍省	36歳
田村昌宗	陸軍省	47歳
田村顕利	陸軍省	27歳
田村邦栄	華族	29歳
田村崇顕	華族	23歳
田村徳秀	教導職	75歳
俵義守	陸軍省	33歳
俵田八百之助[依田]	陸軍省	33歳
ち		
近木道尚	陸軍省	33歳
近木澹吾	陸軍省	36歳
近重八潮彦	判事	39歳
近松摂真	教導職	80歳
近松沢含	教導職	46歳
近松沢心	教導職	26歳
近松朗誉	教導職	74歳
千種有任	華族	46歳
千種有冬	華族	25歳
千坂高雅	地方官	40歳
知識兼治	陸軍省	32歳
樗木政章	陸軍省	34歳
千谷敏徳	判事	41歳
秩父忠然	海軍省	37歳
千葉荊叟	教導職	87歳
張英則	陸軍省	49歳
長円立	教導職	45歳
長冰	陸軍省	33歳
長耕造	陸軍省	31歳
長南通久	陸軍省	34歳
丁野遠影	警視庁	50歳
つ		
塚原周造	内務省	32歳

人名	所属	年齢
塚本勝嘉	陸軍省	35歳
塚本芳郎	陸軍省	23歳
塚本明毅	内務省	48歳
津軽承叙	華族	41歳
津軽承昭	華族	40歳
津川顕蔵	警視庁・陸軍省	40歳
津川謙光	陸軍省	20歳
津川日済	教導職	70歳
月岡才蔵	陸軍省	37歳
築山英一	陸軍省	29歳
筑紫応記	陸軍省	32歳
辻正忠	陸軍省	39歳
辻春十郎	陸軍省	24歳
辻顕高	教導職	57歳
辻新次	文部省	39歳
津下弘	陸軍省	31歳
辻松三郎	海軍省	39歳
辻本義政	陸軍省	32歳
津田教脩	陸軍省	31歳
津田孝太郎	陸軍省	32歳
津田出	陸軍省・元老院	49歳
津田信行	陸軍省	35歳
津田宗時	陸軍省	43歳
津田要	地方官	34歳
津田真道	元老院	52歳
土御門晴栄	華族	22歳
土屋可成	陸軍省	35歳
土屋平四郎	海軍省	41歳
土屋光春	陸軍省	33歳
土屋元成	陸軍省	35歳
土屋挙直	華族	29歳
土屋寅直	華族	61歳
土山沢映	教導職	38歳
筒井元彦	陸軍省	32歳
筒井義信	陸軍省	35歳
都築直基	陸軍省	30歳
堤永類	陸軍省	33歳
堤董真	海軍省	46歳
堤功長	華族	36歳
堤正已	判事	43歳
堤正誼	宮内省	47歳
皷包武	陸軍省	35歳
恒川東学	教導職	62歳
角田忠行	教導職	47歳
椿愛	陸軍省	47歳
椿忠矩	陸軍省	26歳
椿冕	陸軍省	20歳
椿綏	陸軍省	26歳
津吹弥兵衛	陸軍省	39歳
坪井航三	海軍省	38歳
坪郷義行	陸軍省	31歳
津村秀之	陸軍省	32歳
津村一郎	判事	34歳
津守国美	華族	51歳
津留親友	陸軍省	42歳
津留新	陸軍省	48歳
鶴田皓	検事・元老院	46歳
鶴見数馬	陸軍省	21歳
鶴峯申敬	判事	40歳
て		

人名	所属	年齢
鄭永寧	外務省	52歳
出口尚義	陸軍省	35歳
手嶋孝基	陸軍省	38歳
出嶋久保	陸軍省	34歳
手塚亘道	海軍省	37歳
寺井行篤	陸軍省	39歳
寺内清祐	陸軍省	33歳
寺内正毅	陸軍省	29歳
寺岡求馬	海軍省	37歳
寺師純雄	海軍省	29歳
寺島秋介	陸軍省・警視庁	39歳
寺島直	判事	44歳
寺島宗則	元老院[参議]	49歳
寺田貞一	開拓使・陸軍省	30歳
寺田忠道	陸軍省	28歳
寺田利正	陸軍省	44歳
寺田道千	海軍省	41歳
寺田錫類	陸軍省	27歳
寺西積	海軍省	36歳
寺本龍夫	陸軍省	33歳
照井長柄	教導職	62歳
照山秀範	警視庁	45歳
出羽実智	陸軍省	37歳
と		
土居宗明	陸軍省	36歳
土居徹	判事	38歳
土居通夫	判事	43歳
土井忠直	華族	29歳
土井利恒	華族	33歳
東胤城	華族	43歳
東海大株	教導職	64歳
東郷実教	陸軍省	42歳
東郷八郎左衛門	陸軍省	23歳
東郷平八郎	海軍省	34歳
東郷正路	海軍省	28歳
東條英教	陸軍省	25歳
東城脩	海軍省	38歳
藤堂高矩	陸軍省	38歳
藤堂高潔	華族	44歳
藤堂高邦	華族	35歳
藤堂高猷	華族	68歳
藤堂高義	華族	18歳
遠田六郎	陸軍省	39歳
遠武秀行	海軍省	39歳
遠山規方	陸軍省	33歳
遠山春平	陸軍省	34歳
遠山友悌	華族	23歳
遠山友禄	華族	62歳
通山星定	教導職	65歳
冨樫高明	陸軍省	34歳
戸叶正明	大蔵省(地租改正局)	45歳
土岐頼徳	陸軍省	38歳
土岐裕	海軍省	34歳
土岐頼知	華族	32歳
時沢義実	陸軍省	32歳
時任為基	開拓使	39歳
時目義一	陸軍省	34歳
常磐井円禎	教導職	69歳
常盤井尭凞	教導職(華族)	37歳
徳川義礼	華族	18歳

人名	所属	年齢
徳川茂栄	華族	50歳
徳川茂承	華族	37歳
徳川慶勝	華族	57歳
徳川達孝	華族	16歳
徳田誠一	陸軍省	29歳
徳田正稔	陸軍省	33歳
徳大寺公弘	華族	18歳
徳大寺実則	宮内卿	42歳
得能良介	大蔵省	56歳
徳久元成	陸軍省	37歳
徳久武宜	海軍省	29歳
十倉高行	陸軍省	33歳
床次正精	検事	39歳
常世長胤	教導職	49歳
戸沢光徳	陸軍省	29歳
戸沢正定	華族	20歳
戸沢正実	華族	49歳
利井明朗	教導職	49歳
戸田康泰	華族	21歳
戸田耕蔵	陸軍省	35歳
戸田雅喬	海軍省	51歳
戸田秋成	元老院	35歳
戸田氏共	工部省	27歳
戸田氏良	華族	42歳
戸田慧隆	教導職	61歳
戸田忠綱	華族	41歳
戸田忠友	教導職(華族)	34歳
戸田忠義	華族	17歳
戸田忠行	華族	34歳
戸田忠至	華族	72歳
戸田光則	華族	53歳
橡内元吉	開拓使・陸軍省	28歳
戸塚正一	陸軍省	37歳
戸塚積斎	海軍省	49歳
戸塚文海	海軍省	46歳
百々貞賀	陸軍省	34歳
十時虎雄	陸軍省	27歳
戸波留郎	陸軍省	29歳
利根忠親	海軍省	43歳
殿井隆興	陸軍省	32歳
殿木経正	海軍省	40歳
戸原槙国	判事	37歳
土肥淳朴	陸軍省	37歳
土肥好敏	陸軍省	28歳
土肥原良永	陸軍省	32歳
外松孫太郎	陸軍省	34歳
冨尾木知一	陸軍省	39歳
冨岡伊三郎	陸軍省	26歳
冨岡三造	陸軍省	31歳
富岡定恭	海軍省	27歳
富岡敬明	地方官	59歳
富岡百錬	教導職	45歳
富小路敬直	宮内省	39歳
富沢憭	警視庁・陸軍省	21[31]歳
富田質称	陸軍省	28歳
富田春壁	陸軍省	34歳
富田治二	陸軍省	29歳
冨田通安	陸軍省	45歳
富田鉄之助	外務省	なし
富田冬三	内務省	42歳

人名	所属	年齢
富永直尋	陸軍省	22歳
富永政利	陸軍省	37歳
富永正直	陸軍省	36歳
富永冬樹	判事	39歳
冨原玄八	陸軍省	31歳
友岡正順	陸軍省	31歳
知田正言	陸軍省	36歳
友田美喬	陸軍省	32歳
友野雄介	海軍省	31歳
友平親徽	陸軍省	41歳
友安治延	陸軍省	36歳
外山譲麿	華族	10歳
豊岡健資	華族	36歳
豊岡隨資	華族	67歳
豊崎信	陸軍省	21歳
豊嶋陽蔵	陸軍省	23歳
豊住秀堅	海軍省	36歳
鳥居忠宝	華族	36歳
鳥居忠章	海軍省	48歳
鳥居断三	判事	43歳
鳥居直樹	判事	41歳
鳥尾小弥太	陸軍省	34歳
鳥瀬睦義	陸軍省	30歳
頓野克	陸軍省	37歳
な		
内藤安宅	陸軍省	31歳
内藤思睿	陸軍省	41歳
内藤思義	陸軍省	32歳
内藤新一郎	陸軍省	24歳
内藤冨五郎	陸軍省	31歳
内藤直之	陸軍省	35歳
内藤之厚	陸軍省	34歳
内藤文成	華族	26歳
内藤正明	陸軍省	36歳
内藤基	陸軍省	26歳
内藤政挙	華族	31歳
内藤存守	教導職	50歳
内藤耻叟	地方官	54歳
内藤政養	華族	24歳
内藤政共	華族	22歳
内藤政義	華族	61歳
直江日讃	教導職	54歳
直樹俊海	教導職	80歳
中定勝	判事	41歳
中智清	陸軍省	35歳
仲東白	陸軍省	23歳
中井応義	陸軍省	35歳
中井荘介	陸軍省	35歳
中井弘	工部省	41歳
中井益裕	陸軍省	35歳
中居安行	陸軍省	31歳
永井大佐久	陸軍省	30歳
永井実行	警視庁・陸軍省	33歳
永井恒明	陸軍省	38歳
永井尚服	華族	48歳
永井直哉	華族	31歳
永井直諒	華族	32歳
永井久一郎	内務省	29歳
長井利英	海軍省	47歳
長井直喬	陸軍省	36歳

人名	所属	年齢
中泉正	陸軍省	35歳
長江清人	陸軍省	27歳
中尾敬	陸軍省	22歳
中尾真晃	判事	34歳
長尾景直	警視庁・陸軍省	44歳
長尾顕慎	華族	30歳
長尾定明	陸軍省	35歳
中岡黙	陸軍省	34歳
中岡祐保	陸軍省	30歳
長岡重弘	判事	47歳
長岡外史	陸軍省	23歳
長岡護美	外務省	38歳
長岡宗芳	大蔵省	47歳
長岡義之	大蔵省	41歳
永岡保義	陸軍省	36歳
中上川彦次郎	外務省	27歳
中川重之	陸軍省	30歳
中川勝敏	陸軍省	44歳
中川審六郎	陸軍省	35歳
中川千尋	陸軍省	38歳
中川冬得	陸軍省	39歳
中川義正	陸軍省	51歳
中川興長	華族	28歳
中川忠純	検事	41歳
中川久昭	華族	61歳
中川久成	華族	31歳
中川守脱	教導職	77歳
中川祐順	警視庁・陸軍省	30歳
中川義香	海軍省	34歳
仲木之植	陸軍省	33歳
中隈源四郎	陸軍省	37歳
永倉秀明	陸軍省	29歳
長坂昭徳	陸軍省	35歳
長崎義方	海軍省	27歳
長崎彊	判事	34歳
中里禎一	陸軍省	26歳
中沢永秀	陸軍省	36歳
中沢文治	判事	31歳
中沢重業	判事	33歳
長沢義之	陸軍省	33歳
長沢子之助	陸軍省	29歳
長沢理宓	陸軍省	30歳
長沢六郎	陸軍省	38歳
永沢正常	警視庁	35歳
中島重信	陸軍省	37歳
中島謙吉	陸軍省	34歳
中島信近	判事	41歳
中島才吉	外務省	35歳
中島錫胤	判事	52歳
中島信行	元老院	35歳
中島永元	文部省	37歳
中島盛有	大蔵省	40歳
中嶋行正	陸軍省	30歳
中嶋勝良	陸軍省	38歳
中嶋成道	陸軍省	47歳
中嶋村懋	陸軍省	37歳
中嶋康直	陸軍省	24歳
中嶋良寛	陸軍省	33歳
中條政恒	地方官	40歳
中城直楯	陸軍省	40歳

人名	所属	年齢
長瀬時衡	陸軍省	45歳
長瀬良行	陸軍省	33歳
中園実元	華族	16歳
中園実受	華族	36歳
中田時懋	陸軍省	28歳
中田憲信	判事	46歳
長田清蔵	海軍省	35歳
永田亀	陸軍省	25歳
永田寛彰	陸軍省	32歳
永田任之	陸軍省	37歳
永田盛庸	警視庁・陸軍省	36歳
永田賛知	海軍省	38歳
永田恒信	海軍省	34歳
永田嘉之	海軍省	51歳
中谷直温	陸軍省	34歳
中谷浩	陸軍省	31歳
永谷清隆	陸軍省	26歳
永谷信言	陸軍省	28歳
永谷常脩	警視庁・陸軍省	35歳
長束清俊	陸軍省	42歳
中司俊哉	陸軍省	44歳
中西夷挺	陸軍省	27歳
中西喜一郎	陸軍省	35歳
中西千馬	陸軍省	30歳
中野公武	陸軍省	32歳
中野能介	陸軍省	33歳
中野健明	外務省	37歳
中野資明	海軍省	34歳
中野武営	内務省	33歳
長野文炳	判事	36歳
永野由義	陸軍省	27歳
永野輗太郎	陸軍省	31歳
中院通規	陸軍省	25歳
中院道富	華族	56歳
中林長国	海軍省	27歳
中原熊	陸軍省	31歳
中原久亮	陸軍省	28歳
中原孫市	陸軍省	31歳
中原義信	陸軍省	31歳
永原好豊	海軍省	28歳
永原永正	海軍省	35歳
永久政敏	陸軍省	29歳
永淵明奥[永渕]	海軍省	31歳
永松東海	陸軍省	41歳
長松幹	編修官	47歳
永見裕	陸軍省	42歳
中御門経明	華族	31歳
中御門神海	教導職	74歳
中御門寛麿	海軍省	29歳
中溝保辰	海軍省	49歳
中溝為雄	海軍省	31歳
永嶺源吉	陸軍省	25歳
長嶺譲	陸軍省	53歳
中牟田倉之助	海軍省	44歳
中村重遠	陸軍省	41歳
中村巨訓	陸軍省	37歳
中村心明	陸軍省	31歳
中村隆英	陸軍省	27歳
中村仲庵	陸軍省	25歳
中村信道	陸軍省	34歳

人名	所属	年齢
中村芳彦	陸軍省	35歳
中村政雄[正雄]	陸軍省	28歳
中村政定	陸軍省	36歳
中村正寿	陸軍省	28歳
中村正信	陸軍省	35歳
中村正良	陸軍省	45歳
中村光議	陸軍省	27歳
中村無一	陸軍省	24歳
中村宗則	陸軍省	37歳
中村基俊	海軍省	37歳
中村雄次郎	陸軍省	29歳
中村義明	陸軍省	38歳
中村義厚	陸軍省	32歳
中村好照	陸軍省	25[35]歳
中村和義	陸軍省	29歳
中村弥	陸軍省	33歳
中村鋠三郎	陸軍省	27歳
中村迖好[辿好]	陸軍省	25歳
中村修	宮内省	38歳
中村介岩	教導職	59歳
中村覚	陸軍省	27歳
中村孝禧	内務省	42歳
中村舜吾	陸軍省	32歳
中村清三郎	海軍省	40歳
中村致寿	陸軍省	38歳
中村弘毅	元老院[太政官]	43歳
中村博愛	外務省	38歳
中村正亮	海軍省	36歳
中村道久	海軍省	43歳
中村元雄	大蔵省	41[42]歳
中村元嘉	判事	43歳
中村雄飛	海軍省	37歳
永持明徳	陸軍省	36歳
長森敬斐	太政官[判事]	47歳
長森良範	教導職	58歳
長屋尚緝[緯]	陸軍省	26歳
長屋喜弥太	陸軍省	43歳
長屋重名	陸軍省	38歳
長安道一	判事	41歳
中山繁次郎	陸軍省	36歳
中山備重	陸軍省	28歳
中山久亨	陸軍省	31歳
中山光雄	陸軍省	47歳
中山充蔵	陸軍省	32歳
中山庸和	陸軍省	38歳
中山摂観	教導職	73歳
中山信徴	華族	35歳
中山孝麿	華族	29歳
中山忠能	華族	72歳
中山信実	華族	16歳
永山盛輝	地方官	55歳
永山武四郎	開拓使・陸軍省	44歳
長与専斎	内務省	43歳
半井成明	陸軍省	27歳
半井忠見	教導職	68歳
長和道生	陸軍省	29歳
名倉知文	陸軍省	44歳
梨本宮守脩親王	皇族	62歳
夏目匂	陸軍省	31歳
鍋島直彬	地方官	38歳

人名	所属	年齢
鍋島直柔	華族	23歳
鍋島直虎	華族	25歳
鍋島直大	外務省	35歳
鍋島幹	地方官	37歳
生井順造	陸軍省	24歳
名村泰蔵	司法省	41歳
奈良真志	海軍省	35歳
奈良鉄次郎	陸軍省	24歳
楢崎時太郎	陸軍省	31歳
楢崎小次郎	陸軍省	27歳
楢崎熙義[照義]	海軍省	34歳
楢崎寛直	地方官	42歳
奈良林鼎	陸軍省	28歳
奈良原繁	内務省	47歳
成相武治	陸軍省	26歳
成松明賢	海軍省	44歳
成川尚義	地方官	40歳
成川万蔵	海軍省	27歳
成沢知行	陸軍省	33歳
成瀬正肥	華族	46歳
名和大年	教導職	67歳
南郷茂光	太政官[海軍省]	43歳
南條神興	教導職	67歳
南部甕男	判事	37歳
南部茂時	陸軍省	23歳
南部辰丙	陸軍省	25歳
南部稚枝	陸軍省	25歳
南部信方	華族	23歳
南部利剛	華族	55歳
南部利恭	華族	26歳
南部信民	宮内省	48歳
に		
尓玉澗	教導職	68歳
新妻英馬	陸軍省	28歳
新妻戒心	教導職	53歳
新納中三	判事	49歳
新納時亮	海軍省	34歳
新山春太郎	陸軍省	39歳
新山良知	陸軍省	27歳
二階堂順菴	陸軍省	29歳
二階堂智行	海軍省	36歳
西周	陸軍省	52歳
西寛二郎	陸軍省	35歳
西四郎	陸軍省	31歳
西徳二郎	外務省	33歳
西友輔	陸軍省	40歳
西長敬	陸軍省	27歳
西直資	海軍省	29歳
西長利	警視庁・陸軍省	38歳
西成度	判事	46歳
西池成顕	陸軍省	37歳
西五辻文仲	華族	22歳
西有穆山	教導職	59歳
西尾貞俊	海軍省	46歳
西尾忠篤	華族	31歳
西尾為忠	宮内省	39歳
西大路隆脩	華族	45[47]歳
西岡逾明	判事	44歳
西方淳一	陸軍省	28歳
西潟訥	判事	43歳

人名	所属	年齢
西川政成	陸軍省	29歳
西川為三	陸軍省	33歳
西川経武	陸軍省	34歳
西川須賀雄	教導職	43歳
錦織教久	華族	31歳
錦織久隆	華族	61歳
西沢政一	陸軍省	35歳
西島助義	陸軍省	33歳
西嶋敏[西島]	陸軍省	38歳
西島守信	陸軍省	31歳
西田明則	陸軍省	54歳
西洞院信堅	華族	75[77]歳
西洞院信愛	華族	33[35]歳
西村市三郎	陸軍省	34歳
西村譲	判事	39歳
西村捨三	内務省	38歳
西村精一	陸軍省	26歳
西村千里	陸軍省	28歳
西村惟貫	陸軍省	30歳
西村茂樹	文部省・宮内省	53歳
西村貞陽	開拓使	36歳
西村亮吉	地方官	42歳
西屋飛良来	陸軍省	26歳
西山清次	陸軍省	44歳
西山寿賀三	陸軍省	37歳
西山敏	陸軍省	29歳
西山広定	陸軍省	31歳
西山保之	陸軍省	29歳
西山隆恭	陸軍省	43歳
二條秀源	教導職	29歳
二條基弘	華族	22歳
二條秀量	教導職	52歳
西四辻公照	華族	17歳
西四辻公業	宮内省	43歳
西脇宗三郎	陸軍省	35歳
新田邦光	教導職	52歳
仁礼景範	海軍省	50歳
仁礼精加	海軍省	30歳
楡井秀昌	警視庁・陸軍省	36歳
丹羽氏厚	華族	19歳
丹羽氏中	華族	45歳
丹羽松三郎	陸軍省	35歳
丹羽維孝	工部省	30歳
丹羽瀬焜	陸軍省	33歳
丹羽長裕	華族	22歳
丹羽龍之助	司法省	34歳
庭田重文	華族	23歳
ぬ		
沼沢静雄	陸軍省	24歳
沼田九八郎	陸軍省	36歳
沼田尚庸	陸軍省	31歳
沼田又五郎	陸軍省	24歳
ね		
根岸栄	陸軍省	38[28]歳
根岸敬	判事	42歳
称寝惟則	陸軍省	26歳
根立栄	内務省	39歳
の		
能仁柏巌	教導職	53歳
納富利邦	判事	43歳

人名	所属	年齢
野木精之	陸軍省	29歳
乃木高行	海軍省	36歳
乃木希典	陸軍省	32歳
野口栄雄	陸軍省	29歳
野崎貞智	陸軍省	35歳
野崎貞澄	陸軍省	41歳
野崎貞次	陸軍省	31歳
野治鉄太郎	陸軍省	22歳
野嶋直好	陸軍省	29[31]歳
野副勤有	判事	50歳
望陀静	陸軍省	31歳
野田有忠	陸軍省	53歳
野田耕平	海軍省	44歳
野田頌容	検事	52歳
野田時敏	陸軍省	29歳
野田豁通	陸軍省	37歳
野田益晴	工部省	33歳
野津親章	陸軍省	39歳
野津鎮雄	陸軍省	46歳
野津道貫	陸軍省	40歳
野中久微	判事	35歳
野宮定功	華族	66歳
野宮定穀	華族	28歳
野部義範	警視庁	35歳
野辺俊平	陸軍省	38歳
野辺盛正	海軍省	27歳
野辺田種興	海軍省	32歳
野間駒	陸軍省	27歳
能美成一	陸軍省	25歳
野溝甚四郎	陸軍省	25歳
野村維章	検事[地方官]	36[37]歳
野村維直	陸軍省	27歳
野村内蔵輔	陸軍省	37歳
野村貞信	海軍省	46歳
野村茂樹	陸軍省	26歳
野村万里	陸軍省	30歳
野村道達	陸軍省	33歳
野村貞	海軍省	36歳
野村綱寛	海軍省	33歳
野村素介	文部省	39歳
野村靖	地方官	38[39]歳
野本静枝	陸軍省	30歳
野元正敬	陸軍省	31歳
野山忠教	陸軍省	31歳
は		
萩貞	警視庁	43歳
萩野子儀	陸軍省	32歳
萩谷義則	陸軍省	35歳
萩谷徳善	陸軍省	29歳
萩原春太郎	陸軍省	33歳
萩原員種	華族	31歳
萩原貞固	警視庁	32歳
萩原佐平太	海軍省	28歳
萩原正積	陸軍省	32歳
萩原藤吾	陸軍省	27歳
萩原盛種	陸軍省	36歳
萩原員光	華族	60歳
土師外次郎	海軍省	28歳
土師経典	判事	40歳
橋口兼器	陸軍省	45歳

人名	所属	年齢
橋口兼三	検事	53歳
橋口兼備	海軍省	57歳
橋本成博	陸軍省	32歳
橋本綱常	陸軍省	36歳
橋本之茂	陸軍省	21歳
橋本八郎	陸軍省	29歳
橋本秀則	陸軍省	27歳
橋本謙作	陸軍省	31歳
橋本謙二	陸軍省	24歳
橋本実梁	式部寮	47歳
橋本実麗	華族	72歳
橋元正明	海軍省	28歳
橋本正人	内務省	36歳
橋本安治	大蔵省	42歳
長谷信道	華族	22歳
長谷信篤	華族	63[60]歳
長谷信成	華族	40歳
長谷川貞雄	海軍省	36歳
長谷川好道	陸軍省	31歳
長谷川達海	陸軍省	23歳
長谷川正則	陸軍省	36歳
長谷川操	陸軍省	28歳
長谷川良之	陸軍省	39歳
長谷川楚教	教導職	48歳
長谷川為治	大蔵省	33歳
長谷川嘉道	工部省	37歳
長谷部円祁	教導職	30歳
長谷部辰連	開拓使	37歳
秦義応	教導職	47歳
畠山国盈	陸軍省	45歳
畠山義質	陸軍省	39歳
畑中重遠	陸軍省	39歳
旗野如水	陸軍省	28歳
波多野毅	陸軍省	34歳
波多野義次	陸軍省	36歳
波多野敬直	判事	31歳
八條隆吉	華族	33歳
蜂須賀茂韶	外務省	35歳
八田知行	陸軍省	32歳
八田良種	海軍省	32歳
八田知紀	宮内省	享年75歳
服部保親	陸軍省	35歳
服部道門	陸軍省	42歳
服部尚	陸軍省	30歳
服部直彦	陸軍省	26[25]歳
服部元良	教導職	62歳
服部春平	海軍省	32歳
服部潜蔵	海軍省	29歳
花井信	陸軍省	33歳
花岡正貞	陸軍省	32歳
花形勝則	陸軍省	38歳
花園実延	華族	29[30]歳
華園沢称	教導職(華族)	29歳
花田耕作	陸軍省	30歳
花田尚衛	海軍省	41歳
花房義質	外務省	39歳
羽入方矩	陸軍省	32歳
羽川文四郎	陸軍省	31歳
馬場氏連	海軍省	49歳
馬場新八	海軍省	33歳

人名	所属	年齢
馬場正雄	陸軍省	26歳
馬場命英	陸軍省	30歳
馬場素彦	陸軍省	34歳
馬場練兵	海軍省	29歳
浜口英幹	海軍省	51歳
浜弘一	大蔵省	33歳
浜田信正	陸軍省	32歳
浜野純一	陸軍省	36歳
浜武慎	海軍省	42歳
葉室長邦	華族	42歳
波母山考信	教導職	59歳
早井亜幹	陸軍省	42歳
早尾海雄	教導職	37歳
早川省義	陸軍省	29歳
早川外	陸軍省	35歳
早川勇	司法省	49歳
早川怡与造	陸軍省	27歳
早崎源吾	海軍省	28歳
早崎七郎	海軍省	30歳
林昭正	陸軍省	31歳
林紀	陸軍省	37歳
林忠夫	陸軍省	29歳
林徳門	陸軍省	24歳
林直矢	陸軍省	31歳
林信春	陸軍省	33歳
林八郎	陸軍省	26歳
林隼之輔	陸軍省	33歳
林久実	陸軍省	26歳
林秀芳	陸軍省	23歳
林通嘉	陸軍省	41歳
林光隆	陸軍省	34歳
林庸雄	陸軍省	28歳
林義篤	陸軍省	40歳
林陸夫	陸軍省	39歳
林騁二	陸軍省	28歳
林勝利	警視庁・陸軍省	34歳
林清康	海軍省	38歳
林三介	検事	41歳
林茂樹	陸軍省	32歳
林誠一	警視庁・陸軍省	35歳
林董	工部省	31歳
林友幸	元老院	58歳
林昌澄	海軍省	29歳
林幸雄	海軍省	41歳
林良兆	教導職	54歳
林田少一郎	陸軍省	31歳
早田満郷	陸軍省	29歳
葉山在久	陸軍省	41歳
速水堅曹	内務省	42歳
原有信	陸軍省	24歳
原桂仙	陸軍省	40歳
原義成	陸軍省	25歳
原純介	陸軍省	31歳
原退蔵	開拓使	44歳
原胤列	陸軍省	36歳
原則義	陸軍省	37歳
原正忠	陸軍省	39歳
原道憲	陸軍省	32歳
原実員	海軍省	31歳
原権四郎	陸軍省	41歳

人名	所属	年齢
原柞胤	陸軍省	31歳
原凞政[熙政]	陸軍省	40歳
原俊則	海軍省	45歳
原知信	陸軍省	24歳
原保太郎	地方官	34歳
原隆義	工部省	45歳
原口兼済	陸軍省	32歳
原口照輪	教導職	66歳
原口針水	教導職	55歳
原田一道	陸軍省	51歳
原田適	陸軍省	44歳
原田信豊	陸軍省	29歳
原田良太郎	陸軍省	29歳
原田啓	海軍省	35歳
原田宗助	海軍省	33歳
原田種成	判事	40歳
原田元信	海軍省	45歳
原野兼	陸軍省	30歳
針生知及	判事	35歳
春木義彰	判事	39[35]歳
春田景義	陸軍省	33歳
伴親光	陸軍省	38歳
伴鉄平	陸軍省	33歳
伴凞	陸軍省	35歳
伴鉄太郎	海軍省	55歳
伴正臣	判事	52歳
伴正順	判事	38歳
伴正利	海軍省	44歳
半田隆時	陸軍省	35歳
ひ		
日向信直	陸軍省	38歳
檜垣直枝	警視庁・陸軍省	42歳
東常久	陸軍省	21歳
東禅城	教導職	55歳
東長教	開拓使・陸軍省	45歳
東久世通禧	元老院	48歳
東園基愛	宮内省	31歳
東園基敬	華族	61歳
東坊城任長	華族	43歳
東坊城信丸	華族	10歳
東村守節	陸軍省	31歳
比企福造	警視庁・陸軍省	34[24]歳
樋口誠康	華族	16歳
樋口則重	海軍省	39歳
樋口匡直	陸軍省	31歳
樋口慈綱尼	教導職	59歳
樋口光明	陸軍省	37歳
樋口龍温	教導職	81歳
肥後正奇	陸軍省	27歳
肥後芳智	海軍省	41歳
久枝喬太郎	陸軍省	26歳
久松勝成	華族	52歳
久松定弘	華族	24歳
久松定法	華族	47歳
久宗朝光	陸軍省	32歳
土方雄永	華族	30歳
土方和親	警視庁・陸軍省	30歳
土方久元	宮内省	48歳
土方雄志	華族	25歳
菱川義信	陸軍省	31歳

人名	所属	年齢
土川定次郎	陸軍省	33歳
比志島義輝	陸軍省	34歳
菱田諦賢	教導職	50歳
肥田有年	海軍省	42歳
日高壮之丞	海軍省	33歳
肥田木盛延	陸軍省	29歳
秀島成績	海軍省	43[42]歳
尾藤行雅	判事	42歳
人見元常	陸軍省	41歳
人見恒民	判事	34歳
人見寧	地方官	36[38]歳
樋野栄四郎	陸軍省・警視庁	31歳
日野資貴	華族	20歳
日野沢依	教導職	29歳
日野霊瑞	教導職	63歳
日野西光善	華族	32歳
響谷霖竜	教導職	75歳
百永亨	海軍省	43歳
樋山尚	陸軍省	29歳
兵頭雅誉	陸軍省	23歳
兵頭正懿	判事	34歳
表野九馬一	陸軍省	23歳
平井正衛	陸軍省	25歳
平井直	陸軍省	30歳
平井信義	陸軍省	30歳
平井希昌	太政官	42歳
平岩親徳	陸軍省	27歳
平尾信寿	陸軍省	33歳
平尾福三郎	海軍省	29歳
平尾八束	陸軍省	40歳
平岡芋作	陸軍省	34歳
平岡尚敬	陸軍省	33歳
平岡将勝	陸軍省	25歳
平岡通義	工部省	50歳
平賀国八	陸軍省	32歳
平賀如恒	陸軍省	43歳
平賀百左衛門	海軍省	45歳
平川信吉	陸軍省	29歳
平川光伸	判事	46歳
平佐是純	陸軍省	32歳
平佐良蔵	陸軍省	30歳
平沢道次	陸軍省	38歳
平田辰造	陸軍省	25歳
平田恒栄	陸軍省	30歳
平田尚介	陸軍省	33歳
平田憲倫	陸軍省	46歳
平田義雄	陸軍省	36歳
平田胤雄	教導職	38歳
平田東助	大蔵省	32歳
平塚知正	陸軍省	30歳
平野勝明	陸軍省	31歳
平野参郎	陸軍省	31歳
平野好省	陸軍省	30歳
平野為信	海軍省	34歳
平野毅蔵	陸軍省	29歳
平野不二彦	陸軍省	39歳
平野政行	陸軍省	26歳
平原兼論	海軍省	34歳
平松時厚	華族	36歳
平松時言	華族	56[58]歳

人名	所属	年齢
平山重義	陸軍省	29歳
平山勝全	陸軍省	36歳
平山省斎	教導職	66歳
平山藤次郎	海軍省	30歳
平山靖彦	地方官	37歳
比留間米太郎	陸軍省	29歳
比留間信良	陸軍省	24歳
広井正一郎	陸軍省	26歳
広岡逸人	海軍省	36歳
弘岡雷次郎	陸軍省	26歳
弘田親厚	陸軍省	50歳
弘田貫次郎	陸軍省	31歳
広田静逸	陸軍省	33歳
広谷隆賢	教導職	78歳
弘中忠見	陸軍省	37歳
広中勝重	陸軍省	37歳
広中俊実	陸軍省	26歳
広永行正	陸軍省	35歳
広橋賢光	内務省	26歳
広幡忠朝	華族	21歳
広幡忠礼	華族	57歳
ふ		
深江順暢	大蔵省	42歳
深尾健	陸軍省	44歳
深沢勝興	内務省	35歳
深津無一	地方官	41歳
深見鐘三郎	海軍省	26歳
深見有紀	海軍省	27歳
深見速雄	教導職	40歳
深谷周三	陸軍省	38歳
深谷高定	陸軍省	29歳
深谷又三郎	陸軍省	25歳
福井善次郎	陸軍省	29歳
福家安定	陸軍省	26歳
福井沢揚	教導職	55歳
福岡孝弟	参議・文部卿	46歳
福岡義弁	警視庁・内務省	47歳
福崎正名	陸軍省	33歳
福埼季連	教導職	48歳
福島安正	陸軍省	28歳
福島行治	海軍省	33歳
福島庸智	陸軍省	33歳
福島九成	外務省	39歳
福島敬典	海軍省	42歳
福島虎次郎	海軍省	29歳
福田篤敬	陸軍省	36歳
福田大三郎	陸軍省	25歳
福田継之	陸軍省	33歳
福田半一	陸軍省	28歳
福田行誠	教導職	76歳
福田重固	工部省	48歳
福田純一	海軍省	33歳
福田日耀	教導職	54歳
福知宜一	陸軍省	32歳
福富孝成	陸軍省	33歳
福富孝元	陸軍省	29歳
福永宗之介	陸軍省	27歳
福永定	陸軍省	29歳
福羽美静	元老院	50歳
福原信蔵	陸軍省	25歳

人名	所属	年齢
福原豊功	陸軍省	29歳
福原芳山	判事	34歳
福原政義	陸軍省	35歳
福間隆家	海軍省	32歳
福谷幹雄	陸軍省	30歳
福山堅高	教導職	49歳
福頼義臣	陸軍省	35歳
藤珍彦	教導職	46歳
藤善聴	教導職	17歳
藤要蔵	陸軍省	30歳
富士重本	陸軍省	55歳
富士万衛	陸軍省	36歳
藤井義一	陸軍省	35歳
藤井義信	陸軍省	30歳
藤井茂太	陸軍省	21歳
藤井高雅	陸軍省	35歳
藤井包総	陸軍省	31歳
藤井惇一[淳一]	陸軍省	35歳
藤井正路	陸軍省	38歳
藤井希璞	宮内省	57歳
藤井三郎	警視庁・内務省	33歳
藤井惟利	海軍省	33歳
藤井徳存	教導職	47歳
藤井光	判事	39歳
藤井正志	判事	40歳
藤井行徳	華族	26歳
藤井行道	華族	56歳
藤枝雅之	華族	24歳
藤大路納親	華族	54歳
藤岡好古	教導職	35歳
藤川為親	地方官	45歳
藤崎供秀	警視庁・陸軍省	33歳
藤崎時之介	陸軍省	40歳
藤崎成言	判事	34歳
藤沢親之	内務省	46歳
藤島正健	大蔵省	35歳
藤瀬真宜	判事	42歳
藤田行蔵	陸軍省	26歳
藤田恪	陸軍省	31歳
藤田景徳	陸軍省	35歳
藤田源太	陸軍省	31歳
藤田新一郎	陸軍省	31歳
藤田嗣章	陸軍省	27歳
藤田弼康	陸軍省	35歳
藤田益太郎	陸軍省	41歳
藤田高之	元老院	34歳
藤田幸右衛門	海軍省	32歳
富士田省三	陸軍省	26歳
藤谷琴麿	華族	14歳
藤戸永綱	海軍省	30歳
藤波言忠	宮内省	28歳
藤波教忠	華族	58歳
富士日勧	教導職	64歳
藤野正啓	編修官	55歳
藤乗日遊	教導職	63歳
藤林敏正	陸軍省	29歳
伏原宣足	華族	36歳
伏見宮貞愛親王	皇族	23歳
伏見宮貞愛親王妃利子	皇族	23歳
藤村重忠	陸軍省	35歳

人名	所属	年齢
藤村忠誠	陸軍省	28歳
藤村正彦	陸軍省	31歳
藤村葆光	陸軍省	41歳
藤村紫朗	地方官	36歳
藤村盛義	陸軍省	37歳
藤本惟徳	陸軍省	43歳
藤本太郎	陸軍省	27歳
藤本綱長	海軍省	36歳
藤本道盈	教導職	74歳
伏屋哲造	陸軍省	26歳
藤山沢證	教導職	64歳
藤原善融	教導職	43歳
藤原智親	海軍省	38歳
藤原信高	海軍省	31歳
布施善信	陸軍省	39歳
伏谷惇	陸軍省	39歳
二口時松	陸軍省	28歳
淵本久続	陸軍省	43歳
船木南水	陸軍省	32歳
船越剛	陸軍省	27歳
船越寛	工部省	43歳
船越衛	内務省	41歳
船坂信頼	陸軍省	36歳
舟橋遂賢	華族	14歳
船曳鉄門	教導職	52歳
船田増雄	陸軍省	27歳
古市秀龍	陸軍省	24歳
古海長義	海軍省	38歳
古川氏潔	陸軍省	41歳
古川宣誉	陸軍省	32歳
古川豊彭	教導職	49歳
古沢兵三郎	陸軍省	27歳
古沢康哉	陸軍省	36歳
古沢経範	外務省	36[35]歳
古沢滋	太政官	34歳
古荘幹之	陸軍省	38歳
古田章文	陸軍省	37歳
古谷半	陸軍省	29歳
古谷安民	陸軍省	29歳
古屋慊	海軍省	47歳
不破祐善	教導職	64歳
へ		
別所元牧	陸軍省	45歳
別所栄嶽	教導職	67歳
別府忠純	陸軍省	31歳
別府信夫	陸軍省	40歳
別府景通	陸軍省・警視庁	45歳
別役成義	陸軍省	37歳
別役良顕	陸軍省	32歳
ほ		
法貴忠美	陸軍省	42歳
北條氏燕	華族	51歳
北條氏恭	宮内省	36歳
北條彪吉	陸軍省	28歳
北條的門	教導職	47歳
坊城俊章	陸軍省	34歳
坊城俊政	式部寮	55歳
星為幹	陸軍省	34歳
保科正益	華族	48歳
保科正敬	陸軍省	33歳

人名	所属	年齢
星野成一	陸軍省	36歳
星野輝賢	地方官	39歳
星山臣欽	海軍省	36歳
星山貞吉	陸軍省	41歳
細井功	陸軍省	26歳
細井勝文	陸軍省	24歳
細江尚政	海軍省	30歳
細川興貫	華族	49歳
細川興嗣	華族	26歳
細川興増	教導職	36歳
細川潤次郎	元老院	47歳
細川立則	華族	49歳
細川利永	華族	52歳
細川護久	華族	42歳
細川行真	華族	39歳
細迫真璋	陸軍省	30歳
穂積丹五郎	陸軍省	27歳
穂積耕雲	教導職	55歳
穂積岑麿	華族	15歳
穂波経度	華族	44歳
穂波経藤	華族	20歳
洞松実戒	教導職	81歳
堀親義	華族	67歳
堀忠次	陸軍省	33歳
堀正施	陸軍省	35歳
堀貫通	華族	18歳
堀真五郎	判事	43歳
堀秀成	教導職	62歳
堀内利国	陸軍省	37歳
堀内亮之輔	陸軍省	34歳
堀江不可止	陸軍省	26歳
堀江芳介	陸軍省	36歳
堀江元明	陸軍省	36歳
堀江甫	陸軍省	31歳
堀尾晴義	陸軍省	40歳
堀川康隆	宮内省	45歳
堀河親賀	華族	59歳
堀河康政	華族	14[16]歳
堀田諦基	海軍省	33歳
堀田誠一	陸軍省	36歳
堀田正養	地方官	33歳
堀田正倫	華族	30歳
堀田正頌	華族	39歳
堀場精一郎	陸軍省	34歳
堀本礼造	陸軍省	29歳
本郷房太郎	陸軍省	21歳
本郷藤四郎	陸軍省	24歳
本宿宅命	海軍省	29歳
本城幾馬	陸軍省	24[34]歳
本庄俊斎	陸軍省	47歳
本庄道三	陸軍省	23歳
本庄宗武	教導職(華族)	35歳
本荘是徳	陸軍省	41歳
本荘寿巨	華族	26歳
誉田源左衛門	陸軍省	35歳
本田弘	海軍省	29歳
本田有智	海軍省	30歳
本田親之	海軍省	42歳
本田親秀	陸軍省	35歳
本田親雄	元老院	52歳

人名	所属	年齢
本多敬清	陸軍省	32歳
本多功時[本田]	陸軍省	34歳
本多忠明	華族	48歳
本多喜凞[熙]	陸軍省	29歳
本多実方	華族	19歳
本多忠直	陸軍省	36歳
本多忠禎	華族	25歳
本多忠貫	華族	48歳
本多忠伸	華族	29歳
本多忠紀	華族	62歳
本多忠寛	華族	49歳
本多忠鵬	華族	24歳
本多忠恕	華族	29歳
本多忠廉	華族	54歳
本多副元	華族	36歳
本多正憲	華族	32歳
本多正訥	華族	54歳
本多康穣	華族	46歳
本堂親徳	陸軍省	31歳
本堂親久	華族	52歳
本間順風	陸軍省	38歳
本間倹児	陸軍省	32歳
本間清雄	外務省	38歳
本間季明	判事	38歳
ま		
前島密	内務省(地租改正局)	44歳
前田以孝	陸軍省	24歳
前田義高	陸軍省	28歳
前田国橘	陸軍省	48歳
前田隆礼	陸軍省	33歳
前田亨	海軍省	40歳
前田寅雄	陸軍省	34歳
前田政四郎	陸軍省	26歳
前田喜唯	陸軍省	30歳
前田利	海軍省	43歳
前田愛之助	海軍省	37歳
前田清則	海軍省	34歳
前田献吉	外務省	46歳
前田淨一	海軍省	30歳
前田利昭	華族	31歳
前田利鬯	華族	40歳
前田利嗣	華族	23歳
前田利充	地方官	31歳
前田斎泰	華族	70歳
前田正名	大蔵省	30歳
真枝日暹	教導職	52歳
前野定雄	陸軍省	28歳
前野倍吉	陸軍省	24歳
真壁太陽	教導職	72歳
牧勇雄	陸軍省	36歳
牧順吉	陸軍省	35歳
牧兼甫	海軍省	41歳
牧命順	判事	49歳
槙正身	海軍省	34歳
真木長義	海軍省	45歳
馬来常徳	海軍省	32歳
馬来政輔	陸軍省	34歳
蒔田広孝	華族	32歳
槙峠盛敏	陸軍省	36歳
牧野毅	陸軍省	38歳

人名	所属	年齢
牧野貞直	華族	51歳
牧野留五郎	陸軍省	32歳
牧野貞寧	華族	24歳
牧野弼成	華族	27歳
牧野忠毅	華族	22歳
牧野忠泰	華族	36歳
牧野康民	華族	40歳
牧村全造	陸軍省	31歳
槙村正直	地方官	47歳
正木昇之助	判事	37歳
真崎宏治	海軍省	24歳
正光万丈	教導職	66歳
間島譲三	陸軍省	26歳
馬島譲	開拓使	43歳
増沢秀的[李的]	陸軍省	26歳
増田義時	陸軍省	31歳
増田安政	陸軍省	42歳
増田贇	司法省	43歳
増田長雄	判事	36歳
増田孫作	海軍省	48歳
益田照遠	陸軍省	38歳
益田克徳	内務省	29歳
益田勇	判事	42歳
増戸武平	判事	42歳
増野助三	陸軍省	35歳
益満邦介	陸軍省	32歳
増山正治	華族	20歳
増山正同	華族	38歳
俣賀信正	陸軍省	35歳
股野琢	太政官	43歳
町尻量衡	華族	53歳
町田実賢	陸軍省	32歳
町田実義	陸軍省	29歳
町田実秀	陸軍省	46歳
町田秀一	陸軍省	35歳
町田実隆	海軍省	28歳
町田実業	海軍省	36歳
町田久成	内務省	43歳
町田真秀	判事	44歳
松井有隣	陸軍省	42歳
松井順三	陸軍省	38歳
松井之明	陸軍省	28歳
松井信英	陸軍省	33歳
松井英忠	陸軍省	34歳
松井康英	華族	51歳
松居吉統	陸軍省	32歳
松浦安仁	陸軍省	31歳
松浦脩	華族	49歳
松浦鼎三	陸軍省	23歳
松浦敏行	陸軍省	34歳
松浦文夫	陸軍省	26歳
松浦詮	華族	41歳
松浦厚	華族	17歳
松浦豊	華族	23歳
松尾栄	陸軍省	24歳
松尾凌多	海軍省	41歳
松尾越叟	教導職	45歳
松尾臣善	大蔵省	38歳
松尾泰範	教導職	63歳
松岡利治	陸軍省	31歳

人名	所属	年齢
松岡康毅	判事	35歳
松岡重美	大蔵省	56歳
松岡時懋	教導職	55歳
松岡利紀	教導職	37歳
松岡方祗	海軍省	38歳
松岡康孝	判事	39歳
松方正義	参議・大蔵卿	45歳
松川修	陸軍省	29歳
松木正保	陸軍省	32歳
松木宗有	華族	55歳
松坂政一	陸軍省	30歳
松崎布一	陸軍省	32歳
松崎直臣	陸軍省	25歳
松下綱業	陸軍省	34歳
松下隆和	教導職	58歳
松島克巳	陸軍省	29歳
松島玄景	陸軍省	28歳
松島貞祥	陸軍省	30歳
松島善譲	教導職	75歳
松園尚嘉	華族	39歳
松田義路	陸軍省	33歳
松田金次郎	海軍省	36歳
松田忠之	陸軍省	42歳
松田俊尹	陸軍省	32歳
松田尚正	陸軍省	38歳
松田憲信	陸軍省	33歳
松田弘道	陸軍省	38歳
松田満信	陸軍省	29歳
松田尚之	海軍省	44歳
松田道夫	判事	41歳
松田道之	地方官	42歳
松平明丸	華族	20歳
松平確堂	華族	67歳
松平容大	華族	12歳
松平容保	華族	46歳
松平慶永	華族	53歳
松平慶憲	華族	53歳
松平定教	華族	24歳
松平定敬	華族	35歳
松平定安	華族	46歳
松平実因	教導職	61歳
松平乗命	華族	33歳
松平忠和	華族	30歳
松平忠敬	華族	26歳
松平忠礼	華族	31歳
松平忠恕	華族	56歳
松平太郎	外務省	なし
松平親貴	華族	43歳
松平親良	華族	71歳
松平直方	華族	25歳
松平直克	華族	41歳
松平直静	華族	33歳
松平直致	華族	32歳
松平直己	華族	49歳
松平直哉	華族	33歳
松平信庸	華族	37歳
松平信正	大蔵省	29歳
松平信安	華族	20歳
松平乗承	華族	30歳
松平武修	華族	16歳

人名	所属	年齢
松平茂昭	華族	45歳
松平義生	華族	26歳
松平頼和	華族	16歳
松平頼聡	華族	47歳
松平頼温	華族	19歳
松平頼位	華族	74歳
松平頼安	華族	25歳
松平頼縄	華族	76歳
松平頼策	華族	33歳
松平頼續	教導職	41歳
松平正直	地方官	37歳
松永正敏	陸軍省	30歳
松永雄樹	海軍省	32歳
松野篤	地方官	70歳
松野真維	教導職	44歳
松橋宗之	陸軍省	37歳
松林為秀	華族	8歳
松原敬太	陸軍省	36歳
松原晙三郎	陸軍省	31歳
松原貴速	教導職	50歳
松原正治	陸軍省	30歳
松原立三	判事	48歳
松前修広	華族	16歳
松丸熊夫	陸軍省	30歳
松見斧次郎	陸軍省	49歳
松村孝男	陸軍省	32歳
松村務本	陸軍省	33歳
松村恒久	陸軍省	38歳
松村延勝	陸軍省	32歳
松村春智	陸軍省	43歳
松村勇	陸軍省	30歳
松村淳蔵	海軍省	39歳
松村清人	教導職	55歳
松村秀実	判事	44歳
松村正命	海軍省	39歳
松村義欟	海軍省	32歳
松本鼎	陸軍省	25歳
松本順	陸軍省	49歳
松本騰四郎	陸軍省	30歳
松本徳直	陸軍省	21[31]歳
松本直正	陸軍省	47歳
松本武次	陸軍省	30歳
松本正足	陸軍省	44歳
松本正彦	陸軍省	34歳
松本箕居	陸軍省	30歳
松本誉輔	陸軍省	38歳
松本鼎	地方官	41歳
松本荘一郎	開拓使	33歳
松本等隣	教導職	77歳
松本正忠	判事	48歳
松山円瑞	教導職	55歳
松山徳門	教導職	59歳
松山忍成	教導職	59歳
万里小路通房	華族	33歳
万里小路博房	宮内省	57歳
真中忠直	内務省	44歳
真鍋斌	陸軍省	30歳
真部忍	陸軍省	45歳
馬淵清勝	陸軍省	40歳
馬淵正文	陸軍省	24歳

人名	所属	年齢
間宮信行	陸軍省	47歳
間宮四郎	陸軍省	46歳
丸井政亜	陸軍省	30歳
丸岡莞尓	式部寮	45歳
丸子方	陸軍省	25歳
丸田近方	警視庁・陸軍省	33歳
丸田正固	陸軍省	44歳
丸山直方	陸軍省	35歳
丸山直寛	陸軍省	26歳
丸山珎木[珍木]	陸軍省	29歳
丸山経行	陸軍省	36歳
丸山茂	陸軍省	29歳
丸山正発	海軍省	38歳
卍山実弁	教導職	61歳
み		
三浦義精	陸軍省	34歳
三浦自孝	陸軍省	27歳
三浦忠行	陸軍省	26歳
三浦煥	陸軍省	47歳
三浦顕次	華族	34歳
三浦安	編修官	52歳
三浦義深	海軍省	26歳
三浦功	海軍省	31歳
三浦梧楼	陸軍省	35歳
三浦重郷	海軍省	31歳
三浦実源	教導職	63歳
三浦真琴	陸軍省	37歳
三上晋太郎	陸軍省	29歳
三上徳治	陸軍省	24歳
三上三郎	海軍省	38歳
三木一	陸軍省	36歳
三木一存	陸軍省	32歳
三木教成	陸軍省	39歳
三木正記	陸軍省	29歳
御厨又蔵	陸軍省	32歳
三毛敏徳	陸軍省	38歳
三坂繁人	判事	40歳
三沢元衡	判事	37歳
三島為嗣	大蔵省	44歳
三島通庸	地方官	46歳
水島安昌	陸軍省	33歳
水谷寛得	陸軍省	31歳
水野勝毅	陸軍省	30歳
水野勝昌	陸軍省	23歳
水野慎	陸軍省	47歳
水野勝知	華族	43歳
水野忠愛	華族	24歳
水野忠敬	華族	30歳
水野忠幹	華族	43歳
水野忠精	華族	49歳
水野忠弘	華族	25歳
水野忠順	華族	57歳
水野利光	華族	19歳
水原安	陸軍省	31歳
水原頼	陸軍省	29歳
水原宏遠	教導職	73歳
水本成美	元老院	50歳
水山烈	陸軍省	32歳
溝上秀休	陸軍省	33歳
溝口清俊	陸軍省	29歳

人名	所属	年齢
溝口晋	陸軍省	27歳
溝口恒輔	陸軍省	25歳
溝口藤之進	陸軍省	24歳
溝口俊明	海軍省	39歳
溝口直正	華族	26歳
道家亀次郎	陸軍省	36歳
道島正勝	陸軍省	41歳
箕作麟祥	元老院[司法省]	35歳
光田三郎	太政官[外務省]	34歳
満田清民	警視庁・陸軍省	35歳
三竹忠侗	陸軍省	41歳
三橋有成	陸軍省	38歳
三橋勝到	警視庁	33歳
三巻弘義	陸軍省	36歳
三吉慎蔵	宮内省	50歳
三戸次行	陸軍省	42歳
三戸信義	陸軍省	27歳
三戸皆由	陸軍省	35歳
三戸華十郎	陸軍省	22歳
薬袋重郎	陸軍省	31歳
南方弥太郎	大蔵省	39歳
水無瀬保丸	華族	28歳
湊孝治	陸軍省	25歳
南小四郎	陸軍省	39歳
南保	外務省	なし
南木国定	教導職	63歳
南里俊亮	海軍省	34歳
御影池友邦	陸軍省	26歳
蓑田春尭	陸軍省	34歳
箕村保道	海軍省	38歳
箕輪醇	陸軍省	41歳
三原重雄	陸軍省	28歳
三原経是	陸軍省	41歳
三原経備	海軍省	43歳
三原重業	海軍省	27歳
壬生基修	華族	46歳
三間正弘	警視庁・陸軍省	45歳
三松小次郎	陸軍省	27歳
三村友芸	陸軍省	29歳
三村親始	判事	44歳
三村日修	教導職	58歳
三室戸治光	華族	32歳
三室戸和光	華族	39歳
三室戸陳光	華族	74[76]歳
三室戸雄光	華族	76歳
宮井定之助	陸軍省	33歳
宮内盛高	警視庁・陸軍省	36歳
宮川保之	海軍省	30歳
水谷川忠起	華族	33歳
宮木経吉	地方官	33歳
宮城彦八	陸軍省	33歳
三宅環	陸軍省	27歳
三宅泰介	陸軍省	42歳
三宅高興	陸軍省	27歳
三宅直利	陸軍省	30歳
三宅武義	陸軍省	28歳
三宅六郎	陸軍省	24歳
三宅秀	内務省	32[33]歳
三宅康直	華族	70歳
三宅康寧	華族	24歳

人名	所属	年齢
三宅康保	華族	50歳
宮崎昌三	陸軍省	32歳
宮崎正常	海軍省	43歳
宮崎定穀	陸軍省	40歳
宮崎富雄	陸軍省	29歳
宮崎政光	陸軍省	39歳
宮下慎堂	海軍省	47歳
宮島信吉	内務省	38歳
宮島誠一郎	編修官・宮内省	43歳
宮田馨	陸軍省	28歳
宮田耕介	陸軍省	34歳
宮地善春	陸軍省	33歳
宮地忠久	海軍省	31歳
宮地常雄	陸軍省	42歳
宮地静太	海軍省	31歳
宮地厳夫	教導職	34歳
宮永亨	陸軍省	31歳
宮成公貞	華族	62歳
宮成公矩	華族	29歳
宮野則凭	陸軍省	34歳
宮原正人	陸軍省	30歳
宮部賤夫	陸軍省	30歳
宮村一親	陸軍省	30歳
宮村正俊	陸軍省	32[34]歳
宮本照明	陸軍省	25歳
宮本小一	外務省	45歳
三好謹造	陸軍省	30歳
三好重臣	陸軍省	41歳
三好退蔵	判事	36歳
三好成行	陸軍省	36歳
三善克己	海軍省	27歳
三輪田高房	教導職	56歳
む		
向井義勝	海軍省	29歳
迎敦忠	海軍省	30歳
武者小路実世	司法省	39歳
牟田敬九郎	陸軍省	26歳
牟田口元学	文部省[太政官]	37歳
牟田口通照	司法省・太政官	36歳
武藤盈敏	陸軍省	30歳
武藤爽	陸軍省	37歳
武藤正寿	陸軍省	41歳
武藤喜平次	海軍省	29歳
武藤藤太	教導職	54歳
宗方成業	陸軍省	40歳
棟方武敏	陸軍省	38歳
宗像靖共	海軍省	47歳
宗重望	華族	14歳
六雄沢慶	教導職	26歳
村井寛温	陸軍省	41歳
村井清	陸軍省	44歳
村井重政	陸軍省	31歳
村井長寛	陸軍省	32歳
村井右宗	陸軍省	32歳
村井頼成	陸軍省	27歳
村尾鎌五郎	陸軍省	29歳
村岡道純	海軍省	36歳
村垣正通	海軍省	26歳
村上敬次郎	海軍省	28歳
村上三省	陸軍省	29歳

人名	所属	年齢
村上信一	陸軍省	29歳
村上伯栄	海軍省	38歳
村上半五郎	陸軍省	30歳
村上昌輔	陸軍省	30歳
村上正路	陸軍省	29歳
村上義永	陸軍省	27歳
村上慧	陸軍省	28歳
村川政一	陸軍省	30歳
村木雅美	陸軍省	25歳
村雲日栄尼	教導職	26歳
村越豊房	海軍省	25歳
邨沢金広	陸軍省	29歳
村瀬譲	陸軍省	42歳
村瀬尚伸[直伸]	陸軍省	35歳
村瀬三英	海軍省	37歳
村田経緯	陸軍省	35歳
村田惇	陸軍省	27歳
村田祥之助	陸軍省	32歳
村田経芳	陸軍省	43歳
村田治良	陸軍省	30歳
村田清昌	教導職	35歳
村田寂順	教導職	43歳
村田尋玄	教導職	76歳
村田保	太政官	39歳
村治重厚	陸軍省	37歳
村中達	陸軍省	33歳
村野高光	陸軍省	32歳
村橋久成	開拓使	39歳
村橋次郎	内務省	なし
村部芳作	陸軍省	29歳
村松魁	陸軍省	32歳
村本伝次	海軍省	36歳
村山邦彦	陸軍省	29歳
村山武教	陸軍省	26歳
村山正明	陸軍省	28歳
村山松根	宮内省	59歳
室田景辰	警視庁・陸軍省	33歳
室田武氏	海軍省	33歳
室町温興	陸軍省	37歳
め		
目加田健	陸軍省	28歳
も		
毛利倫亮	陸軍省	26歳
毛利侃次郎	華族	15歳
毛利重輔	工部省	34歳
毛利元功	華族	30歳
毛利元敏	華族	32歳
毛利元徳	華族	42歳
毛利元蕃	華族	65歳
茂木幸	陸軍省	27歳
茂木政則	陸軍省	31歳
物集高世	教導職	64歳
餅原平二	海軍省	30歳
本居豊穎	教導職	47歳
元木忠志	陸軍省	35歳
本島芳武	海軍省	50歳
元田永孚	宮内省	63歳
本野盛亨	大蔵省	45歳
本村敏夫	海軍省	26歳
本山茂任	教導職	55歳

人名	所属	年齢
本山漸	海軍省	39歳
元吉亨	陸軍省	23歳
森斐司	陸軍省	31歳
森男依	陸軍省	32歳
森可造	判事	49歳
森源三	開拓使	46歳
森氏男	陸軍省	32歳
森信一	陸軍省	39歳
森孝徳	陸軍省	48歳
森忠儀	華族	31歳
森正信	陸軍省	44歳
森雅守	陸軍省	23歳
森利邦	陸軍省	31歳
森祇敬	陸軍省	33歳
森昭治	警視庁	38歳
森醇	地方官	44歳
森有礼	外務省	34歳
森尾履素	海軍省	43歳
森尾雅一	陸軍省	36歳
森岡愿益	陸軍省	32歳
森岡昌純	地方官	47歳
森川重申	陸軍省	40歳
森川昇	陸軍省	28歳
森川植	海軍省	30歳
森下辰済	陸軍省	31歳
森下景端	教導職	57歳
森下寧一	海軍省	34歳
守田元之	陸軍省	34歳
守田利貞	陸軍省	29歳
森田義彦	陸軍省	28歳
森田邦	陸軍省	31歳
森田正樹	陸軍省	35歳
森田豊	陸軍省	34歳
森戸武矩	陸軍省	34歳
守永薫	陸軍省	36歳
守野秀善	教導職	69歳
森正多郎	陸軍省	26歳
森又七郎	海軍省	32歳
森村樹	警視庁・陸軍省	34歳
森本惟清	陸軍省	33歳
森本正治	陸軍省	28歳
守屋一	陸軍省	35歳
森山致中	陸軍省	36歳
森山茂	元老院	39歳
守山弘和	陸軍省	33歳
森脇以知	陸軍省	46歳
師岡政宜	陸軍省	34歳
諸岡頼之	海軍省	30歳
諸戸貞利	陸軍省	28歳
門司敬亮	陸軍省	25歳
門司和太郎	陸軍省	32歳
門司正人	陸軍省	34歳
や		
矢上義芳	陸軍省	28歳
八木僩作	陸軍省	37歳
八木下純	陸軍省	26歳
八木下信之	開拓使	51歳
八木俊親	海軍省	32歳
柳生俊郎	華族	30歳
柳生房義	陸軍省	44歳

人名	所属	年齢
八洲亨	海軍省	34歳
矢島為三郎	陸軍省	27歳
安井清儀	警視庁・内務省	49歳
安井富四郎	陸軍省	28歳
安井直則	海軍省	45歳
安井信胤	陸軍省	36歳
安井和三郎	陸軍省	34歳
安井譲	判事	41歳
安居修蔵	元老院	33歳
安川繁成	工部省	42歳
八杉利雄	陸軍省	35歳
安田有則	陸軍省	43歳
安田重朝	陸軍省	25歳
安田宗直	陸軍省	33歳
安田定則	開拓使	36歳
安田虎之助	海軍省	28歳
安田八束	海軍省	26歳
安永信夫	陸軍省	24歳
安場保和	元老院[地方官]	46歳
安原吉政	判事	30歳
安満伸愛	陸軍省	36歳
安村治孝	警視庁・陸軍省	37歳
安村範雄	陸軍省	27歳
矢田勝二	陸軍省	26歳
矢田秀貫	陸軍省	37歳
矢田堀鴻	内務省	52歳
谷津春三	判事	47歳
柳井顕蔵	陸軍省	29歳
柳川小五郎	陸軍省	34歳
柳篤信	陸軍省	36歳
柳楢悦	海軍省	49歳
柳沢徳忠	華族	27歳
柳沢光昭	華族	58歳
柳沢光邦	華族	27歳
柳沢保申	華族	35歳
柳下知之	陸軍省	48歳
柳田養拙	警視庁・陸軍省	37歳
柳田友郷[友卿]	開拓使	45歳
柳田暹昇	教導職	58歳
柳谷謙太郎	外務省	34歳
柳原前光	元老院	31歳
柳原光愛	華族	63歳
簗瀬新一	海軍省	30歳
矢野駒之丞[天野]	陸軍省	29歳
矢野利之	陸軍省	37歳
矢野長利	陸軍省	33歳
矢野正敬	陸軍省	25歳
矢野悌亮	陸軍省	27歳
矢野文雄	大蔵省	31歳
矢野義徹	海軍省	35歳
薮実方	華族	44歳
薮実休	華族	24歳
薮内得彦	教導職	52歳
矢吹秀一	陸軍省	33歳
矢部有	海軍省	29歳
矢部興功	海軍省	27歳
矢部常行	地方官	42歳
山井氏暉	華族	57[59]歳
山内定矩	陸軍省	27歳
山内政銓	陸軍省	30歳

人名	所属	年齢
山内堤雲	開拓使	43歳
山内通義	陸軍省	32歳
山内俊英	陸軍省	32歳
山内長人	陸軍省	31歳
山内豊誠	司法省	30歳
山内豊尹	華族	15歳
山内豊範	華族	35歳
山内芳秋	大蔵省	34歳
山尾庸三	工部卿	44歳
山岡重劼	陸軍省	41歳
山岡光行	陸軍省	28歳
山岡愨	判事	41歳
山岡鉄太郎	宮内省	45歳
山県俊信	陸軍省	33歳
山県則顕	陸軍省	36歳
山県有朋	参議・陸軍省	43歳
山県迂一	判事	38歳
山県久太郎	海軍省	42歳
山上兼善	陸軍省	36歳
山上晴登	陸軍省	29歳
山川直次郎	陸軍省	31歳
山川浩	陸軍省	36歳
山口浅次郎	陸軍省	22歳
山口圭蔵	陸軍省	20歳
山口慎吾	陸軍省	34歳
山口素臣	陸軍省	35歳
山口高尚	警視庁・陸軍省	30歳
山口孝之	陸軍省	33歳
山口長成	陸軍省	34歳
山口英治	陸軍省	29歳
山口平三郎	陸軍省	38歳
山口正路	陸軍省	29歳
山口起業	教導職	47歳
山口尚武	警視庁	59歳
山口尚芳	元老院	42歳
山口貴真	陸軍省	35歳
山口蕃昌	海軍省	37歳
山口弘達	華族	21歳
山口正定	宮内省・海軍省	38歳
山崎親俊	陸軍省	36歳
山崎桂策	陸軍省	33歳
山崎茂樹	陸軍省	41歳
山崎菅雄	陸軍省	26歳
山崎治敏	華族	23歳
山崎治祗	華族	26歳
山崎峯次郎	陸軍省	28歳
山崎景則	海軍省	43歳
山崎潔	大蔵省	43歳
山崎忠門	大蔵省	33歳
山崎直胤	大蔵省	29歳
山崎喜勝	海軍省	38歳
山沢静吾	陸軍省	36歳
山下勝長	陸軍省	34歳
山下喜一	陸軍省	37歳
山下義和	判事	38歳
山下秀実	警視庁・陸軍省	34歳
山下房親	警視庁	40[43]歳
山科言綏	華族	23[24]歳
山科言縄	華族	46歳
山科祐玉	教導職	70歳

人名	所属	年齢
山階宮晃親王	皇族	65[63]歳
山高信離	内務省	39歳
山田有信	陸軍省	32歳
山田有称	陸軍省	37歳
山田至通	陸軍省	33歳
山田一男	陸軍省	26歳
山田貞久	陸軍省	37歳
山田外男	陸軍省	28歳
山田貴之	陸軍省	31歳
山田正	陸軍省	28歳
山田知道	陸軍省	38歳
山田忠三郎	陸軍省	24歳
山田積之	陸軍省	33歳
山田俊卿	陸軍省	50歳
山田直忠	陸軍省	29歳
山田信輝	陸軍省	34歳
山田弘	陸軍省	40歳
山田弘謨	陸軍省	39歳
山田保永	陸軍省	31歳
山田万四郎	陸軍省	27歳
山田良円	陸軍省	23歳
山田和美	陸軍省	35歳
山田顕義	陸軍省・参議	37歳
山田健	陸軍省	36歳
山田時章	教導職	47歳
山田信道	判事	48歳
山田秀典	地方官	46歳
山田弁承	教導職	40歳
山地元治	陸軍省	40歳
山名義路	華族	21歳
山中恒斎	陸軍省	34歳
山中鉄太郎	陸軍省	28歳
山中信儀	陸軍省	30歳
山根修三	陸軍省	30歳
山根信成	陸軍省	31歳
山根信道	海軍省	43歳
山根益介	陸軍省	34歳
山根道章	陸軍省	33歳
山根秀介	検事	41歳
山村忠正	陸軍省	28歳
山村政久	陸軍省	28歳
山本一貫	陸軍省	44歳
山本易徳	陸軍省	32歳
山本鼎	陸軍省	29歳
山本清堅	陸軍省	なし
山本謙	陸軍省	41歳
山本謙一	陸軍省	37歳
山本重義	陸軍省	25歳
山本重太郎	陸軍省	28歳
山本祥三	陸軍省	34歳
山本住橋	陸軍省	29歳
山本忠知	陸軍省	31歳
山本千代之助	陸軍省	30歳
山本綱賀	陸軍省	31歳
山本友清	陸軍省	31歳
山本信行	陸軍省	29歳
山本登喜次	陸軍省	27歳
山本正幹	警視庁・陸軍省	34歳
山本盛英	陸軍省	39歳
山本路郷	陸軍省	35歳

人名	所属	年齢
山本悌三郎	陸軍省	24歳
山本弾	陸軍省	40歳
山本観純	教導職	52歳
山本敬玄	教導職	36歳
山本権兵衛	海軍省	29歳
山本実政	宮内省	55歳
山本実庸	華族	22[24]歳
山本清十	内務省	42歳
山本淑儀	海軍省	39歳
山本弘	元老院	44歳
山本孫六	陸軍省	29歳
山本正巳	判事	35歳
山本昌行	判事	37歳
山吉盛典	地方官	46歳
山脇巌	陸軍省	23歳
山脇錆太郎	陸軍省	32歳
山脇玄	司法省	32歳
矢守勝易	陸軍省	39歳
ゆ		
湯浅鼎	陸軍省	40歳
湯浅伍一	陸軍省	30歳
湯浅定克	陸軍省	30歳
唯我韶舜	教導職	56歳
瑜伽教如	教導職	34歳
湯川春尚	陸軍省	28歳
湯川政隆	陸軍省	29歳
湯川彰	判事	51歳
幸村常	陸軍省	23歳
行山義一	陸軍省	29歳
湯地弘	陸軍省	33歳
湯地一郎	海軍省	27歳
湯地定基	開拓使	38歳
湯地定廉	海軍省	35歳
由布利鎌	陸軍省	35歳
由良法方	陸軍省	37歳
由理滴水	教導職	59歳
よ		
与倉守人	大蔵省	53歳
余語虎三郎	陸軍省	27歳
横井鎮雄	陸軍省	35歳
横井時庸	海軍省	35歳
横井俊蔵	陸軍省	29歳
横井信之	陸軍省	34歳
横井時儀	陸軍省	32歳
横江了海	教導職	52歳
横尾道昱	海軍省	30歳
横田富行	陸軍省	36歳
横田香苗	太政官	36歳
横田国臣	検事	31歳
横地重直	陸軍省	33歳
横地剛	陸軍省	35歳
横地央信	判事	43歳
横浜慶昌	陸軍省	39歳
横幕直好	陸軍省	30歳
横道彰	陸軍省	30歳
横山軍治	陸軍省	29歳
横山友時	陸軍省	39歳
横山貞秀	大蔵省	48歳
吉井友実	元老院・工部省	53歳
吉井信発	華族	57歳

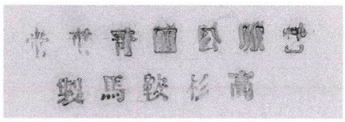
人名	所属	年齢
吉江磨磋記	陸軍省	46歳
吉岡義道	陸軍省	26歳
吉岡俊平	陸軍省	34歳
吉岡徳明	教導職	51歳
吉岡弘	判事	39歳
吉川経健	華族	26歳
吉川大順	教導職	49歳
吉川日鑑	教導職	53歳
芳川顕正	外務省[工部省]	40歳
吉沢直行	陸軍省	46歳
吉島辰寧	海軍省	37歳
吉田勝実	陸軍省	36歳
吉田健康	陸軍省	35歳
吉田源之助	陸軍省	34歳
吉田公宗	陸軍省	35歳
吉田充親	陸軍省	32歳
吉田丈治	陸軍省	32歳
吉田新作	陸軍省	27歳
吉田清一	陸軍省	32歳
吉田清成	外務省	36歳
吉田清英	地方官	41歳
吉田清貫	陸軍省	37歳
吉田友麿[麻呂]	陸軍省	30歳
吉田登	陸軍省	21歳
吉田百三	陸軍省	32歳
吉田道時	陸軍省	40歳
吉田以一	陸軍省	51歳
吉田経礼	陸軍省	37歳
吉田篤	陸軍省	27歳
吉田顕三	海軍省	33歳
吉田重親	海軍省	34歳
吉田二郎	外務省	39歳
吉田千足	判事	35歳
吉田貞一	海軍省	29歳
吉田利貞	陸軍省	29歳
吉田豊文	地方官	38歳
吉田良義	華族	44歳
吉田正春	外務省	29歳
吉竹好則	判事	38歳
吉永覚昌	教導職	46歳
吉水玄信	教導職	52歳
吉永成徳	判事	48歳
芳野親義	判事	46歳
吉原宗五郎	陸軍省	23歳
吉原重俊	大蔵省	36歳
吉弘鑑徳	陸軍省	29歳
吉堀慈恭	教導職	37歳
吉松栗助	陸軍省	32歳
吉松直枝	陸軍省	29歳
吉見直養	海軍省	33歳
吉水祥真	教導職	56歳
吉水幽誉	教導職	47歳
吉水良祐	教導職	56歳
吉村貞白	陸軍省	37歳
吉村守廉	陸軍省	31歳
吉村経義	海軍省	27歳
吉村正義	大蔵省	34歳
吉村美明	海軍省	29歳
芳村正秉	教導職	38歳
好本忠璋	陸軍省	34歳

人名	所属	年齢
吉本祐雄	判事	41歳
吉屋信近	陸軍省	36歳
依田広太郎	陸軍省	27歳
依田正忠	陸軍省	25歳
依田百川	編修官	48歳
四辻公賀	華族	41歳
四辻公康	華族	28歳
四屋恒之	編修官	50歳
米倉昌言	華族	44歳
米津政敏	陸軍省	30歳
米山倉太	陸軍省	39[29]歳
り		
李家文厚	陸軍省	46歳
李家頼蔵	陸軍省	33歳
力石知至	陸軍省	33歳
楞厳院秀盛	教導職	55歳
笠貞継	陸軍省	42歳
れ		
冷泉元誉	教導職	49歳
冷泉為理	華族	55[57]歳
冷泉為柔	華族	35歳
冷泉為紀	華族	27歳
ろ		
盧高朗	大蔵省	33歳
六郷政鑑	華族	33歳
六條有容	教導職(華族)	67歳
六條有熙[凞]	華族	17歳
六角博通	華族	46歳
わ		
若王寺遠文	華族	51歳
若代正従	海軍省	40歳
若月計介	陸軍省	33歳
若月曽一郎	陸軍省	31歳
若林太三	陸軍省	31歳
若松是則	陸軍省	33歳
若山兵弥	陸軍省	28歳
和気幸致	陸軍省	35歳
脇坂寿	華族	26歳
脇坂安斐	宮内省	42歳
脇田秀利	陸軍省	32歳
脇山暢	陸軍省	28歳
分部光謙	華族	19歳
鷲尾隆誠	華族	22歳
鷲尾隆聚	工部省	39歳
鷲頭恒太郎	陸軍省	31歳
鷲津宣光	判事	56歳
和田知貞	陸軍省	34歳
和田収蔵	判事	29歳
和田正敦	陸軍省	36歳
和田八之進	検事	45歳
和田磐春	教導職	66歳
和田正邦	陸軍省	29歳
和田正苗	陸軍省	33歳
和田盛治	陸軍省	29歳
和田安之	判事	45歳
和田義政	海軍省	48歳
和田勇馬	陸軍省	40歳
和田由旧	陸軍省	30歳
和田匡	陸軍省	28歳
綿木琢磨	陸軍省	26歳

人名	所属	年齢
渡瀬昌邦	陸軍省	29歳
和田大猪	教導職	42歳
渡辺章	陸軍省	30歳
渡辺央	陸軍省	44歳
渡辺勝重	陸軍省	32歳
渡辺鼎	陸軍省	23歳
渡辺幸正	陸軍省	32歳
渡辺章綱	華族	48歳
渡辺忠三郎	陸軍省	21歳
渡辺強恕	陸軍省	39歳
渡辺直邦	海軍省	33歳
渡辺英興	陸軍省	32[33]歳
渡辺牧雄	陸軍省	30歳
渡辺昌作	陸軍省	25歳
渡辺水哉	陸軍省	29歳
渡辺泰造	陸軍省	33歳
渡辺陸政	陸軍省	30歳
渡辺和雄	陸軍省	25歳
渡辺渉	陸軍省	25歳
渡辺忻三	海軍省	41歳
渡辺渫	陸軍省	32歳
渡辺鉄太郎	陸軍省	25歳
渡辺鼎	大蔵省	43歳
渡辺祺十郎	陸軍省	25歳
渡辺清	地方官	46歳
渡辺清	地方官	40歳
渡辺玄包	教導職	48歳
渡辺洪基	太政官	33歳
渡辺蒿蔵	工部省	38歳
渡辺重綱	陸軍省	46歳
渡辺重春	教導職	50歳
渡辺述	陸軍省	29歳
渡辺資政	教導職	67歳
渡辺驥	検事・元老院[司法省・太政官]	45歳
渡辺千秋	地方官	38歳
渡辺昇	元老院[地方官]	43歳
渡辺久	海軍省	28歳
綿貫吉直	警視庁・陸軍省	50歳
渡部時馬[渡辺]	陸軍省	28歳
渡部進	陸軍省	35歳
渡部之	陸軍省	29歳
渡部當次	陸軍省	31歳
渡部欽一郎	大蔵省	34歳
渡敬行	陸軍省	24歳
渡正元	太政官	39歳
和智重任	陸軍省	29歳
和智豊秀	陸軍省	41歳
和知蓁一郎	陸軍省	29歳
和仁元亀	海軍省	34歳

【資料】写真台紙にみる国内外の写真館

本写真帖の〈Ⅰ類 A〉〈Ⅰ類 B〉に収められた写真台紙貼の焼付4502枚のうち、約1700枚は、写真台紙に印刷局の印が無く、台紙や焼付の状態からも印刷局以外の写真館で撮影されたと判断できる。さらにそのうちの494枚の写真台紙には、37種類の写真館等の名称が記され、明治12年当時、国内外でどのような写真師が活動していたかを知る重要な史料である。ここでは、写真館等の名称が記された37種類の写真台紙および、台紙に押された印を紹介する。（但し、台紙及び印は同寸ではなく、印文を判読出来る様に倍率を変えて掲載している。）

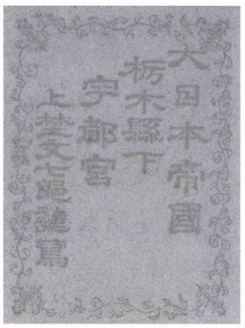


1. 青葉堂高杉鞍馬（宮城県）

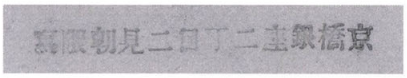
2. 青葉堂（宮城県）

3. 青葉堂玉真影喜（宮城県）

4. 三浦（秋田県）

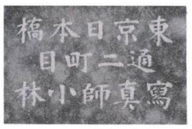


5. 上埜文七郎（栃木県）

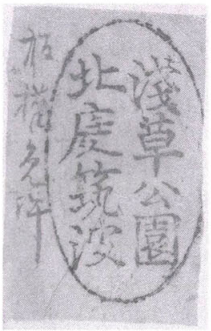


7. 二見朝隈（東京府）

6. 清水東谷（東京府）

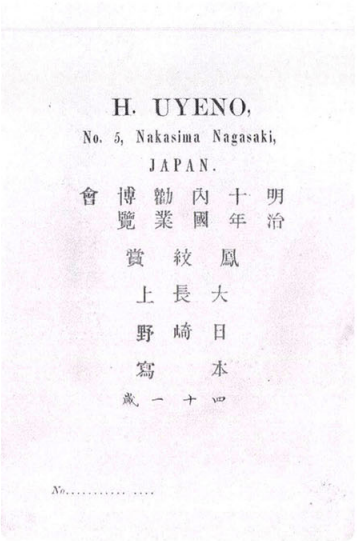


9. 小林寿三（東京府）



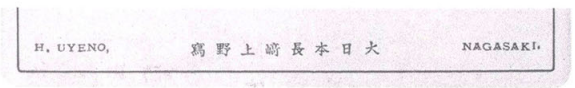
8. 北庭筑波（東京府）

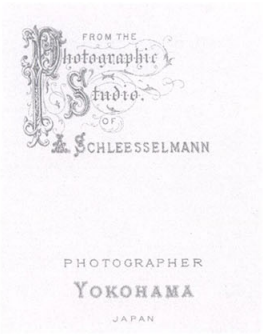
10. 鈴木真一（神奈川県）



30. 上野彦馬（長崎県）

上野彦馬の写真台紙74枚のうち、川村純義（図版33頁）の写真台紙1枚のみ、左図版のように英文の住所表記と「明治十年内國勸業博覽會　鳳紋賞」の記載がある。他はすべて、下図版のように、写真台紙下部に「大日本長崎上野寫」「H.UYENO」「NAGASAKI」と記される。





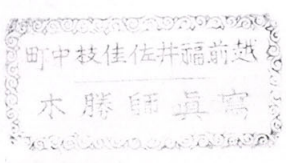
11. A.SCHLEESSELMANN（神奈川県）

12. 鈴木東谷（神奈川県）

13. 臼井秀三郎（神奈川県）

14. 吉田好二（石川県）

16. 瀬古安太郎か（岐阜県）



15. 勝木（福井県）

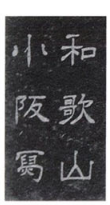
17. 水野半兵衛か（静岡県）

静岡県令大迫貞清の写真台紙に押印されているため静岡の写真師と推測される。

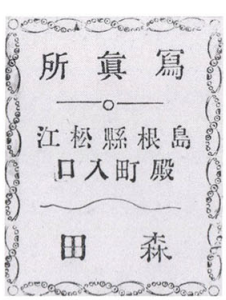
18. 宮下欽（愛知県）

19. 青山三郎（愛知県）

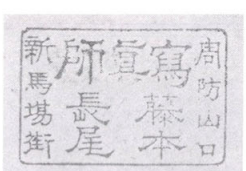
20. 澤田（大阪府）



21. 小阪（和歌山県）



22. 森田禮蔵（島根県）



23. 藤本長尾（山口県）

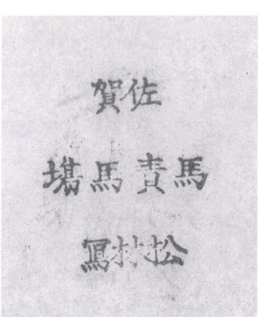
24. 小林（徳島県）

26. 最上（愛媛県）

25. 福井（徳島県）

27. 徳久（愛媛県）

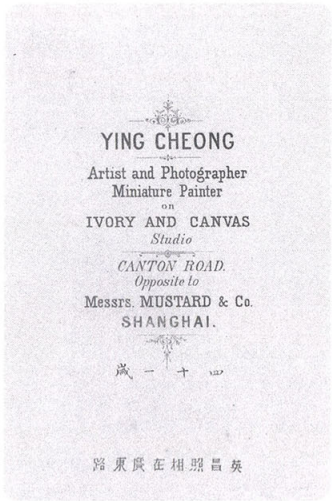
28. 池（高知県）



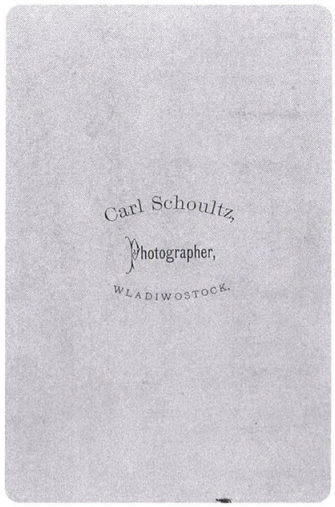
29. 松林一十（佐賀県）

写真台紙の種類

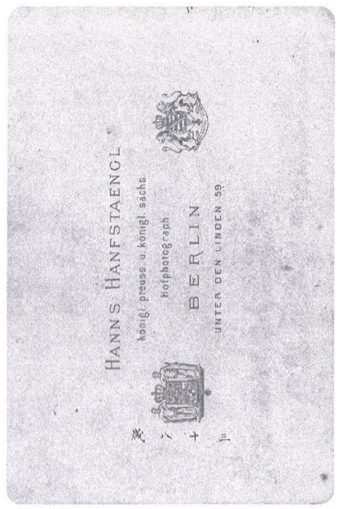
	写真師・写真館の名称（所在地）	所在地、名称等主な情報（記載のまま）	台紙の色、文様、形状	挿入枚数
1	青葉堂高杉鞍馬（宮城県）	宮城公園青葉堂高杉鞍馬製	濃黄色、無地	61
2	青葉堂(宮城県)	宮城公園青葉堂製	濃黄色、無地	7
3	青葉堂玉真影喜（宮城県）	宮城公園青葉堂寫真師玉真影喜	濃黄色、無地、角丸	12
4	三浦（秋田県）	羽後秋田古川堀反町　三浦寫	白色、無地、角丸	1
5	上埜文七郎（栃木県）	大日本帝国　栃木縣下　宇都宮　上埜文七郎謹寫	濃黄色、表面に赤色の縁取り、角丸	23
6	清水東谷（東京府）	東京濱町　清水東谷	白色、表面に褐色の一重枠、角丸	10
7	二見朝隈（東京府）	京橋銀座二丁目　二見朝隈寫	濃黄色、表面に赤色の縁取り、角丸	2
8	北庭筑波（東京府）	淺草公園　北庭筑波　板権免許	白色、無地、角丸	1
9	小林寿三（東京府）	東京日本橋通二町目　寫真師小林	白色、裏に褐色の一重枠、角丸	6
10	鈴木真一（神奈川県）	大日本横濱本町通　寫真　鈴木眞一	白色、裏面に金色で双龍の図柄、角丸	9
11	A. SCHLEESSELMANN（神奈川県）	FROM THE Photographic Studio OF A.SCHLEESSELMANN PHOTOGRAPHER YOKOHAMA JAPAN	白色、無地、角丸	18
12	鈴木東谷（神奈川県）	横濱旭通　東谷	白色、無地、角丸	23
13	臼井秀三郎（神奈川県）	横濱太田町壹丁目角　寫眞師臼井	濃黄色、無地、角丸	9
14	吉田好二（石川県）	石川縣金澤淺野川御歩町　寫眞吉田好二	濃黄色、表面に赤色の縁取り、角丸	86
15	勝木（福井県）	越前福井佐佳枝中町　寫眞師勝木	白色、表面に青色で「PORTRAIT ALBUM」と記され、同色の一重枠で囲む、角丸	1
16	瀬古安太郎か（岐阜県）	岐阜米屋町六番地寫真師　瀬古	白色、無地、角丸	3
17	水野半兵衛か（静岡県）	水野	淡茶色、表面に褐色の縁取りとその内側に白色の一重枠	1
18	宮下欽（愛知県）	愛知名古屋本町三丁目　寫眞宮下欽	白色、無地、角丸	111
19	青山三郎（愛知県）	愛知名古屋若宮前　寫眞青山三郎	白色、裏面に金色装飾文様、角丸	2
20	澤田（大阪府）	寫眞師澤田　大阪府下高鹿橋通堺筋西入	濃黄色、表面に褐色の縁取り	6
21	小阪（和歌山県）	和歌山小阪寫	濃黄色、無地、角丸	7
22	森田禮蔵（島根県）	寫眞所　島根縣松江殿町入口　森田	白色、裏面に金色装飾文様	1
23	藤本長尾（山口県）	周防山口　新馬塲街　寫眞師　藤本長尾	白色、無地、角丸	3
24	小林（徳島県）	徳嶋籃屋町　寫眞　小林	白色、無地、角丸	2
25	福井（徳島県）	徳嶋通町 福井　H.HUKUY.	白色、無地、角丸	1
26	最上（愛媛県）	宇和島　亀手通ヵ　最上製	白色、表面に褐色の一重枠、角丸	1
27	徳久（愛媛県）	宇和島堀端寫眞師徳久	白色、表面に褐色の一重枠、角丸	1
28	池（高知県）	高知縣崖町上ノ丁南側寫眞師 池、「鏡」「谷」朱文印	白色、無地、角丸	1
29	松林一十（佐賀県）	佐賀　馬責馬塲　松林寫	白色、無地、隅切	2
30	上野彦馬（長崎県）	大日本長崎上野寫 H.UYENO, NAGASAKI.	白色、裏面に赤色の一重枠、角丸	74
31	YING CHEONG（清国、上海）	YING CHEONG CANTON ROAD Opposite to Messrs.MUSTARD & Co. SHANGHAI. 英昌照相在廣東路	黄色、無地、角丸	1
32	Carl Schoultz（ロシア、ウラジオストック）	Carl Schoultz, Photographer, WLADIWOSTOCK.	淡赤茶色、表面に茶色の一重枠、角丸	1
33	HANNS HANFSTAENGL（ドイツ、ベルリン）	HANNS HANFSTAENGL BERLIN UNTER DEN LINDEN 59	白色、表面に写真館名あり、焼付の周囲に淡茶色の一重枠、角丸	2
34	WALERY（フランス、パリ）	9BIS RUE DE LONDRES PARIS PHOTOGRAPHIE WALERY	白色、表面に写真館名あり、角丸	2
35	ELLIOTT AND FRY（英国、ロンドン）	ELLIOTT AND FRY Photographers 55, Baker Street, London	白色、表面に写真館名あり、角丸	1
36	JAMES S. BAYFIELD（ニュージーランド、ウェリントン）	JAMES S. BAYFIELD, PHOTO. 10,WELLINGTON TERRACE, BAYSWATER ROAD,W.	白色、無地、表面に写真館名あり、角丸	1
37	ALMAN&Co（米国、ニューヨーク）	ALMAN&Co 172 Fifth Avenue AND Lake Mahopac　New York.	白色、表面に写真館名あり、角丸	1



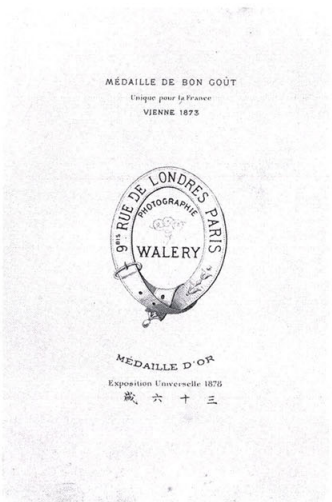
31. YING CHEONG（清国、上海）



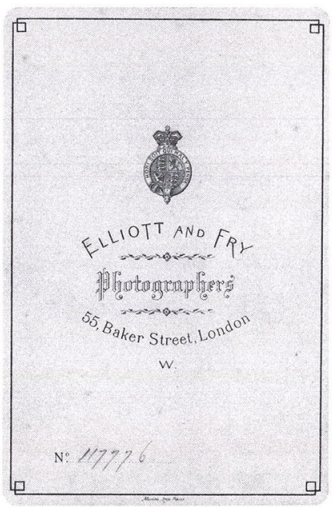
32. Carl Schoultz
（ロシア、ウラジオストック）



33. HANNS HANFSTAENGL
（ドイツ、ベルリン）



34. WALERY（フランス、パリ）



35. ELLIOTT AND FRY
（英国、ロンドン）

35. 表面

36. JAMES S. BAYFIELD
（ニュージーランド、ウェリントン）

37. ALMAN&Co
（米国、ニューヨーク）

37. 表面

謝辞

本展覧会の開催にあたり、次の機関、各氏から調査等のご協力をいただきました。
ここに厚く御礼申し上げます。

独立行政法人 国立印刷局 お札と切手の博物館
独立行政法人 国立文化財機構 東京国立博物館
北海道立文書館
当庁書陵部（図書課、編修課）

佐々木利和
永野正宏
住吉朋彦
恵美千鶴子
松村記代子
庄司敏子
詫間直樹
小森正明
梶田明宏
相曽貴志
内藤一成
杉本まゆ子
豊田恵子
白石烈
宮間純一
辻岡健志
岩壁義光
宮崎康充
（順不同、敬称略）

明治十二年 明治天皇御下命
「人物写真帖」 ― 四五〇〇余名の肖像

三の丸尚蔵館展覧会図録No.61

編集　宮内庁三の丸尚蔵館
制作　野崎印刷紙業株式会社
翻訳　藍谷勝
発行　宮内庁
平成25年1月12日発行

©2013,The Museum of the Imperial Collections

・各展覧会図録中，作品名や作者，制作年などの表記は，図録発行当時のものです。

・三の丸尚蔵館の展覧会図録の著作権はすべて宮内庁に属し，本ファイルを改変，再配布するなどの行為は有償・無償を問わずできません。

・三の丸尚蔵館の展覧会図録（PDF ファイル）に掲載された文章や図版を利用する場合は，書籍と同様に出典を明記してください。また，図版を出版・放送・ウェブサイト・研究資料などに使用する場合は，宮内庁ホームページに記載している「三の丸尚蔵館収蔵作品等の写真使用について」のとおり手続きを行ってください。なお，図版を営利目的の販売品や広告，また個人的な目的等で使用することはできません。

明治十二年 明治天皇御下命
「人物写真帖」 ― 四五〇〇余名の肖像

三の丸尚蔵館展覧会図録No.61

編集　宮内庁三の丸尚蔵館
制作　野崎印刷紙業株式会社
翻訳　藍谷勝
発行　宮内庁
平成25年1月12日発行

©2013,The Museum of the Imperial Collections